

は じ め に

本シラバスは、京都大学薬学部（２０１８年度以降入学者）の２０２３年度開講科目（一部、全学共通科目として提供されている科目を含む）に関して、講義、演習および実習の目的・趣旨、内容の概略等を科目別に紹介したものです。学生諸君が選択科目の履修計画を立てるに当たって科目の選定に役立ててください。また、教員が各自の授業内容を明示することによって、他の教員による授業内容との連携を把握するのに役立ててください。

京都大学薬学部（２０１８年度以降入学者）における学習に本シラバスが大いに活用されることを望みます。

京都大学薬学部

II. シラバス

基礎物理化学 (熱力学)	87	薬理学 II	172
基礎有機化学 I	89	薬理学 III	174
基礎有機化学 II	91	薬剤学 I (製剤学)	176
基礎化学実験	93	薬剤学 II (薬物動態学)	178
「薬の世界」入門	96	ファーマコメトリクス論	180
健康・生命科学入門	98	バイオ医薬製剤論	182
情報基礎	100	臨床疾病論 A	183
情報基礎演習	102	臨床疾病論 B	185
科学コミュニケーションの基礎と実践		臨床疾病論 C	187
(薬・英) A-E3	104	臨床疾病論 D	189
科学コミュニケーションの基礎と実践		臨床疾病論 E	191
(薬・英) B-E3	106	臨床疾病論 F	193
有機化学 I	108	臨床疾病論 G	195
有機化学 II	110	薬物治療学	197
有機化学 III	112	地域医療薬学	199
有機化学 IV	114	医療社会学	201
医薬品化学	116	薬局方・薬事関連法規	203
天然物薬学 I (天然物化学)	118	薬学研究 SGD 演習	205
天然物薬学 II (ケミカルバイオロジー)	120	基礎創薬研究	207
天然物薬学 III (生薬学・漢方)	122	基礎臨床研究	209
生命有機化学演習	124	基礎バイオインフォマティクス	210
創薬有機化学演習	126	ゲノムインフォマティクス	212
物理化学 I (量子化学)	128	医薬品開発プロジェクト演習 1	214
物理化学 II (電気化学・ナノ化学)	130	医薬品開発プロジェクト演習 2	216
物理化学 III (構造化学)	132	多職種連携医療体験実習	218
物理化学 IV (生物物理化学)	134	早期専門研究体験 (前期)	220
分析化学 I (化学分析学)	136	早期専門研究体験 (後期)	222
分析化学 II (放射化学)	138	専門研究導入演習 A	224
分析化学 III (機器分析化学)	140	専門研究導入演習 B	225
分析化学 IV (臨床分析学)	142	医療薬学ワークショップ	226
基礎科学演習	144	医療薬学実験技術	228
生物化学 I (物質生化学)	146	学術情報論	230
生物化学 II (代謝生化学)	148	医療実務事前学習	231
生物化学 III (分子生物学)	150	臨床薬学総論	234
生物化学 IV (応用生物分子科学)	152	薬学専門実習 I	235
生物化学 V (細胞生物学)	154	薬学専門実習 II	237
感染防御学 I	156	薬学専門実習 III	241
感染防御学 II	158	薬学専門実習 IV	243
衛生薬学 I (健康化学)	160	病院実務実習	245
衛生薬学 II (環境衛生学)	162	薬局実務実習	247
生理学 I (基礎生理学)	164	特別実習 (薬科学科)	249
生理学 II (病態生理学)	166	特別実習 (薬学科)	250
生理学 III (臨床生理学)	168	薬学科モデルコアカリキュラム/科目対応表	251
薬理学 I	170		

科目ナンバリング		U-LAS13 10003 LJ60							
授業科目名 <英訳>		基礎物理化学（熱力学） Basic Physical Chemistry (thermodynamics)			担当者所属 職名・氏名		薬学研究科 准教授 星野 大 薬学研究科 助教 河野 健一		
群	自然科学科目群		分野(分類)		化学(基礎)		使用言語	日本語	
旧群	B群		単位数	2単位	週コマ数	1コマ	授業形態	講義	
開講年度・ 開講期	2023・後期	曜時限	金2		配当学年	主として1回生	対象学生	理系向	
【授業の概要・目的】									
物質の状態と自然界におけるさまざまな反応の進行を規定する巨視的ポテンシャル論としての熱力学の基礎的内容を、生物科学や薬学の基礎的問題を加味した講義と演習をとおして履修する。									
【到達目標】									
気体の分子運動とエネルギーの関係について説明できる。 熱力学における系、外界、境界について説明できる。 熱力学関数を使い、自発的な変化の方向と程度を予測できる。 ギブズエネルギーと平衡定数の関係を説明できる。 平衡定数に及ぼす圧力および温度の影響について説明できる。 希薄溶液の束一的性質について説明できる。 活量と活量係数について説明できる。									
【授業計画と内容】									
第1回 熱力学の位置づけ 第2回 気体の性質と熱力学第一法則 第3回 エンタルピー、熱容量、熱化学 第4回 エントロピーと熱力学第二法則 第5回 ギブス自由エネルギー 第6回 第一法則と第二法則の結合 第7回 統計力学エントロピーと熱力学エントロピー 第8回 純物質の相図 第9回 相の安定性と相転移 第10回 ギブスエネルギーと化学ポテンシャル 第11回 混合のギブスエネルギー、エンタルピー、エントロピー 第12回 ラウールの法則・ヘンリーの法則 第13回 希薄溶液の束一的性質 第14回 実在溶液と活量・活量係数 <期末試験> 第15回 フィードバック									
【履修要件】									
特になし									
【成績評価の方法・観点】									
期末試験 (85点) と平常点 (小テスト：15点) により評価する。									
-----基礎物理化学（熱力学）(2)へ続く↓↓↓									

基礎物理化学（熱力学）(2)

[教科書]

プリントを配布する。

[参考書等]

（参考書）

千原・中村訳『アトキンス「物理化学（上）第10版」』（東京化学同人）ISBN:978-4-8079-0908-7

原田 義也『物理化学入門シリーズ「化学熱力学」』（掌花房）ISBN:978-4-7853-3418-5

大沢 文夫『大沢流手づくり統計力学』（名古屋大学出版会）ISBN:978-4-8158-0674-3

[授業外学修（予習・復習）等]

毎回小テストを実施するので、その内容をしっかり復習・理解すること。

[その他（オフィスアワー等）]

熱力学は自然科学の基礎なので、高校理科の履修経歴によらず理解に努めてください。

科目ナンバリング		U-LAS13 10007 LJ60							
授業科目名 <英訳>		基礎有機化学 I Basic Organic Chemistry I			担当者所属 職名・氏名		薬学研究科 講師 瀧川 紘		
群	自然科学科目群		分野(分類)		化学(基礎)		使用言語	日本語	
旧群	B群		単位数	2単位	週コマ数	1コマ	授業形態	講義	
開講年度・ 開講期	2023・前期	曜時限	水3		配当学年	主として1回生	対象学生	理系向	
[授業の概要・目的]									
すべての分子は原子と原子がつながって構成されている。では原子同士はどうして結合し、多様な分子を形成するのであろうか？分子は化学構造の違いによりどうして異なる性質（物理的、化学的もしくは生物学的）を示すのだろうか？分子の多様な反応性（結合の生成や切断）は、何に起因するのだろうか？これらの疑問に答える学問が有機化学である。 本講義では、有機化学の講義と問題演習を通し、分子の構造と性質および反応性に関する基本概念・知識を習得することを目的とする。また、本授業では医薬品化学や生命化学に関連したトピックも時折紹介し、マクロな生命現象にも有機化学が深く関わっていることについて紹介する。 有機化学の基礎は整然と体系化されており、決して暗記の学問ではない。すなわち、有機反応は自然節理に基づいて進行するものであるため、基本原理や法則を理解することが重要である。有機化学の基礎を習得すれば、複雑な現象も自己で考えることができるようになり、サイエンスとしての広がりや奥の深さを堪能することができるようになるだろう。誰でも全く新しい化合物や反応の創造者となり得る魅力的な学問である。ぜひとも前向きな態度で受講していただきたい。									
[到達目標]									
・有機電子論的および軌道論的観点から有機化合物の基本的性質を理解する。 ・有機化合物の命名の基礎について理解し、化合物名と分子構造を関連づけられる。 ・有機分子の三次元構造を理解し、安定構造を説明できる。 ・アルカンやシクロアルカン、アルケンの基本的な性質を理解できる。 ・有機反応における電子の動きを矢印で説明できる。									
[授業計画と内容]									
1. オリエンテーション：身の回りの有機化学 （1章）有機分子の構造と結合：イオン結合と共有結合、Lewis構造式 2. （1章）有機分子の三次元構造：原子軌道と分子軌道、混成軌道 3. （2章）分子の極性：電気陰性度、共鳴効果、誘起効果 （2章）酸と塩基1：ブレンステッド酸・塩基、ルイス酸・塩基 4. （2章）酸と塩基2：酸・塩基の強さ 5. （3章）アルカン1：様々な官能基 6. （3章）アルカン2：立体配座 （4章）シクロアルカン1：命名法、シーストランス異性、環ひずみ、立体配座 7. 中間演習 8. （4章）シクロアルカン2：環反転 9. （9章）立体化学：キラリティー、エナンチオマー、ジアステレオマー 10. （5章）有機反応の概観：反応機構の書き方 11. （5章）有機反応の記述：エネルギー図、反応速度、遷移状態、中間体 12. （6章）アルケンとアルキン：命名法、安定性 13. （6章）アルケンの反応：求電子付加反応 14. 総合学習と復習									
-----基礎有機化学Ⅰ(2)へ続く↓↓↓-----									

基礎有機化学Ⅰ(2)

- 1 5. 期末試験
- 1 6. フィードバック

履修者の理解度を意識しながら授業の進度を調整することがあるため、上記授業計画と若干のずれが生じることがある。

[履修要件]

本講義は薬学部のクラス指定授業である。他学部生の履修も可能であるが、基礎有機化学Ⅱ（大野浩章教授）と連携して講義を行うので、連続した履修が望ましい。

[成績評価の方法・観点]

- ・定期試験（筆記）の成績によって評価する。

[教科書]

John McMurry 『マクマリー有機化学 生体反応へのアプローチ（日本語訳版）』（東京化学同人）
ISBN:978-4-8079-0691-8

[参考書等]

（参考書）

David R. Klein 『クライン有機化学(上)』（東京化学同人）ISBN:9784807909032（補足資料として講義に使用）

奥山格、杉村高志 『電子の動きでみる有機反応のしくみ』（東京化学同人）（入門からやり直したい場合・初学者用）

Jonathan Clayden, Stuart Warren, Nick Greeves 『ウォーレン有機化学 上・下（日本語訳版）』（東京化学同人）（さらに深く勉強したい場合）

『分子模型セット』（分子の立体構造を理解するために役立ちます。「HGS分子構造模型 立体化学学生用セット」を推奨します。）

[授業外学修（予習・復習）等]

予習：授業時の理解を深めるため、あらかじめ教科書の指定された範囲を通読することを薦める。

復習：教科書にある練習問題や章末問題を解いて自分の理解度を確認する。全く分からなかった問題があった場合は、教科書にあるその項目や授業時に記録したノート等を精読して復習する。

[その他（オフィスアワー等）]

質問や要望については対面（薬学部本館A404）、Zoom、メール、Slackなどによって受け付ける（具体的な方法は随時連絡する）。

科目ナンバリング		U-LAS13 10010 LJ60											
授業科目名 <英訳>		基礎有機化学II Basic Organic Chemistry II				担当者所属 職名・氏名		薬学研究科 教授 大野 浩章					
群	自然科学科目群			分野(分類)		化学(基礎)			使用言語		日本語		
旧群	B群			単位数		2単位		週コマ数		1コマ		授業形態	講義
開講年度・ 開講期	2023・後期		曜時限	水3				配当学年	主として1回生		対象学生	理系向	
[授業の概要・目的]													
本講義では、アルケンとアルキンの反応、芳香族化合物、および置換反応や脱離反応等の基本を修得するために、類例を用いて化合物の構造と性質を理解するとともに、各反応のメカニズムを理論的に考察する。													
[到達目標]													
・アルケンの代表的な反応を理解し、反応の立体選択性について説明できる。 ・アルキンの代表的な反応を理解し、簡単な合成計画を立案できる。 ・芳香族化合物の基本的性質と反応性を理解し、求電子置換反応について考察できる。 ・立体化学について理解し、立体異性体や反応の立体化学について説明できる。 ・置換反応と脱離反応を理解し、反応物の構造や反応溶媒が与える効果について考察できる。 ・アルコール、アミン、および関連化合物の基本的な性質と反応性を理解する。													
[授業計画と内容]													
基本的に以下の計画に従って講義を進める。 ただし講義の進捗状況に応じて、同一テーマの回数を変えることがある。													
1. アルケンとアルキンの反応1：アルケンのハロゲン化、水和、還元 2. アルケンとアルキンの反応2：アルケンの酸化、ラジカル付加 3. アルケンとアルキンの反応3：共役ジエンとアルキンの反応 4. 芳香族化合物1：命名、Hückel則、芳香族ヘテロ環、多環式芳香族 5. 芳香族化合物2：求電子置換反応 6. 芳香族化合物3：求電子置換反応における置換基効果、酸化と還元 7. 立体化学1：エナンチオマー、ジアステレオマー、メソ化合物 8. 立体化学2：反応の立体化学 9. ハロゲン化アルキル1：命名、合成、SN2反応 10. ハロゲン化アルキル2：SN1反応 11. ハロゲン化アルキル3：脱離反応 12. ハロゲン化アルキル4：反応のまとめ 13. アルコール、フェノールとチオール1：命名、アルコールの合成と反応 14. アルコール、フェノールとチオール2：チオール、エーテル、スルフィド 15. フィードバック（別途連絡予定）													
[履修要件]													
本薬学部開講科目「基礎有機化学Ⅱ」は、同じく薬学部開講科目である「基礎有機化学Ⅰ」（瀧川講師）を基盤とした発展的な授業であるため、連続した履修が望ましい。													
-----基礎有機化学Ⅱ(2)へ続く↓↓↓-----													

基礎有機化学II(2)

[成績評価の方法・観点]

定期試験（80%）及び平常点（出席状況及び小テスト、20%）により評価する。
ただし、対面での定期試験が実施困難な場合には、平常点の割合を40%に上げる可能性がある。

[教科書]

マクマリー 『有機化学－生体反応へのアプローチ』（東京化学同人）ISBN:9784807906918（本教科書に従って授業を進める）

[参考書等]

（参考書）

ブルース 『有機化学 第7版 下』（化学同人）ISBN:9784759815856

『HGS立体化学分子模型 4010学生用セット』（丸善）（他の分子模型でも代用できる）

[授業外学修（予習・復習）等]

授業終了後に対応する教科書範囲について各自で復習を行うこと。
すべての例題と章末問題に取り組むことが望ましい。

[その他（オフィスアワー等）]

1 回生はクラス指定の時間に受講すること。

小テストの解答例は次回講義冒頭で説明する。小テストは試験対策だけではなく、日々の復習の材料として利用することが望ましい。

授業や授業外学習においてわからないことがあれば、講義終業後あるいはオフィスアワー中に質問に来ることを歓迎する。

科目ナンバリング		U-LAS13 10011 EJ60						
授業科目名 ＜英訳＞	基礎化学実験 Fundamental Chemical Experiments			担当者所属 職名・氏名	人間・環境学研究科 基礎化学実験授業担当教員			
					人間・環境学研究科 教授 田部 勢津久 人間・環境学研究科 教授 吉田 寿雄 地球環境学舎 教授 梶井 克純 国際高等教育院 教授 中村 敏浩 人間・環境学研究科 助教 山本 旭 人間・環境学研究科 非常勤講師 山本 潤子 人間・環境学研究科 教授 内本 喜晴 人間・環境学研究科 教授 小松 直樹 人間・環境学研究科 非常勤講師 高橋 知子 人間・環境学研究科 助教 高橋 弘樹 薬学研究科 講師 加藤 洋平 薬学研究科 講師 瀧川 紘 薬学研究科 助教 秋葉 宏樹 薬学研究科 助教 金尾 英佑 理学研究科 准教授 植田 浩明 理学研究科 助教 八田 振一郎 理学研究科 助教 金 賢得 農学研究科 助教 宋和 慶盛 工学研究科 助教 中尾 章人 理学研究科 准教授 小坂谷 貴典 理学研究科 助教 山本 遥一 化学研究所 助教 川口 祥正 化学研究所 助教 黄瀬 雄司			
群	自然科学科目群		分野(分類)	化学(基礎)		使用言語	日本語	
旧群	B群		単位数	2単位	週コマ数	2コマ	授業形態	実験
開講年度・ 開講期	2023・後期	曜時限	月3・4/火3・4/水3・4/金3・4		配当学年	主として1回生	対象学生	理系向
【授業の概要・目的】								
物質を実際に手に取り、その性質や反応を自分の目で観察することは、物質をあつかう学問である化学を学習する上で欠くことのできない作業である。目に見えない原子・分子の世界に対する洞察力を養うことが本実験の主要な目的である。また、化学実験についての器具操作法と実験手法を習得すると同時に、実験の安全と環境保全の基本を学ぶことをあわせて目的とする。								
【到達目標】								
・実験の目的と各操作の関連について理解する。 ・実験の進め方を理解し、実際の操作が正しくできるようにする。 ・実験実習をこなし、レポートを作成するアカデミックスキルを養う。								
【授業計画と内容】								
(履修申し込みについては、 https://www.z.k.kyoto-u.ac.jp/zenkyo/guidance の「実験・実習の履修について」を参照すること。)								
下記のテーマについて、実験を行う。								
----- 基礎化学実験(2)へ続く↓↓↓ -----								

基礎化学実験(2)

1. 実験内容のガイダンスと実験ノート、レポートの書き方および試薬や器具の取り扱いなどの安全に関する講義 【全2回】
2. 無機定性分析実験 【全4回】
 - (1) Fe^{3+} , Al^{3+} の基本反応
 - (2) Ag^{+} , Pb^{2+} の基本反応・ Cu^{2+} , Bi^{3+} の基本反応
 - (3) Ni^{2+} , Co^{2+} , Mn^{2+} , Zn^{2+} の基本反応
 - (4) 未知試料の分析
3. 容量分析実験 【全4回】
 - (1) キレート滴定
 - (2) ヨードメトリー
 - (3) 酸化反応速度の測定
 - (4) 活性炭によるシュウ酸の吸着
4. 有機化学実験 【全4回】
 - (1) 有機定性分析
 - (2) 色素と蛍光
 - (3) 4-メトキシアニリンのアセチル化
 - (4) ニトロ化および加水分解
5. フィードバック【1回】

フィードバックの方法は別途連絡します。

[履修要件]

高等学校等において化学実験の経験がなくても履修可能である。

[成績評価の方法・観点]

本実験は化学実験の基礎であり、実際の操作を繰り返し行うことが不可欠であるので出席を重視する。「出席と参加状況（配点の割合：約50%）」と「レポートと実験態度（配点の割合：約50%）」によって評価する。

[教科書]

京都大学大学院人間・環境学研究科化学部会編『基礎化学実験・第2版 増補』（共立出版）ISBN: 978-4-320-04494-4（京大生協吉田ショップにて販売。昨年のもとの内容が異なるところがあるので新しいものを購入すること。）

（関連URL）

<http://www.chem.zenkyo.h.kyoto-u.ac.jp/>

[授業外学修（予習・復習）等]

実習を行うに当たっては、事前に必ず教科書を読んで、予習しておくこと。実験ノートを用意し、実習の進め方をまとめておくことよい。実習後は結果をまとめて考察し、期限までにレポートを必ず提出すること。

[その他（オフィスアワー等）]

本実験は理系学部の専門授業の基礎となる実験授業であり、化学関係の全学共通科目講義授業とあわせて履修することが望ましい。

基礎化学実験(3)へ続く↓↓↓

基礎化学実験(3)

【注意事項】

- 履修申し込みについては、 <https://www.z.k.kyoto-u.ac.jp/zenkyo/guidance> の「実験・実習の履修について」を参照のこと。
- 詳細は9月中旬にKULASISに掲示するので注意すること。
- 受講申込を済ませた後、初回の授業である実験ガイダンスに必ず出席すること。
- 履修希望者多数の場合は抽選を行う。
- 履修登録確定後、教科書および保護メガネを購入すること。また万一に備え、教育推進・学生支援部で取り扱っている「学生教育研究災害傷害保険」に加入しておくこと。
- Web配信動画資料「基礎化学実験 基本操作」を参考にしてもらいたい（上記[教科書]の欄にある関連URLを参照のこと）。

科目ナンバリング		U-LAS40 20019 LJ26					
授業科目名 <英訳>	「薬の世界」入門 Introduction to Pharmaceutical Sciences and Ethics			担当者所属 職名・氏名	薬学研究科 教授 土居 雅夫 薬学研究科 教授 中山 和久 薬学研究科 教授 松崎 勝巳 薬学研究科 教授 加藤 博章 薬学研究科 教授 掛谷 秀昭 薬学研究科 教授 小野 正博 薬学研究科 教授 高須 清誠 薬学研究科 教授 竹本 佳司 薬学研究科 教授 山下 富義 薬学研究科 教授 樋口 ゆり子 化学研究所 准教授 今西 未来 薬学研究科 准教授 杉山 直幸 薬学研究科 准教授 白川 久志 薬学研究科 准教授 津田 真弘		
群	健康・スポーツ科目群	分野(分類)	健康・スポーツ科学(発展)	使用言語	日本語		
旧群	B群	単位数	2単位	週コマ数	1コマ	授業形態	講義
開講年度・ 開講期	2023・前期	曜時限	月3	配当学年	主として1回生	対象学生	理系向
[授業の概要・目的]							
薬学は、医薬品の創製、生産、管理、適正使用にわたる広範な領域を包括する総合科学である。その一方で、薬の有効性・安全性に関する科学的観点からは、人類の健康に貢献する責任を負う実学でもある。このような視点から、本授業では薬学の学問・研究、社会的使命、薬学倫理等の概要を理解することを目的とする。薬学は総合科学であるため各専門家によるリレー形式とするが、教科書を使用し、適宜プリントにて補足することによって学習の助けとする。							
[到達目標]							
・ 科学者としての研究倫理と創薬研究者としての生命倫理に関する基本的事項を理解する。 ・ 医薬品が創り出される基本原理と医薬品の適正使用を理解し、創薬研究・医療薬学研究に必要な学問の役割とそれらの関わりについて説明できる。 ・ レポート作成に関する基本的事項を習得し、それらを遵守してレポートを作成できる。 ・ 各講義課題に対して自ら調査・考察することで、自主的、継続的に取り組む能力を養う。							
[授業計画と内容]							
以下のテーマについて講義する。 1. 導入講義、および、薬の標的タンパク質の構造をみる [加藤] 2. 自然に学ぶ薬づくり [掛谷] 3. 薬づくりの第一歩：健康と病気の違いを知る [中山] 4. 生体リズムと時間薬学 [土居] 5. 遺伝子工学の創薬への応用 [今西] 6. 薬をはかる タンパク質をはかる [杉山] 7. 抗菌性ペプチドについて [松崎] 8. 薬を合成するー薬の設計と製造ー [竹本] 9. くすりの化学：課題の発掘と解決に向けて [高須] 10. 生命倫理・研究倫理・薬剤師倫理 [山下] 11. くすりの作用点～過去の薬物治療からわかる未来の創薬標的 [白川] 12. 体をめぐる薬の動きをあやつる -DDSでめざす効果的な投薬 [高橋]							
「薬の世界」入門(2)へ続く ↓ ↓ ↓							

「薬の世界」入門(2)
1 3. 薬が私たちに届くまで、そして届いてから [米澤] 1 4. 創薬における分子イメージング [小野] 1 5. フィードバック
[履修要件]
特になし。いずれの学部でも、創薬科学、医療薬学に興味を持つ学生の履修を歓迎する。
[成績評価の方法・観点]
レポート課題3つ（30点）、小テスト等による平常点（70点）に基づいて評価する。 第1回の講義の際に、全体の趣旨説明、レポート作成・引用のルール、および成績評価法を説明します。
[教科書]
京都大学大学院薬学研究科『くすりをつくる研究者の仕事ー薬のタネ探しから私たちに届くまで』（化学同人）ISBN:978-4-7598-1931-1 なお、本書は、京都大学蔵書です：京都大学生は下記より閲覧可能です。 https://elib.maruzen.co.jp/elib/html/BookDetail/Id/3000127730
[参考書等]
（参考書） 奥田 潤、川村 和美『薬剤師とくすりと倫理』（じほう）
[授業外学修（予習・復習）等]
指定された教科書で各講義に関連する章を授業前に熟読し、参考書等でさらに調べておくこと。 講義で出されるレポート課題については、講義終了後に自分で参考資料を集めて調査する。
[その他（オフィスアワー等）]

科目ナンバリング		U-LAS40 20020 LJ26					
授業科目名 <英訳>	健康・生命科学入門 Introduction to Biomedical Sciences			担当者所属 職名・氏名	薬学研究科 薬学研究科	教授 助教	竹島 浩 市村 敦彦
群	健康・スポーツ科目群	分野(分類)	健康・スポーツ科学(発展)			使用言語	日本語
旧群	B群	単位数	2単位	週コマ数	1コマ	授業形態	講義
開講年度・ 開講期	2023・前期	曜時限	金2	配当学年	主として1・2回生	対象学生	全学向
[授業の概要・目的]							
本講義は基礎生物学に関する導入講義であり、主に医薬系学部の生命科学基礎の修得を目的としています。具体的には、高等学校にて「生物」を履修しなかった学生も対象に、医薬系専門基礎科目（解剖学、生理学、生化学など）の履修に向けて必須となる学習事項を中心に概説します。従って、植物、進化や生態系などの高等学校生物学の学習事項に関しては、本講義では取り扱いません。							
[到達目標]							
1 哺乳動物個体の構成に関して細胞、組織および器官レベルの概要を説明できる。 2 細胞分裂、個体発生と遺伝の概要を説明できる。 3 生体高分子の構造、代謝と機能の概要を説明できる。 4 生体恒常性の概要を説明できる。							
[授業計画と内容]							
1 「細胞」細胞の構成、生体膜の機能と細胞の多様性を学習する。 2 「細胞と個体①」生物の構成、主要器官の構成を学習する。 3 「細胞と個体②」主要臓器の構成と機能、細胞間情報伝達を学習する。 4 「生殖と発生①」体細胞分裂と減数分裂を学習する。 5 「生殖と発生②」動物の発生、器官の形成を学習する。 6 「生物の構成成分①」生体の構成元素、タンパク質の構造と機能を学習する。 7 「生物の構成成分②」糖質、脂質、核酸の構造と機能を学習する。 8 「酵素と代謝①」酵素反応、酵素と補酵素、糖代謝を学習する。 9 「酵素と代謝②」アミノ酸代謝、脂質代謝、核酸代謝を学習する。 10 「遺伝」メンデルの法則、遺伝子と染色体を学習する。 11 「遺伝子複製と発現①」遺伝子の複製、変異と修復を学習する。 12 「遺伝子複製と発現②」遺伝子発現における転写、翻訳を学習する。 13 「恒常性①」生体恒常性、臓器機能による恒常性の維持を学習する。 14 「恒常性②」内分泌系、自律神経系による臓器機能の統合調節を学習する。							
[履修要件]							
特になし							
[成績評価の方法・観点]							
期末試験により評価する。成績優良者に対しては、講義レポートの状況も評価した合格点を与える。講義出席状況が良好な試験成績不良者に対しては、レポート課題などを課し、その状況により最終評価する。一方、試験成績も講義出席状況も不良な者については、単位習得に向けた救済措置を与えない。							
-----健康・生命科学入門(2)へ続く↓↓↓							

健康・生命科学入門(2)

[教科書]

竹島浩編集 『illustrated 基礎生命科学 第4版』 (京都廣川書店)

[参考書等]

(参考書)

特になし

[授業外学修（予習・復習）等]

各講義において簡単なレポート課題を課すので、重要な学習事項を復習しながら仕上げることを期待します。レポートは次週講義の前日までにPandAサイトにアップロード提出してください。講義出席状況については、レポート提出により確認します。

[その他（オフィスアワー等）]

講義日の午前および午後をオフィスアワーとします。学習項目に関する質問などは担当教員（薬学部本館2階・生体分子認識学分野）への直接コンタクト、またはメールによる問い合わせにて受け付けます。

科目ナンバリング		U-LAS30 10012 LJ10 U-LAS30 10012 LJ11 U-LAS30 10012 LJ12								
授業科目名 ＜英訳＞		情報基礎 [薬学部] Basic Informatics (Faculty of Pharmaceutical Sciences)				担当者所属 職名・氏名		薬学研究科 准教授 平澤 明 薬学研究科 准教授 小川 治夫		
群	情報学科目群		分野(分類)		(基礎)		使用言語	日本語		
旧群	B群		単位数	2単位		週コマ数	1コマ		授業形態	講義
開講年度・ 開講期	2023・前期		曜時限	月4		配当学年	主として1回生		対象学生	全学向
[授業の概要・目的]										
コンピュータ初心者を対象に、必要となる基礎知識とマナー、そして将来の研究活動に必要な情報科学ならびに情報処理の基礎の講義と、自分ひとりでコンピュータを扱えるようになるための演習を行う。										
[到達目標]										
世の中にあふれる情報を扱うための基礎的な理論を習得する。またコンピュータを利用する際の倫理的な問題、社会における情報との関係について理解する。										
[授業計画と内容]										
基本的に以下の内容に従って講義を進める。ただし講義の進みぐあいなどにより、順序や同一テーマの回数を変えることがある。授業回数はフィードバックを含め全15回とする。 第1回導入講義、情報とは 第2回情報システムとパソコン 第3回情報の表現(1)(レポート、文章の書き方、メール) 第4回情報の表現(2)(記号・符号化) 第5回情報の表現(3)(情報量) 第6回アプリケーションについて 第7回データとデータベースについて 第8回計算・プログラミング言語について 第9回アルゴリズムについて 第10回計算の理論/コンピュータの仕組み(1) 第11回コンピュータの仕組み(2)/社会とのつながり 第12回情報の伝達と通信(1)(インターネットの仕組み) 第13回情報の伝達と通信(2)(暗号化) 第14回情報セキュリティと知的財産 期末試験 第15回フィードバック										
[履修要件]										
薬学部 1 回生向けクラス指定科目です。コンピュータを用いた演習は情報基礎演習で行います。										
[成績評価の方法・観点]										
基本的な情報処理に関する知識が習得できているかどうかを定期試験により判断する。ただし、授業中に行う小テストを成績に考慮する場合がある。										
----- 情報基礎 [薬学部] (2)へ続く ↓ ↓ ↓										

情報基礎〔薬学部〕(2)

【教科書】

詳細は初回の授業で説明する

【参考書等】

(参考書)

山口 和紀(編集)『情報(第2版)』(東京大学出版会) ISBN:978-4130624572

【授業外学修(予習・復習)等】

コンピュータを積極的に利用すること。

【その他(オフィスアワー等)】

コンピュータを用いた演習は情報基礎演習〔薬学部〕で講義する。併せて履修することが望まれる。

情報環境機構が提供する情報セキュリティe-Learningを必ず受講し、修了テストを受けた上で、同テストのフィードバックを確認しておくこと。授業内では受講のための時間は設けないので授業時間外に受講しておくこと。同e-Learningは学生も含めた本学の全構成員に対して毎年受講が求められているものである。2回生以上で過去の年度に受講した場合でも今年度まだ受講していないのであれば必ず受講すること。

科目ナンバリング		U-LAS30 10005 SJ11						
授業科目名 <英訳>	情報基礎演習 [薬学部] Practice of Basic Informatics (Faculty of Pharmaceutical Sciences)				担当者所属 職名・氏名	薬学研究科 准教授 平澤 明 薬学研究科 准教授 小川 治夫		
群	情報学科目群		分野(分類)	(基礎)		使用言語	日本語	
旧群	B群		単位数	2単位	週コマ数	1コマ	授業形態	演習
開講年度・開講期	2023・前期	曜時限	月5		配当学年	主として1回生	対象学生	全学向
【授業の概要・目的】								
コンピュータを利用する上で必要となる基礎知識とマナー、そして将来の研究活動に必要な情報科学ならびに情報処理の基礎に関する講義と演習を行う。								
【到達目標】								
コンピュータの基本的な使用方法を身に付け、コンピュータによる文章作成、情報検索、プログラミングなどのコンピュータリテラシーを身に付ける。								
【授業計画と内容】								
基本的に以下の内容に従って講義を進める。ただし講義の進みぐあいなどにより、順序や同一テーマの回数を変えることがある。授業回数はフィードバックを含め全15回とする。 第1回導入、京都大学のネットワークサービスを理解する 第2回パソコンの利用 第3回ファイル操作、レポート、メールの利用について 第4回構造化文書の作成 第5回表計算ソフトによるデータ処理 第6回プレゼンテーション資料の作成 第7回学術情報の探索 第8回ネットワーク・Web 第9回ネットワーク(2) 第10回 python環境準備 第11回 python(1) 第12回 python(2) 第13回 python(3) 第14回本演習のまとめ 第15回本演習の振り返り								
【履修要件】								
薬学部 1 回生向けクラス指定科目である。情報処理の専門知識はとくに必要ない。座学的な内容は情報基礎で行う。								
【成績評価の方法・観点】								
基本的なコンピュータの使い方、電子メール、webブラウザの利用も含めた基本的なネットワーク利用に関する知識、基本的なプログラミングの理解について、提出されたレポートにより評価する。								

情報基礎演習 [薬学部] (2)へ続く↓↓↓								

情報基礎演習 [薬学部] (2)

[教科書]

詳細は初回の授業で説明する

[参考書等]

(参考書)

授業中に紹介する

[授業外学修（予習・復習）等]

演習テキストの予習と、課題についての復習を必ず行うこと。
本演習により習得した技術・知識を，他の講義科目のレポート作成等に活用することが望ましい。

[その他（オフィスアワー等）]

座学的内容は情報基礎[薬学部]で講義をする。併せて履修することが望まれる。

情報環境機構が提供する情報セキュリティe-Learningを必ず受講し、修了テストを受けた上で、同テストのフィードバックを確認しておくこと。授業内では受講のための時間は設けないので授業時間外に受講しておくこと。同e-Learningは学生も含めた本学の全構成員に対して毎年受講が求められているものである。2回生以上で過去の年度に受講した場合でも今年度まだ受講していないのであれば必ず受講すること。

科目ナンバリング		U-LAS51 10014 SB48							
授業科目名 <英訳>		科学コミュニケーションの基礎と実践（薬・英） A-E3 Theory and Practice in Scientific Writing and Discussion (Pharmaceutical Sciences, English)A-E3			担当者所属 職名・氏名		薬学研究科 特定准教授 CAMPBELL, Douglas Simon		
群	キャリア形成科目群		分野(分類)		国際コミュニケーション		使用言語	日本語及び英語	
旧群	C群		単位数	2単位	週コマ数	1コマ	授業形態	演習	
開講年度・開講期	2023・前期	曜時限	月4/月5		配当学年	2回生以上	対象学生	理系向	
[授業の概要・目的]									
"Theory and Practice in Scientific Writing and Discussion" will provide students with the basics of scientific English. Expressions and vocabulary used in scientific texts are different from everyday English. When giving a presentation or a seminar, or writing a report or research manuscript, it is critical to use a well organised and precise language so that the ideas and discoveries are well communicated. This course is mainly targeted to students who wish to pursue a scientific career, especially in research. Although learning new vocabulary and grammar is a substantial part of this course, the emphasis will be put on practice.									
[到達目標]									
To acquire basic knowledge on the structure and vocabulary of scientific English (biology, physics, chemistry). To be able to build sentences using the vocabulary and grammar they have learned. To learn English names of common scientific tools. To be able to accurately describe dimensions and relative positions of objects, scientific equations, chemical reactions and other scientific concepts. To be able to communicate scientific content in English in a relaxed manner and without hesitation.									
[授業計画と内容]									
1. What is Scientific English? (1 week) 2. The basic units and dimensions, numerals, enunciation and comprehension of complex numbers and equations. (1 week) 3. Chemicals and chemical reactions. (1 week) 4. Latin and Greek roots of modern scientific English. (1 week) 5. How to describe the relative position and dimensions of an object, descriptions of movements and force, basic human and animal anatomy. (3 weeks) 6. Mid-term exam / Description of experimental setups (1 week) 7. Description of experimental setups in Biology and Chemistry. (2 weeks) 8. Listening to a scientific presentation/TV program and asking questions on its content (2 weeks) 9. Introduction to giving presentations - Elevator Pitch / self- introduction and Scientific-flash talks (3 weeks) Presentations 10. Presentations and Feedback (1 week)									
----- 科学コミュニケーションの基礎と実践（薬・英）A-E3(2)へ続く↓↓↓									

[履修要件]

Students uncomfortable in social interactions may find this course challenging.

[成績評価の方法・観点]

- Class participation (answering and asking questions or discussion, 40%).
- Midterm exam (30%)
- Assignments (such as role play in Laboratory or Pharmacy, elevator pitch / self introduction, scientific flash talk, 30%).

The balance between the above will be dependent on the number of assignments given.

[教科書]

Anthony FW FOONG 『Comprehensive Scientific English (A) 4th Edition』 (IMEX. Japan) ISBN:978-4-9905790-2-9 (4th edition, April 2020)

OpenStax Biology, Anatomy and Physiology, Chemistry and Physics, freely available to download at the URL below.

[参考書等]

(参考書)

授業中に紹介する

References and articles will also be given via Panda.

(関連URL)

<https://openstax.org/subjects>

[授業外学修（予習・復習）等]

Review from the textbook, listening exercises on the CDs, class material and preparation for assignments to be presented either in class or submitted.

[その他（オフィスアワー等）]

The contents of the syllabus are a guide to the content of the course, the exact content may change. Input from students is very welcome to suggest aspects of scientific English to cover in the course. I am always happy to discuss with students, please contact me via email in the first instance.

科目ナンバリング		U-LAS51 10015 SB48							
授業科目名 <英訳>		科学コミュニケーションの基礎と実践（薬・英） B-E3 Theory and Practice in Scientific Writing and Discussion (Pharmaceutical Sciences, English)B-E3			担当者所属 職名・氏名		薬学研究科 特定准教授 Martin Robert		
群	キャリア形成科目群		分野(分類)		国際コミュニケーション		使用言語	日本語及び英語	
旧群	C群		単位数	2単位	週コマ数	1コマ	授業形態	演習	
開講年度・ 開講期	2023・後期	曜時限	月4/月5		配当学年	2回生以上	対象学生	理系向	
[授業の概要・目的]									
The ability to effectively communicate science in English, whether it is for a lab report, preparing an abstract and/or poster or an oral presentation for a conference, a journal club, a thesis, or a full manuscript, is an essential skill for any student and aspiring young researcher. Failure to produce a good narrative results in lost opportunities for both the writer and the reader. Developing skills in both written and oral forms of communication is therefore important to successfully progress in science. This course will aim to improve student confidence in communicating science in English. Opportunities will be provided to learn and practice the basics of effective scientific writing and communication in English. Emphasis will be placed on learning the basic structures and logic of different forms of scientific communication and practicing through the analysis of scientific material and writing. Practical exercises to develop those skills, will include among others, preparing a good title and abstract, analyzing scientific text, and presenting a scientific research article (journal club presentation) and its evaluation. Many exercises will be completed in small groups. The course will be targeted to non-native speakers of English.									
[到達目標]									
This main objective of this course is to learn and practice skills for communicating scientific content effectively in English. The emphasis will be on structuring and organizing content, data and figures, and their interpretation to build a coherent narrative. Tips and tricks about writing and presenting as well as patterns to avoid will also be presented. At the end of this course students will: - Understand and be able to explain the basic structure and format of different forms of scientific communications - Master key conventions and structures essential for effective scientific communication - Have gained skills in organizing concepts and ideas into a coherent narrative, using the appropriate words, units, logic, etc. - Be able to produce clear short text and make an oral presentation of a research article following the formal scientific style of writing and presenting - Have acquired confidence and practiced critical evaluation skills by providing constructive feedback about their peers' work.									
[授業計画と内容]									
The following topics will be covered over the course of 14 classes, not necessarily in that order: Week 1 Course guidance and introduction Week 2 Introduction to communication ----- 科学コミュニケーションの基礎と実践（薬・英）B-E3(2)へ続く↓↓↓									

Week 3 Finding and managing scientific literature and resources (databases and reference management software)

Week 4 Crafting a good title

Week 5 Analyzing and preparing a good abstract

Week 6 The basics of scientific writing. Structure and logic

Week 7 How to write different parts of a manuscript or report

Week 8 Tips for reading and understanding scientific content

Week 9 Making good figures and visuals and describing them well

Weeks 10-14 Critical thinking and evaluation - Research article presentations (Journal club)

Week 16 Feedback

Total: 14 classes plus one Feedback session

[履修要件]

Access to a personal computer or device is required to complete homework assignments and other practice.

[成績評価の方法・観点]

20 % Class attendance and active participation

60 % In-class exercises/quizzes and homework assignments

20 % Presentation

[教科書]

Lebrun, J.-L. 『Scientific Writing 2.0: A Reader And Writer's Guide』 (World Scientific Publishing Company, 2011)

Glasman-Deal, H. 『Science Research Writing: A Guide for Non-native Speakers of English. 』 (Imperial College Press, 2010)

The books above will be used for part of course but students are not required to buy them. Kyoto University Library has some digital license for Lebrun and Glasman-Deal.

[参考書等]

(参考書)

Hofmann, A. 『Writing in the Biological Sciences: A Comprehensive Resource for Scientific Communication. 』 (Oxford University Press, 2015)

Another useful resource:

English communication for scientists is listed below.

(関連URL)

<https://www.nature.com/scitable/ebooks/cntNm-14053993/contents/>

[授業外学修（予習・復習）等]

Students can expect to spend on average about 1-2 hours per week on homework assignments and preparation for in-class exercises.

[その他（オフィスアワー等）]

Some of the content is subject to change according to the class size.

The instructor can be contacted by e-mail to arrange an appointment.

科目ナンバリング		U-PHA00 2C011 LJ86									
授業科目名 <英訳>		有機化学I【H30以降入学者用】 Organic Chemistry I				担当者所属・ 職名・氏名		薬学研究科 准教授 中 寛史			
配当 学年	2,3回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2023・ 前期	曜時限	火1	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
学科		薬学部,薬科学科,薬学科			科目に対する区分		選択				
[授業の概要・目的]											
[目的] 本講義では、カルボニル化合物の構造と性質を理解し、反応の基本を修得することを目的とする。 [何を学ぶのか] カルボニル化合物について、構造と性質、合成する方法や、反応、反応機構について、例を用いて学び、考察する。 [どうして学ぶ必要があるのか] カルボニル化合物は、生体分子や医薬品の性質を決定づける、最も重要な化合物である。カルボニル化合物の基本を理解することで、薬を理解し、創り、使いこなすための力を養う。											
[到達目標]											
(1) カルボニル化合物の基本的性質（構造、酸性度、塩基性度、求電子性）を理解し、説明できる。 (2) カルボニル化合物の代表的な合成法を理解し、説明できる。 (3) カルボニル化合物が関与する様々な反応（求核付加反応、求核的アシル置換反応、α置換および縮合反応）を理解し、それぞれの反応機構を説明できる。											
[授業計画と内容]											
(1) 導入：なぜカルボニル化合物か (2) アルデヒドとケトン：求核付加反応1：命名、構造と性質、合成、アルデヒドの酸化反応 (3) アルデヒドとケトン：求核付加反応2：様々な求核付加反応 (4) アルデヒドとケトン：求核付加反応3：生体内還元、共役付加反応 (5) カルボン酸とニトリル1：命名、構造と性質、置換基効果 (6) カルボン酸とニトリル2：カルボン酸の合成と反応、ニトリルの化学 (7) カルボン酸誘導体：求核的アシル置換反応1：命名、アシル置換反応、カルボン酸 (8) カルボン酸誘導体：求核的アシル置換反応2：酸ハロゲン化物、酸無水物、エステル (9) カルボン酸誘導体：求核的アシル置換反応3：アミド、チオエステル、ポリマー (10) 中間試験 (11) カルボニル基のα置換および縮合反応1：ケト-エノール互変異性、酸性度、アルキル化 (12) カルボニル基のα置換および縮合反応2：アルドール反応 (13) カルボニル基のα置換および縮合反応3：Claisen 縮合 (14) カルボニル基のα置換および縮合反応4：共役付加とエナミンの反応 (15) フィードバック *進捗状況に応じて同じトピックの回数を変更することがある。											
[履修要件]											
本講義は薬学部開講科目「基礎有機化学I、II」を基盤とした発展的な授業である。そのため、これらの授業内容を理解し、単位を取得しておくことが望ましい。											
[成績評価の方法・観点]											
中間試験 (30%)、定期試験 (50%)、授業毎の小テスト (20%) により評価する。 中間試験と定期試験では、カルボニル化合物の命名と基本的性質、代表的な合成法、カルボニル化合物が関与する様々な反応とそれぞれの反応機構を説明できるかが問われる。基礎的な内容を中心とするが、発展的な内容も取り扱う。 授業毎の小テストでは前週の講義内容のうち基礎的かつ重要な内容を確認する。											
有機化学I【H30以降入学者用】 (2)へ続く↓↓↓											

有機化学I【H30以降入学者用】(2)

【本講義と関連する講義】

基礎有機化学Ⅰ、Ⅱ、有機化学Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ、天然物薬学Ⅰ・Ⅱ、医薬品化学、創薬有機化学演習、生命有機化学演習

【対応するコアカリキュラム一般目標（薬学科）】

C1 (1), C3 (1) (3), C4 (2)

【教科書】

John McMurry 『マクマリー 有機化学 -生体反応へのアプローチ-』 (東京化学同人) ISBN:9784807906918 (本教科書にそって授業を進める)

【参考書等】

(参考書)

J. Claydenら著 野依良治ら監訳 『ウォーレン有機化学 第2版〈上〉』 (東京化学同人) (より発展的な内容を含み、反応機構が詳説されている。)

P. Y. Bruice 『ブルース有機化学 第7版 下』 (化学同人) (初学者向けの教科書)

竹本佳司 他 『有機化学explorer ー有機化学で未来をひらけー』 (京都廣川書店) ISBN:9784901789349 (演習問題集)

「H G S 立体化学分子模型4010学生用セット」 (丸善) (他の分子模型でも代用できる)

【授業外学修（予習・復習）等】

毎回授業で前回までの内容について小テストを実施する。授業後にしっかり復習して理解しておくこと。すべての例題、問題と演習問題に取り組むことが望ましい。

【その他（オフィスアワー等）】

小テストは定期試験の対策に加えて、日々の復習の材料として利用することが好ましい。

授業内容や、授業以外の内容についても、わからないことがあれば、講義中、講義終了後、もしくはオフィスアワー中に質問してください。

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング			U-PHA00 2C012 LJ86								
授業科目名 <英訳>		有機化学II【H30以降入学者用】 Organic Chemistry II				担当者所属・ 職名・氏名		薬学研究科 教授 高須 清誠			
配当 学年	2,3回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2023・ 後期	曜時限	金2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
学科		薬学部,薬科学科,薬学科				科目に対する区分		選択			
[授業の概要・目的]											
有機化学（アドバンス） 基礎有機化学I, IIおよび有機化学Iは、大学有機化学の基礎編に相当します。本講義では、これまでに得た知識を復習するとともに各論を統合し、より深い有機化学の世界に導きます。また、物理化学や生化学、衛生化学、薬剤学などの他教科との学問との接点についても適宜解説し、有機化学が薬学の中でどのような位置づけにあるかも講義する予定です。すなわち、医薬品化学や生命化学に関連した有機化学のトピックを時折紹介することを特徴とします。 これまで経験した授業から、「有機化学は暗記の学問ではない」ことを強く感じたと思います。また、これまで習った内容などのかなりの部分を忘れていたり、理解できていないと感じることもあると思います。まだ間に合います！予習や復習などでバックアップできると思います。一緒に頑張りましょう。											
[到達目標]											
有機化学反応機構を電子論的に説明できる。 基本的なペリ環状反応および有機金属反応を列挙できる。 有機化学の諸事項を統合的に理解する。 補酵素を列挙し、その有機化学的な役割を説明できる。 薬学の諸学問との有機化学の関係を紐付けることができる。											
[授業計画と内容]											
1. 有機反応の反応機構の復習（1週） 2. アミンおよび複素環の化学（2週） 3. 分子軌道論に基づくペリ環状反応（3週） 4. 生命有機化学（補酵素、生合成の化学）（3週） 5. 代表的な分子変換反応（酸化・還元など）（3週） 6. まとめ：なぜその反応が起きるのか（2週） 7. フィードバック											
[履修要件]											
基礎有機化学I,IIおよび有機化学Iを学修した者、もしくはそれに同等以上の素養がある者のが受講することが望ましい。ここまでで、有機化学につまづいた気分になっている者も受講可。											
[成績評価の方法・観点]											
定期試験（筆記）60点、レポート（期間中3~4回）30点、平常点評価（毎講義後のミニッツペーパー提出）10点により評価する。 定期試験は原則として期末試験のみを行うが、必要に応じ中間試験を行う場合もある。中間試験を行う場合は、1か月以上前に予告する。 レポートおよびミニッツペーパーはPandAで実施する。											
-----有機化学II【H30以降入学者用】 (2)へ続く↓↓↓											

有機化学II【H30以降入学者用】(2)

[本講義と関連する講義]

基礎有機化学1,2、有機化学I, III, IV、創薬有機化学演習、生命有機化学演習、天然物薬学I,II、医薬品化学、物理化学I、衛生薬学I、生物化学I,II

[対応するコアカリキュラム一般目標（薬学科）]

C3(1)、C3(2)、C3(3)、C3(5)、C4(1)、C4(2)、

[教科書]

随時プリントを配布して授業資料とする。

[参考書等]

（参考書）

J. McMurry著、柴崎正勝ら監訳『マクマリー有機化学 生体反応へのアプローチ』（東京化学同人）（有機化学1までに用いた教科書を前提として、授業を展開します。）

『ウォーレン有機化学』（東京化学同人）

『分子模型セット』（「H G S 立体化学分子模型4010学生用セット」がお勧めです。他メーカーの分子模型で構いません。）

[授業外学修（予習・復習）等]

詳細は初回講義で説明します。

有機化学は積み重ねの学問であるため、予習もしくは復習は大変効果的です。中長期的なスケジュールを立てて、無理のない量を行うことが肝要です。

（その他（オフィスアワー等））

有機化学に悩んでいる人がいれば早めに相談にきてください。

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング		U-PHA00 3C005 LJ86									
授業科目名 <英訳>		有機化学Ⅲ【H30以降入学者用】 Organic Chemistry III				担当者所属・ 職名・氏名		化学研究所 教授 大宮 寛久			
配当 学年	2,3回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2023・ 前期	曜時限	水2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
学科		薬学部,薬科学科,薬学科			科目に対する区分		選択				
[授業の概要・目的]											
さまざまな有機反応が起こる仕組みと必然性を一貫したルールに基づいて講述する。電子の移動を図示して反応機構を説明できること、分子の配座を図示して反応の立体化学を説明・予測できること、さらに進んで、軌道相互作用による反応性の理解を目標とする。											
[到達目標]											
以下の項目について、具体例をあげ、図示して説明できることを目標とする。 (1) 分子のキラリティーと配座 (2) 速度論支配反応と熱力学支配反応 (3) 置換反応 (4) 脱離反応 (5) 付加反応 (6) カルボニル化合物への付加反応の立体化学 (7) エノラートの生成法、エノラートを中間体とする合成反応 (8) アルドール反応の立体化学 (9) 不斉合成反応 (10) 代表的な還元反応 (11) 代表的な酸化反応 (12) 速度論的同位体効果 (13) アノマー効果 (14) 環化反応 (15) ペリ環状反応											
[授業計画と内容]											
(1) 分子のキラリティーと配座 (2) 速度論支配と熱力学支配 (3) 置換反応 (4) 脱離反応 (5) 付加反応の立体化学 (6) カルボニル化合物への付加反応の立体化学 (7) Cram則、Felkin-Anh モデル (8) エノラートの生成法、エノラートを中間体とする合成反応 (9) エノラートを用いるアルドール反応とその立体化学 (10) 不斉合成反応の原理と具体例 (11) 代表的な還元反応 (12) 代表的な酸化反応、速度論的同位体効果 (13) アノマー効果 (14) 環化反応 (15) ペリ環状反応											
有機化学Ⅲ【H30以降入学者用】 (2)へ続く↓↓↓											

有機化学III【H30以降入学用】(2)

【履修要件】

本科目の学修には基礎的な有機化学の知識を前提としており、基礎有機化学I、IIおよび有機化学I、IIを既に履修していることが望まれる。

【成績評価の方法・観点】

定期試験100%

【本講義と関連する講義】

基礎有機化学 I、II、有機化学 I、II、IV、医薬品化学、天然物薬学 I、II、創薬有機化学演習、生命有機化学演習

【対応するコアカリキュラム一般目標（薬学科）】

C1(1),C3(1)(2)(3),C4(2),C6(3)

【教科書】

使用しない
プリントを配付する。

【参考書等】

（参考書）

J. McMurry 著、柴崎正勝ら監訳『マクマリー有機化学 生体反応へのアプローチ』（東京化学同人）
『分子模型セット』（丸善「HGS立体化学分子模型4010学生用セット」がお勧めです。他のメーカーの分子模型でも構いません。）
その他の参考書については、授業中に紹介する。

【授業外学修（予習・復習）等】

疑問点は、授業中や授業後に質問してください。また、メール (ohmiya@scl.kyoto-u.ac.jp) での質問も受けつけます。

（その他（オフィスアワー等））

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング		U-PHA00 3C014 LJ86									
授業科目名 ＜英訳＞		有機化学Ⅳ【H30以降入学用】 Organic Chemistry IV				担当者所属・ 職名・氏名		薬学研究科 教授 竹本 佳司			
配当 学年	2,3回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2023・ 後期	曜時限	金2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
学科		薬学部,薬科学科,薬学科				科目に対する区分		選択			
[授業の概要・目的]											
無から有を産み出す知的作業は精密有機合成化学の特権である。医薬品等の機能を持つ分子の創製が精密有機合成化学の主要な挑戦課題である。複雑な分子を構築するための戦略と戦術にあたる「逆合成解析」と「選択的反応」を主題として、選択的反応を説明でき、化合物の合成経路を立案できるように学ぶ。											
[到達目標]											
・有機化合物の逆合成解析をして、合理的な合成計画を立案できる。 ・逆合成解析により得たシントンから合成等価体を提案できる。 ・官能基相互変換を実践的に用いた合成計画を立案できる。 ・ラジカル反応や転位反応を含む合成経路について、反応機構を含め理解できる。 ・保護基の意義を理解して、官能基選択的な合成経路を提案できる。 ・位置及び立体選択性に影響を与える立体電子効果や配位効果を説明できる。 ・各種有機金属試薬の反応性の特徴を理解し、逆合成の提案に利用できる。 ・官能基選択性を理解して、複数の官能基を含む複雑分子の合成経路を設計できる。											
[授業計画と内容]											
(1) 切断法と逆合成解析 1 (切断：シントン、合成等価体) (2) 切断法と逆合成解析 2 (潜在極性、調和と非調和) (3) 切断法と逆合成解析 3 (極性転換) (4) 切断法と逆合成解析 4 (環状化合物の合成) (5) 切断法と逆合成解析 5 (ラジカル反応、官能基変換) (6) 切断法と逆合成解析 6 (転位反応) (7) 官能基選択性と保護基の利用 (8) 位置選択性 1 (9) 位置選択性 2 (10) 立体選択性 (11) エナンチオ選択的合成 (不斉合成) (12) 有機金属触媒反応1 (13) 有機金属触媒反応2 (14) 逆合成への応用 (炭素－炭素結合形成反応) (15) 練習問題と総合討論											
[履修要件]											
特になし											
[成績評価の方法・観点]											
定期試験 (50)、講義中に行う確認試験＋出題するレポート課題 (50)											
[本講義と関連する講義]											
基礎有機化学Ⅰ、Ⅱ、有機化学Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、天然物薬学Ⅰ・Ⅱ、医薬品化学、創薬有機化学演習											
-----有機化学Ⅳ【H30以降入学用】(2)へ続く↓↓↓											

有機化学Ⅳ【H30以降入学用】(2)

[対応するコアカリキュラム一般目標（薬学科）]

C3(1)、C3(2)、C3(3)

[教科書]

使用しない

[参考書等]

（参考書）

C.L.ウイリス、M.ウイリス著、富岡清訳『逆合成のノウハウ 有機合成の戦略』（化学同人）

J.マクマリー著、柴崎ら訳『マクマリー 有機化学 生体反応へのアプローチ』（東京化学同人）ISBN: 9784807906918

「分子模型セット」（丸善）（「H G S 立体化学分子模型4010学生用セット」がおすすめです。他メーカーの分子模型でもかまいません）

その他の参考書については、授業中に紹介する。

[授業外学修（予習・復習）等]

講義中に出題する課題には必ず解答し、それをレポートとして提出すること。

解答中や解説を聞いた後、毎回の課題内容を各自かならず復習して理解して下さい。

（その他（オフィスアワー等））

有機化学を専門とする学生向けに大学院講義の橋かけとなるアドバンスな内容を講義します。本講義を受講することで精密有機合成の芸術と実践を楽しめます。3年生前期の有機化学I-IIIを履修しておくことが望ましい。

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング				U-PHA00 3C016 LJ86							
授業科目名 <英訳>		医薬品化学【H30以降入学者用】 Medicinal Chemistry				担当者所属・ 職名・氏名		薬学研究科 准教授 井貫 晋輔			
配当 学年	2,3回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2023・ 前期	曜時限	火1	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
学科		薬学部,薬科学科,薬学科				科目に対する区分		選択			
[授業の概要・目的]											
生体内における医薬品の作用を化学的に理解するためには、生体反応の化学、及び、医薬品の化学構造とその性質を理解する必要がある。本講義では、有機化学の基礎知識を習得していることを前提として、医薬品が薬理作用を示す原理を化学的観点から講述するとともに、新薬開発における分子設計のアプローチについて紹介する。											
[到達目標]											
1. 医薬品の作用に関わる生体反応について、反応に関わる分子の構造・性質を理解するとともに、反応機構を説明できる。 2. 医薬品に含まれる代表的な化学構造の特徴・性質を理解し、医薬品の作用との関連について説明できる。 3. 医薬品に頻用される構造要素を学び、新しい医薬品の創製を目指した分子設計の基本的概念を理解する。											
[授業計画と内容]											
1. 総論 2. リード化合物の探索・創出 1 3. リード化合物の探索・創出 2 4. 薬と生体分子の相互作用 5. ファーマコフォアの考え方 6. 構造最適化の方法：標的分子との相互作用の改善 7. 構造最適化の方法：薬物動態・代謝を考慮した分子設計 8. プロドラッグの設計 9. 生体分子や内因性リガンドからの分子設計 10. 酵素に作用する医薬品の構造と性質 1 11. 酵素に作用する医薬品の構造と性質 2 12. 受容体に作用する医薬品の構造と性質 1 13. 受容体に作用する医薬品の構造と性質 2 14. DNAやトランスポーター等に作用する医薬品の構造と性質 15. タンパク質－タンパク質相互作用や膜脂質を標的とする医薬品の構造と性質											
[履修要件]											
特になし											
[成績評価の方法・観点]											
定期試験（80％）及び平常点（出席レポート等、20％）により評価する。 ただし、対面での定期試験が実施困難な場合には、平常点の割合を40％に上げる可能性がある。 定期試験については、講義において取扱う内容全般から出題するとともに、新しい医薬品の創製につながる分子設計の提案などの発展的な内容を含む。											
[本講義と関連する講義]											
基礎有機化学Ⅰ・Ⅱ、有機化学Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ、天然物薬学Ⅰ・Ⅱ、薬理学Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ											
----- 医薬品化学【H30以降入学者用】 (2)へ続く↓↓↓											

医薬品化学【H30以降入学用】(2)

【対応するコアカリキュラム一般目標（薬学科）】

C4

【教科書】

N. Dunlap, D. M. Hurny 著、長野哲雄 監訳 『ダンラップ・ヒューリン創薬化学』（東京化学同人）ISBN:978-4807909933

必要に応じてプリントを配付する。

【参考書等】

（参考書）

G. L. Patrick 『An Introduction to Medicinal Chemistry, 6th Ed.』（Oxford University Press）ISBN:978-0198749691

N. Dunlap & D. M. Hurny 『Medicinal Chemistry』（Garland Science）ISBN:978-0815345565

周東智 『有機医薬分子論—化学構造、薬理活性そして創薬へ』（京都廣川書店）ISBN:978-4901789813

日本薬学会 編 『スタンダード薬学シリーズII-3 化学系薬学II 生体分子・医薬品の化学による理解』（東京化学同人）ISBN:978-4807917068

長野哲雄 他 編 『創薬化学: メディシナルケミストへの道』（東京化学同人）ISBN:978-4807909483

C. G. Wermuth 他 編 『The Practice of Medicinal Chemistry』（Academic Press）ISBN:978-0124172050

橘高敦史 他 編 『創薬科学・医薬化学 第2版』（化学同人）ISBN:978-4759823325

【授業外学修（予習・復習）等】

授業前には教科書の該当部分を予習することが必要である。また、医薬品と生体分子の相互作用を理解するために、構造要素の化学的特性に関する基本的事項をあらかじめ十分理解していることが求められる。創薬に関わる実践的な知識の修得の観点から、教科書や参考書にとどまらず、最新の創薬研究の情報・動向に興味を持つことが望まれる。

（その他（オフィスアワー等））

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング				U-PHA00 2C006 LJ86							
授業科目名 <英訳>		天然物薬学I（天然物化学）【H30以降入学者用】 Pharmacognogy I (Natural Product Chemistry)				担当者所属・ 職名・氏名		薬学研究科 准教授 服部 明			
配当 学年	2,3回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2023・ 前期	曜時限	水1	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
学科		薬学部,薬科学科,薬学科				科目に対する区分		必修			
[授業の概要・目的]											
生体に存在する有機化合物の構造ならびに化学的性質を学び、生体内で起こる有機化学反応を理解するための基礎を習得する。また、微生物などが産生し、医薬品として利用されている天然有機化合物について、その化学構造と作用機序を結び付けて理解する。											
[到達目標]											
生体分子の化学構造ならびに化学的性質に基づいて生体内反応を説明できる。 抗生物質を化学構造に基づいて分類し、それらの作用機序を説明できる。 抗菌薬に対する耐性の獲得機構や副作用の発現機構を化学的に説明できる。											
[授業計画と内容]											
(1) 単糖、多糖の化学構造 [マクマリー 21章] (2) アミノ酸の化学構造および化学的性質 [マクマリー 19章] (3) タンパク質の構造を規定する化学結合および相互作用 [マクマリー 19章] (4) 核酸の化学構造および化学的性質 [マクマリー 24章] (5) 補酵素の化学構造および代謝の化学反応 (6) 酵素触媒反応 (7) 生体膜を構成する脂質の化学構造 [マクマリー 23章] (8) 微生物薬品化学総論 (9) 細胞壁の合成を標的とする抗生物質 (I) (10) 細胞壁の合成を標的とする抗生物質 (II) (11) 細胞膜を標的とする抗生物質 (12) タンパク質合成を標的とする抗生物質 (13) 核酸合成を標的とする抗生物質 (14) 抗生物質に対する耐性の獲得機構 (15) 抗生物質の体内動態、副作用、薬物間相互作用											
[履修要件]											
特になし											
[成績評価の方法・観点]											
定期試験100％											
ただし、定期試験をオンラインで実施する必要があるが生じた場合は、評価要素に平常点（ノート点など）やレポート点を組み込む可能性がある。 具体例：2020年度 定期試験（オンライン試験）40％、ノート点30％、レポート30％											
[本講義と関連する講義]											
天然物薬学Ⅱ、医薬品化学、生物化学Ⅰ、有機化学Ⅱ・Ⅲ、生命有機化学演習											
-----天然物薬学I（天然物化学）【H30以降入学者用】(2)へ続く↓↓↓											

[対応するコアカリキュラム一般目標 (薬学科)]

C3(1)、C4(1)(2)(3)、C5(2)、C6(1)(2)(3)(4)、C8(3)、E2(7)

[教科書]

『マクマリー 有機化学—生体反応へのアプローチ』 (東京化学同人) ISBN:9784807906918
 『化学療法学 (改訂第2版)』 (南江堂) ISBN:978-4-524-40349-3
 講義時に簡単なプリントおよびPDFファイルを配布する。
 しかしながら、配布物には教科書の図表は掲載しない。

[参考書等]

(参考書)

『ブルース有機化学 第7版 下』 (化学同人) ISBN:978-4-7598-1585-6
 『微生物学 改訂第8版』 (南江堂) ISBN: 978-4-524-40378-3
 『細胞の分子生物学 第6版』 (ニュートンプレス) ISBN:978-4-315-52062-0
 『マクマリー有機化学 (下) 第9版』 (東京化学同人) ISBN:9784807909148

[授業外学修 (予習・復習) 等]

生体分子の項は、複数の講義でも取り扱う内容である。そのため、連関を持たせて理解するように復習すること。
 抗生物質の作用機序の理解においては、その化学構造の基本骨格と標的とを結びつけるように復習をすること。

(その他 (オフィスアワー等))

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング		U-PHA00 2C007 LJ86									
授業科目名 <英訳>		天然物薬学Ⅱ（ケミカルバイオロジー）【H30以降入学者用 Pharmacognosy II (Chemical Biology)				担当者所属・ 職名・氏名		薬学研究科 教授 掛谷 秀昭			
配当 学年	2,3回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2023・ 後期	曜時限	金1	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
学科		薬学部,薬科学科,薬学科				科目に対する区分		選択			
[授業の概要・目的]											
人類は有史以来、合成医薬と並んで、天然物（天然有機化合物）を薬として利用しています。天然物の資源は、微生物代謝産物、植物成分、海洋無脊椎動物をはじめとして多種多様です。本講義では、主として天然資源由来の生薬、抗生物質、抗癌剤を中心とする天然有機化合物の単離・精製法、構造決定法、起源薬効成分、生合成、作用機序、応用開発等について講義し、天然物薬学を基盤とした生命現象の理解に向けた知識・方法論を習得することを目的とします。											
[到達目標]											
1. 代表的な生薬の基原・特色・臨床応用、および天然生物活性物質の単離・構造・物性・作用・生合成経路を説明できる。 2. 化学物質（医薬品・天然生物活性物質を含む）の単離・精製法、構造決定法を説明できる。 3. 化学物質（医薬品・天然生物活性物質を含む）の生物活性を化学的・ケミカルバイオロジー的に理解し説明できる。											
[授業計画と内容]											
1. 動植物由来の代表的な生薬の起原、性状、含有成分 2. 動植物由来の代表的な生薬の生合成経路 3. 動植物由来の代表的な生薬の品質評価、生産と流通、歴史的背景 4. 有機化合物の分離・精製法 5. 質量分析法、赤外分光法 6. 核磁気共鳴(NMR)分光法 7. 紫外・可視分光法、比旋光度測定法 8. 質量分析法、赤外分光法、核磁気共鳴分光法などを駆使した基本的な化合物の化学構造決定 9. 発酵法による有用物質生産と微生物変換 10. 微生物、植物等における生合成経路の解析方法 11. ポリケチド骨格、フラボノイド骨格を有する天然物の化学構造、生合成経路 12. テルペノイド骨格を有する天然物の化学構造、生合成経路 13. トリテルペン骨格、ステロイド骨格を有する天然物の化学構造、生合成経路 14. シキミ酸経路で生合成される天然物の化学構造、生合成経路 15. 医薬品開発における生薬・天然物の重要性と多様性の総合的理解											
[履修要件]											
特になし											
[成績評価の方法・観点]											
平常・小テスト10%、定期試験90%。 小テストでは、毎回の講義内容に関してテストを行う。定期試験では、上記到達目標への到達度を基礎・応用の両観点から評価する。											
[本講義と関連する講義]											
基礎有機化学Ⅰ・Ⅱ、有機化学Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ、医薬品化学、天然物薬学Ⅰ、創薬有機化学演習											
-----天然物薬学Ⅱ（ケミカルバイオロジー）【H30以降入学者用(2)へ続く↓↓↓											

【対応するコアカリキュラム一般目標（薬学科）】

C2 (4) (5), C3 (4), C4 (1) (2) (3), C5 (1) (2), E 2 (10)

【教科書】

適宜、プリント、パワーポイントを使用予定

【参考書等】

（参考書）

大村智監修 『化学療法学』（南江堂）ISBN:9784524403493

柴崎正勝ら監訳 『マクマリー有機化学 生体反応へのアプローチ』（東京化学同人）ISBN:9784807906918（主として第11章、第12章、第20章、第23章、第25章。）

Paul M Dewick 著、海老塚豊 翻訳 『医薬品天然物化学』（南江堂）ISBN:9784524402014

石黒京子著 『医療における漢方・生薬学』（廣川書店）ISBN:978-4567421409

【授業外学修（予習・復習）等】

有機化学（物性、反応機構、構造解析）に関する基本的事項を習得しつつ、天然有機化合物の単離・精製法、構造決定法、生合成、作用機序等を解説する。理解が不十分なポイントは、該当部分の復習が必須である。事前配布プリントの項目に関して参考書などによる予習、小テストの復習は本講義の理解を深める。

（その他（オフィスアワー等））

薬学専門実習2と併せて、天然物薬学・ケミカルバイオロジー研究を理解するための基礎となる。

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング		U-PHA00 3C008 LJ86									
授業科目名 <英訳>		天然物薬学Ⅲ（生薬学・漢方）【H30以降入学者用】 Pharmacognosy III (Applied Pharmacognosy and Kampo)				担当者所属・ 職名・氏名		薬学研究科 准教授 服部 明 非常勤講師 松田 久司			
配当 学年	2,3回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2023・ 後期	曜時限	月2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
学科		薬学部,薬科学科,薬学科				科目に対する区分		選択			
[授業の概要・目的]											
微生物や植物などの天然資源から単離された化合物を含めた幅広い有機化合物が抗悪性腫瘍治療薬として利用されることを学び、そのメカニズムを理解する。また、漢方の基礎概念を学び、生薬の基原、成分、用途を理解することで、医療現場での実践に向けた漢方の基礎を習得する。											
[到達目標]											
良性腫瘍と悪性腫瘍の違いを説明できる。 抗悪性腫瘍薬を作用機序に基づいて分類できる。 各種抗悪性腫瘍薬の作用機序や主な副作用を説明できる。 漢方の考え方、疾患概念、治療法が概説できる。 日本薬局方収載の代表的な生薬の薬効、成分、用途などを説明できる。 日本薬局方に収載される漢方薬の適応となる証、症状や疾患について例示して説明できる。											
[授業計画と内容]											
[1] 悪性腫瘍の生物学 [2] 悪性腫瘍の標的と薬物治療 [3] アルキル化薬・代謝拮抗薬・抗腫瘍抗生物質 [4] 微小管障害薬・トポイソメラーゼ障害薬・ホルモン療法薬 [5] 分子標的薬（低分子薬・抗体薬） [6] 免疫チェックポイント障害薬・免疫調節薬 [7] 中間テスト [8] 中国・日本におけるくすりの発展 [9] 生薬各論（1） [10] 生薬各論（2） [11] 漢方の考え方、基礎知識 [12] 漢方薬の現代科学的解明 [13] 常用漢方処方（1） [14] 常用漢方処方（2） ※担当回 服部：1～7 松田：8～14											
[履修要件]											
天然物薬学Ⅰ、天然物薬学Ⅱを履修していることが望ましい。											
[成績評価の方法・観点]											
中間試験50%、定期試験50%											
[本講義と関連する講義]											
薬用植物学、天然物薬学Ⅰ、天然物薬学Ⅱ、医薬品化学											
-----天然物薬学Ⅲ（生薬学・漢方）【H30以降入学者用】(2)へ続く↓↓↓											

天然物薬学Ⅲ（生薬学・漢方）【H30以降入学用】(2)

[対応するコアカリキュラム一般目標（薬学科）]

C4(3)、C5 (1) (2)、C6(7)、E2(7) (10)

[教科書]

大村智監修、供田洋・黒田照夫編 『化学療法学 第2版』（南江堂）ISBN:ISBN978-4-524-40349-3（必要に応じて授業中にプリントを配布する）

[参考書等]

（参考書）

Robert A.Weinberg著、武藤誠・青木正博訳 『がんの生物学 第2版』（南江堂）ISBN:ISBN 978-4-524-26581-7

日本生薬学会 監修 『現代医療における漢方薬 第3版』（南江堂）ISBN:978-4-524-40373-8

伊藤美千穂、北山隆 監修、原島広至著 『生薬単 第3版』（丸善雄松堂）ISBN:978-4-8419-4008-4

伊藤美千穂 編著 『生薬学へのいざない』（京都廣川書店）ISBN:978-4-901789-27-1

[授業外学修（予習・復習）等]

配布プリントへの書き込みだけでは十分ではないため、各自講義ノートを作成し、履修内容をまとめ、復習すること。

（その他（オフィスアワー等））

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング				U-PHA00 2C019 SJ86							
授業科目名 ＜英訳＞		生命有機化学演習 Organic Chemistry of Life (Flipped Class)				担当者所属・ 職名・氏名		化学研究所 化学研究所 化学研究所 化学研究所	教授 准教授 助教 特定助教	上杉 志成 佐藤 慎一 竹本 靖 安保 真裕	
配当 学年	2回生以上	単位数	2	開講年度・ 開講期	2023・ 後期	曜時限	火3	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
学科		薬科学科,薬学科				科目に対する区分		選択			
[授業の概要・目的]											
上杉教授がネット配信し、全世界で8万人が受講した「The Chemistry of Life」のリアル授業。薬学の大学院進学を希望する2回生を対象とする。特に化学系と生物系のコースに進む薬学生は履修すべき授業である。 この授業では、研究室、就活、企業で将来活躍するための基礎演習をおこなう。つまり、知識を得るだけではなく、得た知識を道具にしてアイデアを出す力（生産力）を養う。結果だけを積み重ねた知識は、すぐに色あせる。これからの時代に必要なのは、どのように知識を使ってアイデアを生産し、どう他人を説得するかだ。 生き物の営みは化学（つまり分子の働き）でなりたっている。生き物の仕組みの全てを化学で語ることができるはず。そして、化学は「物質を作り出す学問」でもある。生き物を本当に化学で理解したのならば、生き物の仕組みを化学で人工的に作ったり、化学の力で生き物の営みを操る物質を創造することができる。生命の有機化学は、化学と生物の両方の知識を道具にしてアイデアの出し方を学ぶには好都合な分野なのだ。全ての薬学生が知るべき化学と生物学の基本的事項を確認しながら、自分でいろいろなアイデアを生んで生産的な人材になることを目標とする。											
[到達目標]											
・専門的な化学構造式記述法を実践し、構造式を三次元的に理解し使えるようになる。 ・生体分子(核酸、タンパク質、糖鎖、脂質)の化学的な性質を理解し使えるようになる。 ・生命現象を操作するための基本的技術を理解できるようになる。 ・化学と生物学の基本的な英語表現を理解し使えるようになる。 ・典型的なアイデア創出法を理解し、使えるようになる。 ・自分で研究や技術のアイデアを生み出せるようになる。 ・グループで議論し成果をだせるようになる。 ・研究室や企業で生産力の高い人材となる素養を身につける。											
[授業計画と内容]											
インターネットを活用した反転授業(Flipped Classroom)を行う。インターネット上の短い講義を自宅で受講し、実際の教室ではインタラクティブな演習を行う。インターネット講義は英語で行われるが(英語字幕あり)、教室での演習は日本語で行う。具体的には以下の題材を取り上げて、グループで演習を行う。カッコ内は他の薬学専門科目との関連を示す。教科書は必要ない。 第1週：反転授業の解説(上杉教授) 第2週：専門的な化学構造式記述法と演習(上杉教授)（マクマリー1） 第3週：核酸の化学構造(上杉教授)（マクマリー2 4） 第4週：核酸の合成と利用(佐藤准教授)（マクマリー2 4） 第5週：アイデア創出法（1）(上杉教授) 第6週：アミノ酸の化学構造(上杉教授)（マクマリー1 9） 第7週：タンパク質の化学構造と化学合成法(上杉教授)（マクマリー1 9） 第8週：組み合わせ化学と化学遺伝学(上杉教授)（医薬品化学） 第9週：蛍光化合物とその生命科学への利用(上杉教授)（マクマリー1 1） 第10週：蛍光タンパク質とその生命科学への利用(安保助教) 第11週：アイデア創出法（2）(上杉教授) 第12週：糖と脂質を制御するアイデア(竹本助教)（マクマリー2 1， 2 2） 第13週：癌とウイルスを制御するアイデア(上杉教授)（医薬品化学） 第14週：総まとめ演習(上杉教授) (注)反転授業であり、教室では常にアクティブな議論を行う。そのため、フィードバック期間はない。毎回の講義で評価されるため、期末試験はない。											
----- 生命有機化学演習(2)へ続く↓↓↓ -----											

生命有機化学演習(2)

【履修要件】

高校で生物Ⅱを履修している必要はありません。
この科目の内容は、全学共通科目「生命の有機化学」（前期提供）を薬学部生に最適化した形で取り上げています。
従って、薬学部の学生は全学共通科目ではなく、この科目を履修してください。

【成績評価の方法・観点】

実際の授業の出席状況と積極性(60%)、演習(40%)により評価する。演習の評価は受講生の相互投票による。期末筆記試験は無い。

【本講義と関連する講義】

基礎有機化学（Ⅰ、Ⅱ）、生物化学（Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ）、有機化学（Ⅰ、Ⅱ）、医薬品化学、薬理学Ⅰ

【教科書】

使用しない
リアル授業では、プレノートを配布する。

【参考書等】

（参考書）
上杉 志成 『京都大学 アイデアが湧いてくる講義』（祥伝社黄金文庫, 2017年）ISBN:978-4-396-31718-8（本講義の基本的内容をカバーした日本語参考書）

【授業外学修（予習・復習）等】

反転講義であるので、短いビデオをYOUTUBEなどで前もって視聴する必要がある（毎週30分程度）。それ以外の宿題は課さない。

（その他（オフィスアワー等））

＜予告＞

・講義室が50名で満席となるため、申込者数が定員を超えた場合には無作為抽選を実施する場合があります。

＜注意事項＞

・高等研究院物質－細胞統合システム拠点(iCeMS)本館2階(東一条交差点上ル)にて授業を行います。受講生用の駐輪スペースはありません。

＜受講者アンケートより＞

・これぞ求めている授業でした。また、このような授業を受けたいです。本当にありがとうございました。
・大学っぽくて本当に面白かったです！
・化学、生物学の知識だけでなく、英語やアイデアを出す方法も学べて、とてもためになりました。今後に生きる授業でした。
・素晴らしい授業でした。感動しました。
・飽きさせないよう工夫されており、ありがたかった。付け焼刃の知識でも比較的对応できるように工夫されていた。

・教授の知識量に圧倒されるとともに、突飛なアイデアの出し方も教えてくださり、今後の人生に活かしていきたいと思います！
・先生の話がとても聴衆を引き付けるもので、聞いていて様々な分野に興味を覚えた。反転授業は、非常に効率的で、他の授業でも採用してもらいたいと思った。
・家で見てくるビデオが本当にわかりやすく面白かった。英語のリスニングの勉強にもなり、一石二鳥だった。
・グループでの議論は就活のようで、いい経験になった。

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング		U-PHA00 3C018 SJ86											
授業科目名 ＜英訳＞		創薬有機化学演習【H30以降入学者用】 Organic Chemistry Seminar				担当者所属・ 職名・氏名		薬学研究科 薬学研究科 薬学研究科 薬学研究科 薬学研究科		教授 助教 助教 助教 特定助教		掛谷 秀昭 南條 毅 倉永 健史 有地 法人 黒田 悠介	
配当 学年	2,3回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2023・ 前期	曜時限	月3	授業 形態	演習	使用 言語	日本語		
学科		薬学部,薬科学科,薬学科				科目に対する区分		選択					
[授業の概要・目的]													
創薬研究におけるリード化合物からの構造最適化研究や臨床試験に供する大量の原薬生産では、目的の化合物を効率的に調製する化学合成経路の立案が求められる。創薬シーズとして魅力的な天然物やこれまでに開発された医薬品の合成例を学ぶとともに、創薬研究に有用な実践的な有機化学演習を行う。													
[到達目標]													
1. 天然物に代表される複雑な分子骨格を有する化合物の合成経路や反応機構、さらには作用機序解析法を理解できる。 2. 構造未知の化合物のスペクトルデータを解析し、化学構造を考察できる。 3. 医薬品の化学合成プロセスを理解し、目的とする化合物の合成法を立案できる。													
[授業計画と内容]													
1. スペクトル解析演習1 2. スペクトル解析演習2 3. スペクトル解析演習3 4. スペクトル解析演習4 5. 有機反応化学演習1 6. 有機反応化学演習2 7. 有機反応化学演習3 8. 有機反応化学演習4 9. 医薬品合成化学演習1 10. 医薬品合成化学演習2 11. 医薬品合成化学演習3 12. 医薬品合成化学演習4 13. 機能性物質合成化学演習 1 14. 機能性物質合成化学演習 2 15. 機能性物質合成化学演習 3													
[履修要件]													
実践的な創薬有機化学演習を行う観点から、「医薬品化学」、「有機化学5」、「天然物薬学I」、「天然物薬学II」を履修済み（もしくは同時に履修）、「有機化学IV」を履修予定であることが望ましい。													
[成績評価の方法・観点]													
出席レポート100%（講義時に実施する小テスト、及び、各回に課すレポートにより評価する。）													
[本講義と関連する講義]													
基礎有機化学Ⅰ・Ⅱ、有機化学Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ、医薬品化学、天然物薬学Ⅰ・Ⅱ、生命有機化学演習													
創薬有機化学演習【H30以降入学者用】(2)へ続く↓↓↓													

創薬有機化学演習【H30以降入学者用】(2)

【対応するコアカリキュラム一般目標（薬学科）】

C3

【教科書】

プリントを配付する。

【参考書等】

（参考書）

日本化学会編『生物活性分子のケミカルバイオロジー』（化学同人）ISBN:978759813791

Robert B. Grossman 著. 奥山格 訳『有機反応機構の書き方 基礎から有機金属反応まで』（丸善出版）ISBN:978-4-621-08198-3

鈴木 啓介『天然有機化合物の合成戦略』（岩波書店）ISBN:9784007305665

R. M. Silverstein, F. X. Webster, D. J. Kiemle, D.L.Bryce 著. 岩澤 伸治, 豊田 真司, 村田 滋 訳.『有機化合物のスペクトルによる同定法』（東京化学同人）ISBN:9784807909162

有機合成化学協会 編『トップドラッグから学ぶ創薬化学』（東京化学同人）ISBN:978-4807907762

有機合成化学協会 編『医薬品の合成戦略』（化学同人）ISBN:978-4759816174

『HGS立体化学分子模型4010学生用セット』（丸善）ISBN:978-4902897272（他のメーカーの分子模型でも構いません。）

柴崎正勝ら監訳『マクマリー有機化学 生体反応へのアプローチ』（東京化学同人）ISBN:9784807906918

【授業外学修（予習・復習）等】

有機合成試薬や反応機構、天然物薬学に関する基本的事項を履修していることを前提として、医薬品の合成経路及び構造解析などを解説する。理解が不十分な工程があれば、有機化学の該当部分の復習が必須である。事前に配布する課題プリントについて予習が必要であり、演習ではその解説および討論（グループディスカッション）などを行う。

（その他（オフィスアワー等））

特別実習において有機系研究室への配属を希望する者、製薬企業における研究開発に従事することを希望する者は、特に履修することが望まれる。

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング		U-PHA00 2C101 LJ86									
授業科目名 <英訳>		物理化学I (量子化学) 【H30以降入学者用】 Physical Chemistry I (Quantum Chemistry)				担当者所属・ 職名・氏名		薬学研究科 教授 加藤 博章			
配当 学年	2,3回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2023・ 前期	曜時限	木1	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
学科		薬学部,薬科学科,薬学科				科目に対する区分		選択			
[授業の概要・目的]											
本講義で受講者は、分子とは何か、原子をつなげて分子を構成する化学結合とは何かを学ぶ。すなわち、分子の構造・性質・反応を理解するための法則原理である量子化学の基礎事項について理解できるようになる。量子化学の基礎となるのは量子力学である。まず始めに、物質の運動を規定しているのはニュートン力学だが、それを分子に適用しようとすると破綻するために量子力学が生み出された過程を学ぶ。ついで、量子力学の基本原則と波動方程式を学ぶ。さらに、波動方程式で記述される分子の振る舞いを学び、量子化学計算によって分子の構造や性質そして化学反応性を予想できることを理解する。 分子と分子中の電子の振る舞いを理解するには量子化学が必要である。すなわち、量子化学は、物理化学、無機化学、有機化学、生物化学を問わず、すべての化学の基礎であるばかりでなく、分子から生命現象を理解し、医薬設計へと応用する場合の基礎となっている。											
[到達目標]											
1. なぜ、量子論が必要となるのか、古典物理学の破綻を基に説明できる。 2. シュレディンガーの波動方程式の基本を説明できる。 3. 分子軌道に基づいて化学結合の説明ができる。 4. フロンティア軌道理論で化学反応の起る仕組みについて基本を説明できる。											
[授業計画と内容]											
1. 量子化学を学ぶ意義 2. 量子論の誕生の背景と量子論の基本概念 (1) 3. 量子論の誕生の背景と量子論の基本概念 (2) 4. 量子力学の基本原則について 5. 井戸型ポテンシャルとシュレディンガー方程式 6. 水素原子の波動方程式 7. 水素原子の原子軌道 8. 多電子原子の量子状態と近似法の基礎 9. 水素分子イオンと分子軌道法 10. 二原子分子の分子軌道と σ および π 結合 11. 炭化水素分子の混成軌道 12. 簡単な分子軌道計算と分子軌道法に基づく化学反応論 13. 原子価結合と交換相互作用 14. 分子の電子状態計算の方法と実際 15. 軌道相互作用に基づく分子間相互作用											
[履修要件]											
1. 高校生レベルの古典物理学に関する学習を終えているように努めていること、全学共通科目の初習物理学または物理学基礎論AB履修を推奨する。 2. 微分方程式（微分積分学）と行列・行列式（線形代数学）に関する数学の準備、全学共通科目の数学（微分積分学AB・線形代数学AB）の履修を推奨する。											
----- 物理化学I (量子化学) 【H30以降入学者用】 (2)へ続く ↓ ↓ ↓											

物理化学I（量子化学）【H30以降入学者用】(2)

【成績評価の方法・観点】

小テストを5回程度実施（30%）、定期試験（70%）の割合で評価する。小テストでは、講義内容のうち重要な問題について理解度を問う。定期試験では、量子化学の基本原則を理解しているか、波動方程式を解けるか、分子が安定な理由を量子化学的に説明できるか、原子軌道と分子軌道の性質や特徴を説明できるかが問われる。

【本講義と関連する講義】

基礎物理化学（熱力学）、基礎有機化学I、II、有機化学I、物理化学III、分析化学I、生物化学I

【対応するコアカリキュラム一般目標（薬学科）】

C1（1）、C2（4）、C3（1）（2）（3）

【教科書】

阿部正紀『はじめて学ぶ量子化学』（培風館）ISBN:4563045470（記述は平易だが、理系の化学の学生が基礎として必要な量子力学の内容を網羅している優れた入門書。ただし、自習する場合は、参考書による補足がいる。）

【参考書等】

（参考書）

マッカーリ、サイモン『物理化学（上）』（東京化学同人(1999)）ISBN:4807905082（化学の専門家をめざす量子化学の初心者が自学自習するために適した名著。本講義の教科書の詳しい説明が得られる。数学の補足も充実している。）

金折賢二『量子化学 基礎から応用まで』（講談社）ISBN:9784065133309（高校物理の内容から量子化学まで平易に書かれているが、理系学部で習得すべき量子化学がきちんと学べる）

D.O. Hayward、立花明知 訳『入門 量子化学』（化学同人(2005)）ISBN:4759810099（初年時に化学の基礎事項を学んだ学生が、その基本原理としての量子化学の初歩を学ぶために適している。）

高塚和夫『化学結合論入門—量子論の基礎から学ぶ—』（東京大学出版会(2007)）ISBN:4130625063（量子化学に基づいて化学結合とその反応性を学べる優れた入門書）

アトキンス『物理化学（上）』（東京化学同人）ISBN:4807909088（物理化学の標準的な教科書における量子化学が記載されている）

マクマリー『有機化学—生体反応へのアプローチ—』（東京化学同人）ISBN:9784807906918（量子化学で取り扱う有機化学的な内容の復習に用いる）

その他コメント：

HGS分子構造模型C型セット有機化学実習用（丸善出版(2017)）などの分子モデルの利用を推奨します。

【授業外学修（予習・復習）等】

教科書を基に予習を行うこと。特に、数学的な背景については、理解した上で授業に出席することが望ましい。講義内容を整理して理解するため、ならびに理解内容を定着させるために復習を欠かさないこと。

（その他（オフィスアワー等））

数式が示す物理化学的な意味を理解する楽しさを伝えたいと思います。
大学らしい化学の学習は量子化学から始まります。

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング			U-PHA00 2C102 LJ86								
授業科目名 <英訳>		物理化学Ⅱ（電気化学・ナノ化学）【H30以降入学者用】 Physical Chemistry II (Electro- and Nano- Chemistry)				担当者所属・ 職名・氏名		薬学研究科 教授 松崎 勝巳 武庫川女子大学薬学部 教授 矢野 義明			
配当 学年	2,3回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2023・ 前期	曜時限	水2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
学科		薬学部,薬科学科,薬学科				科目に対する区分		選択			
[授業の概要・目的]											
複雑な不均一界面系（微小粒子系を含む）・高分子の基本的性質と研究方法、電解質水溶液のイオン平衡とイオン輸送、ならびに、これらの生命科学や薬学への応用について講義する。											
[到達目標]											
(1) 界面化学の基礎およびその薬学・生命科学との関連について説明できる。 (2) コロイド化学の基礎およびその薬学・生命科学との関連について説明できる。 (3) 電解質水溶液のイオン平衡について説明できる。 (4) 電解質水溶液のイオン輸送について説明できる。 (5) 高分子化学の基礎およびその薬学・生命科学との関連について説明できる。											
[授業計画と内容]											
(1) 導入講義 (2) 界面張力と界面エネルギー (3) 吸着 (4) 界面活性剤 (5) 親水コロイドと疎水コロイド (6) 疎水コロイドの安定性：DLVO理論 (7) コロイド粒子の光散乱 (8) コロイド粒子の大きさの測定 (9) 電解質溶液の熱力学 (10) 電解質溶液の電気伝導 (11) 電気伝導と拡散 (12) 高分子の特徴・化学構造 (13) 高分子鎖のコンフォメーション・高分子溶液の性質 (14) 生体高分子の性質 (15) 高分子の力学的性質(レオロジー)											
[履修要件]											
特になし											
[成績評価の方法・観点]											
課題提出（40％）、定期試験（60％）で評価する。コロイド界面化学、高分子化学、電気化学およびそれらの薬学・生命科学との関連に関する基礎知識、および種々の数式のもつ意味を理解しているかが問われる。											
[本講義と関連する講義]											
基礎物理化学（熱力学）、分析化学Ⅰ											
[対応するコアカリキュラム一般目標（薬学科）]											
C1（1）、C1（2）、C2（2）、C6（2）、E5（1）											
----- 物理化学Ⅱ（電気化学・ナノ化学）【H30以降入学者用】(2)へ続く↓↓↓											

[教科書]

使用しない

[参考書等]

（参考書）

青木・三輪 『Innovated物理化学大義第2版』（京都廣川書店）ISBN:978-4-909197-00-9
 桐野 豊 編 『生命薬学テキストシリーズ 物理化学 上』（共立出版）ISBN:4-320-05511-x
 日本化学会 編 『コロイド科学 I.基礎および分散・吸着』（東京化学同人）ISBN:4-8079-0435-3
 大塚利行, 加納健司, 桑畑進 『ベーシック電気化学』（化学同人）ISBN:9784759808612
 大島広行 訳 『コロイド科学—基礎と応用—』（東京化学同人）ISBN:978-4-8079-0844-8
 高分子学会編 『基礎高分子科学』（東京化学同人）

[授業外学修（予習・復習）等]

プリントを授業時に配布するので、予習は不要。授業後、数式を自分で追跡してみるとともに、参考書等で関連項目を復習しておくこと。

（その他（オフィスアワー等））

複雑な不均一界面系である生体や医薬品製剤の基礎的知識と物理化学的研究方法を学びます。

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング				U-PHA00 2C103 LJ86							
授業科目名 <英訳>		物理化学Ⅲ（構造化学）【H30以降入学者用】 Physical Chemistry III (Structural Chemistry)				担当者所属・ 職名・氏名		薬学研究科 薬学研究科		教授 加藤 博章 准教授 小川 治夫	
配当 学年	2,3回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2023・ 後期	曜時限	火2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
学科		薬学部,薬科学科,薬学科				科目に対する区分		選択			
[授業の概要・目的]											
本講義で受講者は、分子と分子の間あるいは、原子と原子の間の相互作用について物理化学的原理と法則を学ぶ。ついで、それらがタンパク質や核酸など生体高分子の構造形成や分子間相互作用において、どのように役立っているのかを学び、生体高分子の立体構造が機能を発揮する仕組みを深く理解する。さらに、学習した分子間相互作用の解明には、原子間の距離と角度の情報の精密な計測結果が証拠となっていることから、分子の形を原子レベルで決定できる最も信頼性の高い方法であるX線結晶学について学び、分子構造決定の過程と問題点の理解を深める。 医薬品と受容体の相互作用、受容体の精緻な立体構造形成の仕組みを理解するためには、分子間相互作用と分子の立体構造形成の原理と法則を把握することが不可欠であり、この講義で学ぶ内容は、医薬品の設計合成や薬理活性を研究するための最も重要な基礎である。											
[到達目標]											
1. 生体分子の立体構造とリガンド-受容体相互作用を支配する非共有結合相互作用について説明できる。 2. タンパク質と核酸の立体構造について物理化学的な説明ができる。 3. タンパク質と核酸の相互作用について立体構造を基盤とした説明ができる。 4. X線結晶解析によってタンパク質の立体構造が決定できる原理を説明できる。 5. 極低温電子顕微鏡を用いた単粒子解析によるタンパク質の立体構造解析を説明できる。 6. 立体構造に基づいた医薬品の開発例について説明できる。											
[授業計画と内容]											
1. 導入：物理化学における構造論の位置づけ 2. 生体分子の立体構造を規定する非共有結合相互作用 3. 生体分子の立体構造を規定する非共有結合相互作用その2 4. タンパク質の立体構造形成と分子機能その1 5. タンパク質の立体構造形成と分子機能その2 6. 核酸の立体構造形成と分子機能その1 7. 核酸の立体構造形成と分子機能その2 8. 核酸とタンパク質の相互作用の立体構造基盤 9. 結晶の対称性と群論の基礎 10. X線結晶解析入門1：波動とフーリエ解析 11. X線結晶解析入門2：結晶によるX線回折 12. 立体構造モデルの構築とその精度 13. 極低温電子顕微鏡を用いた単粒子解析の原理 14. 極低温電子顕微鏡を用いた単粒子解析の実例 15. 標的タンパク質の立体構造にもとづいた医薬品開発											
[履修要件]											
1. 講義への積極的な参加：本講義では、講述内容の理解度の確認を目的としてクイズ&議論を実施する。この仕組みを成功させるためには、受講者と教員、あるいは受講者どうしの意見交換が重要であり、積極的な取り組みを要請する。 2. 指定された資料の精読：本講義では、沢山の教科書と参考書や論文資料などを基に講義内容を組み立てている。そのため、毎回の講義内容のプリントを読むだけでなく、引用元の教科書などを読むことが必要である。また、関連する資料を調査することが深い学びに導いてくれる。 3. 基礎物理化学（熱力学）、生物化学Iをすでに履修していること。											
-----物理化学Ⅲ（構造化学）【H30以降入学者用】(2)へ続く↓↓↓											

物理化学Ⅲ（構造化学）【H30以降入学用】(2)

【成績評価の方法・観点】

小テストまたはレポート 3 回 30 %、期末試験 70 % の割合で評価する。小テストでは、一連のトピックが終了した時点での到達度を評価する。定期試験では、到達目標に挙げた 5 項目の達成度を評価する。なお、分子構造に関する講義であることから、説明においては化学構造式を用いて表現することが要求される点に注意すること。

【本講義と関連する講義】

物理化学Ⅰ、生物化学Ⅰ, Ⅱ, Ⅲ、物理化学Ⅳ、分析化学Ⅲ；全共科目：基礎物理化学（熱力学）

【対応するコアカリキュラム一般目標（薬学科）】

C 1（1）、C2（4）、C4（1）（2）（3）C6（2）（3）（4）

【教科書】

アトキンス『アトキンス物理化学（下）第10版』（東京化学同人(2017)）ISBN:9784807909087（授業計画の1－3に対応）
デービッドネルソン、マイケルコックス『レーニンジャーの新生化学』（廣川書店）ISBN:4567244060（授業計画の4－6に対応）
David Blow『Outline of Crystallography for Biologists』（Oxford University Press (2002)）ISBN:0198510519（授業計画の7－14に対応）
上記、Outline of Crystallography for Biologistsについては、化学同人から翻訳版「生命系のためのX線解析入門」が出版されている。

【参考書等】

（参考書）

Carl Branden & John Tooze『Introduction to Protein Structure 2nd ed.』（Garland (1999)）ISBN:9780815323051（タンパク質と核酸の立体構造に関する世界的なスタンダードの教科書）
John Kuriyan, Boyana Konforti, David Wemmer『The Molecules of Life; Physical and Chemical Principles』（Garland Sciences (2013)）ISBN:0815341881（創薬研究者志望の学部学生向けに書かれた生物物理化学の名著）
Mathews, Van Holde, Appling, Anthony-Cahill『Biochemistry 4th ed.』（Pearson (2013)）ISBN:0138004641（物理化学の記述が充実している生化学の教科書）
その他コメント：
1. タンパク質分子を表示するために、ソフトウェアPyMolの利用を推奨します。
2. HGS分子構造模型C型セット有機化学実習用（丸善出版(2017)）などの分子モデルの利用を推奨します。
3. Introduction to Protein Structureについては、ニュートンプレス(2000)から翻訳版が出版されています。

【授業外学修（予習・復習）等】

各回の授業前に、指定された予習を行っておくこと。本科目は、単に断片的な知識を学ぶのではなく、論理的な関係性の理解を深める内容となっていることから、授業を基点に各自がさらに参考資料を調査することで深く学習することを奨励します。

（その他（オフィスアワー等））

分子構造に基づいて生物機能を理解する楽しさを伝えたいと思います。

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング				U-PHA00 3C104 LJ86									
授業科目名 <英訳>		物理化学Ⅳ（生物物理化学）【H30以降入学者用】 Physical Chemistry IV (Biophysical Chemistry)				担当者所属・ 職名・氏名		薬学研究科 薬学研究科 薬学研究科 薬学研究科 薬学研究科		教授 教授 教授 准教授 准教授 准教授		松崎 勝巳 加藤 博章 石濱 泰 星野 大 杉山 直幸 小川 治夫	
配当 学年	2,3回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2023・ 後期	曜時限	木2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語		
学科		薬学部,薬科学科,薬学科				科目に対する区分		選択					
[授業の概要・目的]													
創薬の主なターゲットは酵素・受容体などのタンパク質である。本科目では、水溶性タンパク質および膜タンパク質についてその構造形成と機能発現機構を解明するための方法論および基礎知識について、最新の研究成果も交えて概説する。													
[到達目標]													
1. タンパク質のネイティブ構造の安定性を熱力学的に解析できる。 2. 生体膜の基本構造およびその基礎となる脂質二分子膜・膜タンパク質の構造形成原理や動的性質を説明できる。 3. プロテオミクスによるタンパク質の網羅的解析法およびタンパク質の翻訳後修飾について説明できる。 4. 受容体とリガンドとの相互作用の分子構造基盤を具体例を挙げて説明できる。													
[授業計画と内容]													
1. タンパク質のネイティブ構造の特徴 2. タンパク質の高次構造を規定する因子 3. タンパク質の動的な立体構造変化 4. タンパク質のネイティブ構造の安定性 5. タンパク質のフォールディング反応の速度論解析法 6. タンパク質の構造変化により引き起こされる疾病 7. 生体膜の基本構造 8. 脂質二分子膜の構造 9. 膜タンパク質 10. 生体膜の動的構造 11. プロテオミクスによるタンパク質の網羅的な解析法 12. タンパク質の翻訳後修飾解析 13. 膜タンパク質の立体構造と機能 14. 酵素の基質結合部位が有する立体構造上の特徴と機能との関係 15. 膜受容体と基質との相互作用の分子構造基盤													
[履修要件]													
特になし													
[成績評価の方法・観点]													
到達目標1・3・4が達成できているかどうかをレポートの内容（70％）、到達目標2が達成できているかどうかを期末試験（30％）で評価する。													
[本講義と関連する講義]													
基礎物理化学（熱力学）、物理化学Ⅱ・Ⅲ、分析化学Ⅲ													
-----物理化学Ⅳ（生物物理化学）【H30以降入学者用】(2)へ続く↓↓↓													

物理化学Ⅳ（生物物理化学）【H30以降入学用】(2)

【対応するコアカリキュラム一般目標（薬学科）】

C 1 (1) (2)、C 2 (4) (5)、C 4 (1) (2) (3)、C 6 (2) (3) (6)、E 1 (1)

【教科書】

プリント

【参考書等】

（参考書）

桐野 豊 編『生命薬学テキストシリーズ 物理化学 下』（共立出版）

浜口浩三 著『改訂 蛋白質機能の分子論』（学会出版センター）

Terry P. Kenakin 『A Pharmacology Primer (3rd ed.) ;Theory, Applications, and Methods』（Academic Press）

【授業外学修（予習・復習）等】

プリントを授業時に配付するので、予習は不要。授業後、参考書等で関連項目を復習しておくこと。

（その他（オフィスアワー等））

サイエンスの楽しさを伝えたいと思います。

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング				U-PHA00 2C106 LJ86							
授業科目名 <英訳>		分析化学I（化学分析学）【H30以降入学者用】 Analytical Chemistry I (Analytical Chemistry)				担当者所属・ 職名・氏名		薬学研究科 教授 石濱 泰			
配当 学年	2,3回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2023・ 前期	曜時限	月2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
学科		薬学部,薬科学科,薬学科				科目に対する区分		必修			
[授業の概要・目的]											
分析化学は、物質の分離、同定、定量を行うための学問であり、薬学のみならずすべての科学の基礎となる重要な科目である。分析化学1では、薬学に関連した分析化学の理論と、医薬品や生体関連物質の分析への応用に関して講述する。											
[到達目標]											
分析実験の基礎、有効数字・正確さ・精度・誤差について習得する。 化学平衡の基礎について学び、各種滴定法について習得する。 溶媒抽出、クロマトグラフィー、電気泳動について習得する。											
[授業計画と内容]											
1. 分析実験の基礎（器具・試薬・秤量）について 2. 有効数字・正確さ・精度・誤差について 3. 化学平衡の基礎について 4. 酸-塩基平衡について 5. 中和滴定について 6. 非水滴定について 7. 金属錯体について 8. キレート滴定について 9. 沈殿滴定について 10. 電極電位について 11. 酸化還元滴定について 12. 溶媒抽出について 13. クロマトグラフィーの原理について 14. 液体・ガス・薄層クロマトグラフィーについて 15. 電気泳動について											
[履修要件]											
特になし											
[成績評価の方法・観点]											
定期試験(90%)および講義毎の小テスト(10%)により評価する。定期試験では、化学実験の基礎や化学平衡について論述できるか、各種滴定法、溶媒抽出、クロマトグラフィー、電気泳動について十分な理解度があるかどうか問われる。小テストは、講義内容が理解できているかについて問われる。											
[本講義と関連する講義]											
分析化学2・3、物理化学2											
[対応するコアカリキュラム一般目標（薬学科）]											
C1 (1) (2), C2 (1) (2) (3) (5), C3 (5)											
----- 分析化学I（化学分析学）【H30以降入学者用】(2)へ続く↓↓↓											

分析化学I（化学分析学）【H30以降入学者用】(2)

【教科書】

宗林由樹・向井浩 『基礎分析化学』（サイエンス社）ISBN:978-4-7819-1155-7

能田 均・萩中 淳・山口 政俊 『パートナー分析化学II 改訂第3版』（南江堂）ISBN:978-4-524-40344-8（分析化学3でも使います。）

【参考書等】

（参考書）

授業中に紹介する

【授業外学修（予習・復習）等】

毎回、教科書を読んで予習し、わからないところを整理しておく。また、授業後の小テストなどを利用して、復習する。

（その他（オフィスアワー等））

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング			U-PHA00 2C107 LJ86								
授業科目名 <英訳>		分析化学Ⅱ（放射化学）【H30以降入学者用】 Analytical Chemistry II (Radiochemistry)				担当者所属・ 職名・氏名		薬学研究科 教授 小野 正博			
配当 学年	2,3回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2023・ 後期	曜時限	水1	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
学科		薬学部,薬科学科,薬学科				科目に対する区分		必修			
[授業の概要・目的]											
物質の変化に関して理解を深めるために、化学反応での物質の変化の過程を取り扱う反応速度論と原子核の変化により生じる放射線・放射能の基礎(物理学、化学、生物学) について学ぶ。											
[到達目標]											
1. 反応次数、速度定数、反応速度式、代表的な反応次数の決定法、反応速度に影響を与える因子について説明できる。 2. 原子の構造、放射壊変、放射線、放射能について説明できる。 3. 放射線の物質との相互作用について説明できる。 4. 放射線の測定原理、代表的な放射線測定装置について説明できる。 5. 放射性同位体の製造のための核反応と装置について説明できる。 6. 薬学領域における放射線・放射能の利用について説明できる。 7. 放射線の生体への影響について説明できる。 8. 放射線の防護と管理、放射性化合物の安全取り扱いについて説明できる。											
[授業計画と内容]											
① 反応速度論 ・ 反応次数、速度定数、反応速度式、代表的な反応次数の決定法 ・ 反応速度に影響を与える因子 ② 放射線・放射能 1. 放射線・放射能の基礎 ・ 原子の構造、放射線と放射能、同位体 ・ 放射壊変 ・ 放射線の物質との相互作用 ・ 代表的な放射性核種の物理的性質、放射能の単位 ・ 放射線の測定原理、代表的な放射線測定装置 2. 薬学領域における放射線・放射能の利用 ・ 放射性同位体の製造のための核反応と装置 ・ 放射平衡とジェネレータ ・ 放射性化合物の安全取り扱い ・ トレーサ法とその薬学領域への代表的な利用法 3. 放射線の生体への影響 ・ 放射線の線量と生体損傷 ・ 放射線の細胞、組織、臓器、個体への影響 ・ 放射線による生体感受性の差異、影響に変化を及ぼす因子 ・ 放射線の防護と管理											
[履修要件]											
特になし											
----- 分析化学Ⅱ（放射化学）【H30以降入学者用】 (2)へ続く↓↓↓											

分析化学II（放射化学）【H30以降入学者用】(2)

【成績評価の方法・観点】

定期試験。反応速度論に関する基本事項とその応用、放射線・放射能に関する物理学、化学、生物学に関する基本事項およびそれらの関連について論述できるかが問われる。

【本講義と関連する講義】

分析化学IV

【対応するコアカリキュラム一般目標（薬学科）】

C1(1)、(3)、D2(1)

【教科書】

『新 放射化学・放射性医薬品学』（南江堂）

【参考書等】

（参考書）
授業中に紹介する

【授業外学修（予習・復習）等】

教科書を一読し、疑問点等を整理しておくこと。また、必要に応じ、参考書なども利用して、講義内容について理解を深め、知識の定着を図ること。

（その他（オフィスアワー等））

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング		U-PHA00 2C108 LJ86													
授業科目名 <英訳>		分析化学Ⅲ（機器分析化学）【H30以降入学者用】 Analytical Chemistry III (Instrumental Chemistry)				担当者所属・ 職名・氏名		薬学研究科 薬学研究科		教授 准教授		石濱 泰 杉山 直幸			
配当 学年	2,3回生		単位数	2		開講年度・ 開講期	2023・ 後期		曜時限	月1		授業 形態	講義	使用 言語	日本語
学科		薬学部,薬科学科,薬学科				科目に対する区分		選択							
[授業の概要・目的]															
紫外・可視・赤外線吸光分析法、蛍光、核磁気共鳴分光法（NMR）、熱分析、ラマン、原子吸光、旋光分散、円偏光二色性（CD）および質量分析法の理論と応用について講義する。															
[到達目標]															
各種スペクトル分析および機器分析法について、その原理を習得し、応用例について理解する。															
[授業計画と内容]															
1. 物質の光の吸収について 2. 紫外可視分光法の原理について 3. 紫外可視分光法を用いた応用例について 4. 原子吸光と原子発光について 5. 蛍光光度法の原理について 6. 蛍光光度法を用いた応用例について 7. 旋光分散、円偏光二色性測定法の原理と応用について 8. 電磁波の波長、波数、周波数と共鳴エネルギーについて 9. 赤外・ラマン分光法の原理について 10. 赤外分光法を用いた応用例について 11. 核磁気共鳴分光法（NMR）の原理について 12. NMRにおける化学シフト、スピン結合について 13. 熱分析について 14. 質量分析法の原理、イオン化の種類について 15. 質量分析法を用いた応用例について															
[履修要件]															
特になし															
[成績評価の方法・観点]															
定期試験(90%)および講義毎に行う小テスト（10%）で評価を行う。定期試験では、各種スペクトル分析および機器分析法について、その原理を理解し、応用も含めて論述できるかが問われる。また小テストは授業内容に対する理解度を評価対象とする。															
[本講義と関連する講義]															
分析化学 1、物理化学 1、創薬物理化学演習															
[対応するコアカリキュラム一般目標（薬学科）]															
C1(1), C2(1)(4)(5)(6), C3(1)(4), C4(3)															
----- 分析化学Ⅲ（機器分析化学）【H30以降入学者用】(2)へ続く↓↓↓															

分析化学III（機器分析化学）【H30以降入学者用】(2)

[教科書]

能田 均・萩中 淳・山口 政俊 『パートナー分析化学II 改訂第3版』（南江堂）ISBN:978-4-524-40344-8

[参考書等]

（参考書）
授業中に紹介する

[授業外学修（予習・復習）等]

授業前に教科書を読み、不明な点を整理しておくこと。また授業後の小テストなどを用いて復習しておくこと。

（その他（オフィスアワー等））

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング		U-PHA00 3C109 LJ86											
授業科目名 <英記>		分析化学Ⅳ（臨床分析学）【H30以降入学者用】 Analytical Chemistry IV (Clinical Analysis)				担当者所属・ 職名・氏名		薬学研究科 薬学研究科		教授 講師		小野 正博 渡邊 裕之	
配当 学年	3回生以上	単位数	2	開講年度・ 開講期	2023・ 前期	曜時限	金2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語		
学科		薬学部,薬科学科,薬学科				科目に対する区分		選択					
[授業の概要・目的]													
臨床やライフサイエンス領域で利用されている、生体の形態、機能の解析法を講述する。すなわち、画像による形態、機能の診断法の概要とそれに用いる医薬品（造影剤、放射性医薬品）、また、酵素反応や免疫反応などの生化学的反応を用いる生体試料中の生理活性物質の高感度定量分析法（臨床化学分析）の原理と応用について学ぶ。													
[到達目標]													
1. 代表的な画像診断技術について、それぞれの技術の原理、特徴について説明できる。 2. 画像診断法に用いられる医薬品について説明できる。 3. 臨床分析化学の概要について説明できる。 4. 酵素反応、免疫反応などを用いる、生体試料中の生理活性物質の高感度定量分析法の原理と特徴について説明できる。 5. 代表的な画像診断、臨床化学分析法の臨床およびライフサイエンス領域への応用性について説明できる。													
[授業計画と内容]													
1. 生体の形態と機能の解析法 ・臨床で用いられる、生体の形態と機能の解析法 2. 画像診断法とそれに用いられる医薬品 ・核医学検査法、それに用いられる放射性医薬品 ・代表的な治療用放射性医薬品の分子設計、特徴、用途 ・放射性医薬品の管理・取扱いに関する基準と制度 ・放射性医薬品の品質管理、安全取扱 ・X線撮像法とX線造影剤 ・磁気共鳴画像撮影法(MRI)とMRI造影剤 ・超音波診断法、その他の画像診断技術 3. 臨床化学分析 ・臨床分析化学の概要、精度管理、生体試料の取扱 ・酵素を用いた代表的な分析法の原理と特徴 ・酵素を用いた分析法の代表例 ・免疫反応を用いた代表的な分析法の原理と特徴 ・免疫反応を用いた分析の代表例 ・センサー、ドライケミストリー、その他の臨床分析技術 ・画像診断薬以外の代表的なインビボ機能検査薬													
[履修要件]													
本科目の学修には基礎的な放射化学の知識を前提としており、分析化学Ⅱ（放射化学）をすでに履修していることが条件となる。													
分析化学Ⅳ（臨床分析学）【H30以降入学者用】(2)へ続く↓↓↓													

分析化学Ⅳ（臨床分析学）【H30以降入学用】(2)

[成績評価の方法・観点]

定期試験。画像診断技術とそれに用いる医薬品、生化学的反応を用いる生理活性物質の高感度定量分析法とその臨床領域への応用について論述できるかが問われる。

[本講義と関連する講義]

分析化学Ⅱ

[対応するコアカリキュラム一般目標（薬学科）]

C2（6）、E1（2）、F(2)

[教科書]

プリント

[参考書等]

（参考書）

『新 放射化学・放射性医薬品学』（南江堂）

『薬学生のための臨床化学』（南江堂）

[授業外学修（予習・復習）等]

事前に配布するプリントを一読し、疑問点等を整理しておくこと。また、必要に応じ、参考書なども利用して、講義内容について理解を深め、知識の定着を図ること。

（その他（オフィスアワー等））

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング				U-PHA00 2C110 SJ86									
授業科目名 <英訳>		基礎科学演習【H30以降入学者用】 Basic Science Seminar				担当者所属・ 職名・氏名		薬学研究科 薬学研究科 薬学研究科		教授 教授 准教授		加藤 博章 石濱 泰 星野 大	
配当 学年	2,3回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2023・ 前期	曜時限	金3	授業 形態	演習	使用 言語	日本語		
学科		薬学部,薬科学科,薬学科				科目に対する区分		選択					
[授業の概要・目的]													
本演習で受講者は「どうして生命はATPをエネルギー通貨にしているのか」を「問い」として、学生が主体的批判的に思考する過程を通して、活動としての科学を実践的に学ぶ。生命活動のエネルギーの源であるATPは、熱力学、酸化還元反応、代謝の生化学反応、リン酸化による細胞内情報伝達などいろいろな事柄と関わるため、基礎化学と生命科学との結びつきについて具体的な現象を通して原理を理解することができる。また、物理・分析化学の基礎が生命科学を研究するためにどのように活用されるのかを深く理解できる。 受講者は、互いの調査結果を議論することで、実験事実に基づいた推論の過程、科学発見のプロセスを理解する。さらに、調査結果をレポートにまとめて提出することで、論証過程を記述するスキルを習得する。教員は、これらの各過程において指導助言やブレインストーミング、討論に参加して学習を援助する。受講者はこの過程を通じて、科学研究に必要なブレインストーミング、討論、発表、質疑応答、レポート執筆などの基礎的な姿勢・態度・技術を習得する。その結果、科学とは、無知への好奇心によって扇動される楽しい営みであることが理解され、受講者は未知への興味を煽られることで、とことん調べることの魅力に取り憑かれるであろう。													
[到達目標]													
1. 素朴な疑問を科学研究のテーマに設定する過程の要点が説明できる。 2. 解答未知の問題を批判的に思考することができる。 3. 対話を通じて問題点を浮かび上げ、解決に向けた指摘ができる。 4. 説得力のある発表を行い、論理的な文章を書くことができる。 5. ATPの科学について物理化学的な説明ができる。													
[授業計画と内容]													
1. オリエンテーション 2－3. 具体的に調査するテーマの設定に向けたブレインストーミング 4－7. テーマに基づいた調査の実施 8－9. 調査のまとめと発表資料の作成 10－11. 発表会と質疑応答の実施 12－14. レポートの執筆と添削指導 15. まとめ													
[履修要件]													
1. 履修定員を20名程度とする。 履修希望者には、シラバスを読んで履修に向けた志（志望の動機や目的）のエッセイを3月下旬に提出してもらい、それを元に4月初旬に選抜を行う。 2. 講義への積極的な参加：本講義では、学生が疑問を主体的に調査して学ぶ。そのため、単に出席するだけではなく、議論と調査に向けた予習・復習、会合での発言、提出物の作成に積極的に取り組むことが要請される。 3. 全学共通科目：基礎物理化学（熱力学）、基礎有機化学I、基礎有機化学II、基礎化学実験、薬学専門科目：生物化学I（物質生化学）、薬学研究SGD演習を履修していることを要件とする。													
基礎科学演習【H30以降入学者用】(2)へ続く↓↓↓													

基礎科学演習【H30以降入学者用】(2)

【成績評価の方法・観点】

話し合いでの質疑応答の回数と議題解決への貢献度 30%、調査結果のプレゼンテーションの内容と説得力 30%、レポートの論理性（論証と論拠の的確さ） 40%の割合で、到達目標に挙げた 5 項目の総合的な達成度を評価する。

【本講義と関連する講義】

薬学研究SGD演習、物理化学I, II, III, IV、分析化学I, II, III、生物化学I, II、全共科目：基礎物理化学（熱力学）、情報基礎、基礎有機化学I,II、情報基礎、統計入門

【対応するコアカリキュラム一般目標（薬学科）】

A(2)(3)(5)、C1(1)(2)(3)、C2 (1)(2)(3)(4)、C6(5)、G(1)(2)(3)

【教科書】

使用しない

【参考書等】

（参考書）

Peter W. Atkins、米沢富美子訳 『エントロピーと秩序－熱力学第二法則への招待』（日経サイエンス（1992））ISBN: 4532520142（熱力学を難しい数式を用いずに解説した名著。熱力学が科学の基本であることが納得できるであろう。）

John Kuriyan, Boyana Konforti, David Wemmer 『The Molecules of Life #8211 Physical and Chemical Principles』（Garland Sciences (2013)）ISBN:0815341881（創薬研究者志望の学部学生向けに書かれた生物物理化学の名著）

渡辺 正、中林誠一郎 『電子移動の化学－電気化学入門』（朝倉書店 (1996)）ISBN:4254145934（酸化的リン酸化や光合成の化学などを学習する生物系の学生向けに書かれた電子移動の化学の入門書）

福澤一吉 『議論のレッスン』（NHK出版）ISBN:4140885521（議論（論証）の構造や規則が理解できる優れた本）

新井和弘、坂倉杏介 『グループ学習入門』（慶應義塾大学出版会）ISBN:476642039X（協働学習、話し合い、成果発表などに関する初歩が書かれている入門書）

その他：

1. HGS分子構造模型C型セット有機化学実習用（丸善出版(2017)）などの分子モデルの利用を推奨します。

2. パソコンに分子を表示して構造を調べるために、ソフトウェアPyMolの利用を推奨します。

【授業外学修（予習・復習）等】

基礎物理化学（熱力学）と生物化学Iで用いた教科書などで、予習復習を実施すること。

文献調査を行い結果をまとめて議論するための準備が必要となります。

レポートの添削指導に対する修正への取り組みが必要となります。

（その他（オフィスアワー等））

授業には、パソコンを持参すること。

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング				U-PHA00 1C201 LJ86							
授業科目名 <英訳>		生物化学I (物質生化学) 【H30以降入学者用】 Biological Chemistry 1				担当者所属・ 職名・氏名		薬学研究科 准教授 柿澤 昌			
配当 学年	1回生以上	単位数	2	開講年度・ 開講期	2023・ 後期	曜時限	木1	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
学科		薬学部,薬科学科,薬学科				科目に対する区分		必修			
[授業の概要・目的]											
生化学とは化学的手段により生命現象を解明する学問である。生体がどんな物質から成り立っているか、それらの物質がいかに合成され分解されるか、これらの物質がどのような性質を持ち、生体の中でどのような機能を営んでいるかを究明する学問である。本講義では、生化学の基本概念および主要な生体成分の性質について講述する。											
[到達目標]											
1. 生命現象を担う分子の構造、性質、役割に関する基本的事項が説明できる。 2. 本講義を履修後、さらに薬学専門実習 4 の生物化学実習Iを履修することで、酵素の反応速度論と阻害機構について説明できるようになるとともに、実際の測定結果に基づいて考察し判断できるようになる。											
[授業計画と内容]											
1. 生体物質化学の基礎 (導入講義) 2. 水の物理化学的特性と生体における役割 3. アミノ酸の特徴ならびにペプチド・タンパク質との関係 4. タンパク質の高次構造と機能の関連 5. タンパク質とリガンドの相互作用の生物学的意義 6. 酵素の作用機構と自由エネルギー 7. 酵素の反応速度論と阻害機構 8. 単糖の分類と構造 9. グルコシド結合と二糖・多糖類の構造・生体における役割 10. ヌクレオチドの分類と構造 11. 核酸の構造と機能 12. 脂質の構造と物理化学的性質 13. 生体膜の構造・物理化学的性質と生体膜を横切る物質輸送 14. 生体エネルギーの産生と生化学的反応間の共役 15. まとめ											
[履修要件]											
特になし											
[成績評価の方法・観点]											
定期試験(筆記)の成績で評価する。到達目標に記した生命現象を担う分子の構造、性質、役割に関する基本的事項の理解と応用力が評価対象となる。											
[本講義と関連する講義]											
生物化学Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ、衛生薬学Ⅰ・Ⅱ											
[対応するコアカリキュラム一般目標 (薬学科)]											
C6 (2) (3) (5)											
[教科書]											
ネルソン、コックス 『レーニンジャーの新生化学：生化学と分子生物学の基本原理解 (第7版) 上巻・下巻』 (廣川書店)											
----- 生物化学I (物質生化学) 【H30以降入学者用】 (2)へ続く↓↓↓											

生物化学Ⅰ（物質生化学）【H30以降入学用】(2)

【参考書等】

（参考書）
授業中に紹介する

【授業外学修（予習・復習）等】

講義ノート・授業資料等を活用した復習により、講義内容のより深い理解と知識の定着をはかること。

（その他（オフィスアワー等））

生体主要成分を学び、薬学専門実習Ⅳと併せて生化学、特に生体物質化学と酵素学の基本概念を理解する。
本講義で触れる内容は生物化学Ⅱ、生物化学Ⅲ及び薬学専門実習Ⅳにおける生物化学実習Ⅰの理解にも必要となるので、しっかりとした復習が望まれる。

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング				U-PHA00 2C202 LJ86									
授業科目名 <英訳>		生物化学Ⅱ（代謝生化学）【H30以降入学用】 Biological Chemistry II (Energy Metabolism)				担当者所属・ 職名・氏名		薬学研究科 薬学研究科		准教授 講師		申 恵媛 加藤 洋平	
配当 学年	2,3回生		単位数	2	開講年度・ 開講期	2023・ 前期	曜時限	木2		授業 形態	講義	使用 言語	日本語
学科		薬学部,薬科学科,薬学科				科目に対する区分		必修					
[授業の概要・目的]													
生命活動の基本となるエネルギー代謝、および生体を構成する糖質、脂質、アミノ酸、ヌクレオチドの合成と分解について理解することを目的とする。さらに、インスリンやグルカゴンなどのホルモンによるこれらの代謝の調節と統合について理解を深めるとともに、生体の恒常性の維持機構について学ぶ。													
[到達目標]													
生命活動の基本となるエネルギー代謝について理解する。 生体を構成する糖質、脂質、アミノ酸、ヌクレオチドの合成と分解について説明できるようになる。 インスリンやグルカゴンなどのホルモンによるこれらの代謝の調節と統合について理解を深める。 生体の恒常性の維持機構について説明できるようになる。													
[授業計画と内容]													
1. 解糖系 2. 糖新生 3. ペントースリン酸経路 4. グリコーゲンの合成と分解 5. クエン酸回路 6. 脂肪酸の異化 7. アミノ酸代謝と尿素回路 8. ミトコンドリアにおける電子伝達反応 9. ミトコンドリアにおけるATP合成 10. 脂質の生合成 11. コレステロールとエイコサノイドの生合成 12. アミノ酸の生合成 13. ヌクレオチドの生合成 14. ホルモンによる代謝の調節と統合（1） 15. ホルモンによる代謝の調節と統合（2）													
[履修要件]													
事前に生物化学Iを受講していること。													
[成績評価の方法・観点]													
小テスト30％、期末テスト70％ 到達目標に記した糖質、脂質、アミノ酸、ヌクレオチドの代謝に関する基本的事項およびホルモンによるこれらの代謝の調節と統合について理解し説明できるか、生体の恒常性の維持機構について概説できるかが評価対象となる。													
[本講義と関連する講義]													
生物化学Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ、衛生薬学Ⅰ・Ⅱ、生理学Ⅱ													
----- 生物化学Ⅱ（代謝生化学）【H30以降入学用】(2)へ続く↓↓↓													

生物化学Ⅱ（代謝生化学）【H30以降入学用】(2)

【対応するコアカリキュラム一般目標（薬学科）】

C6 (1)(2)(3)(5)

【教科書】

ネルソン、コックス 『レーニンジャーの新生化学：生化学と分子生物学の基本原理（第7版）上巻・下巻』（廣川書店）

【参考書等】

（参考書）

『ストライヤー生化学（第6版）』（東京化学同人）
『細胞の分子生物学（第5版）』（ニュートンプレス）
『プロッパ細胞生物学：細胞の基本原則を学ぶ』（化学同人）

【授業外学修（予習・復習）等】

3回行う小テストの前に、それまでの講義の復習をして臨みましょう。

（その他（オフィスアワー等））

生体内の代謝が功妙に調節されている様子を理解する。

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング			U-PHA00 2C214 LJ86								
授業科目名 <英訳>		生物化学Ⅲ（分子生物学）【H30以降入学者用】 Biological Chemistry III (Molecular biology)				担当者所属・ 職名・氏名		生命科学研究科 教授 木村 郁夫			
配当 学年	2,3回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2023・ 後期	曜時限	木1	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
学科		薬学部,薬科学科,薬学科				科目に対する区分		必修			
[授業の概要・目的]											
遺伝子情報伝達の物質的基盤となっている核酸の構造と機能に関する下記の項目について概説する。											
[到達目標]											
1. 核酸の構造と機能について説明できる。 2. 遺伝子と染色体について説明できる。 3. D N A、R N Aおよびタンパク質の生合成について説明できる。 4. 遺伝子発現過程について説明できる 5. 遺伝子発現調節機構について説明できる。 6. 組換えD N Aの基礎技術について説明できる。											
[授業計画と内容]											
1. 導入 2. DNA, RNA, タンパク質 3. DNA合成 4. 遺伝地図 5. 塩基配列決定 6. アノテーションと遺伝子機能同定 7. ゲノムの構成 8. ゲノムの発現 9. トランスクリプトーム 10. プロテオーム 11. 細胞と個体におけるゲノム機能 12. ゲノム複製 13. 変異・DNA修復と組換え・転位 14. ゲノムの進化 15. まとめ											
[履修要件]											
本科目の学修には基礎的な生化学の知識を前提としており、生物化学ⅠおよびⅡをすでに履修していることが条件となる。											
[成績評価の方法・観点]											
定期試験（筆記）の成績で評価する。到達目標に記した核酸、遺伝子、染色体について論述できるか、D N A、R N Aおよびタンパク質の代謝や遺伝子発現調節機構や組換えD N Aの基礎技術に対して分子生物学的に論じることができかが評価対象となる。											
[本講義と関連する講義]											
生物化学Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ、感染防御学Ⅰ、生理学Ⅲ											
----- 生物化学Ⅲ（分子生物学）【H30以降入学者用】(2)へ続く↓↓↓											

生物化学Ⅲ（分子生物学）【H30以降入学用】(2)

【対応するコアカリキュラム一般目標（薬学科）】

C4(1), C6(1), C6(2), C6(3), C6(4), C6(7), C7(1), C8(3), C8(4)

【教科書】

プリント配布

【参考書等】

（参考書）

『ゲノム第4版』（メディカル・サイエンス・インターナショナル）

【授業外学修（予習・復習）等】

講義プリントは事前に配布されるので、その内容を一読し、疑問点等を整理しておくこと。また知識の定着を図るために必ず復習を行うこと。

（その他（オフィスアワー等））

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング		U-PHA00 3C215 LJ86									
授業科目名 <英訳>		生物化学Ⅳ（応用生物分子科学）【H30以降入学者用】 Biological Chemistry IV (Applied biomolecular science)				担当者所属・ 職名・氏名		化学研究所		教授 二木 史朗 准教授 今西 未来	
配当 学年	2,3回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2023・ 前期	曜時限	木2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
学科		薬学部,薬科学科,薬学科				科目に対する区分		選択			
[授業の概要・目的]											
遺伝子組み換え技術は、生命科学分野の研究に必須のものである。また、この技術を利用した生物医薬品の開発は、医療・医薬分野に新しい潮流をもたらしている。本講義では、遺伝子工学・タンパク質工学等を含めたバイオテクノロジーに関する基礎知識、およびその医療・医薬への応用について解説する。											
[到達目標]											
1. 遺伝子工学・タンパク質工学等を含めたバイオテクノロジーに関する基礎概念を理解する。 2. 遺伝子工学・タンパク質工学の医療・医薬への応用について理解を深める。											
[授業計画と内容]											
1. 遺伝子組換え技術とバイオテクノロジー 2. 制限酵素とその応用 3. PCR法とその応用 4. 遺伝子クローニング 5. 遺伝子構造の改変 6. 細胞内遺伝子導入 7. トランスジェニック生物 8. 遺伝子ターゲティング 9. ゲノム編集 10. 癌と遺伝子 11. 遺伝子治療 12. 核酸医薬品 13. タンパク質工学の基礎と応用 14. 抗体の構造と多様性 15. 抗体医薬品											
[履修要件]											
特になし											
[成績評価の方法・観点]											
定期試験。遺伝子工学・タンパク質工学等を含めたバイオテクノロジーに関する基礎概念の理解、および、遺伝子工学・タンパク質工学の医療・医薬への応用についての知識が問われる。											
[本講義と関連する講義]											
生物化学Ⅰ～Ⅲ、Ⅴ～Ⅵ、生理学Ⅱ											
[対応するコアカリキュラム一般目標（薬学科）]											
C6（4）											
----- 生物化学Ⅳ（応用生物分子科学）【H30以降入学者用】(2)へ続く ↓ ↓ ↓											

【教科書】

適宜プリント等を配布する。

【参考書等】

（参考書）

『レーニンジャーの新生化学（第7版）』（廣川書店）（その他、授業中に適宜紹介する。）

【授業外学修（予習・復習）等】

日頃から、遺伝子工学・タンパク質工学等を含めたバイオテクノロジー、およびその医療・医薬への応用に関する動向に注意を払うこと。

（その他（オフィスアワー等））

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング				U-PHA00 3C205 LJ86							
授業科目名 <英訳>		生物化学V（細胞生物学）【H30以降入学者用】 Biological Chemistry V (Cell Biology)				担当者所属・ 職名・氏名		生命科学研究科 教授 井垣 達吏 生命科学研究科 准教授 菅田 浩司 生命科学研究科 助教 榎本 将人			
配当 学年	2,3回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2023・ 後期	曜時限	水2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
学科		薬学部,薬科学科,薬学科				科目に対する区分		選択			
[授業の概要・目的]											
本講義では、生命の最小単位である細胞に焦点をあて、生物化学I～IVで習得した種々の生化学的反応を細胞の場で統一的に理解する。また、細胞内小器官の構造と機能、細胞の増殖・分化・細胞死、さらには細胞がつくる社会の成立原理とその破綻による癌の発生機構に関しても理解を深める。細胞生物学を飛躍的に発展させた重要な研究成果も取り上げながら、考えることを重視した講義を行う。											
[到達目標]											
1. 種々の生化学的反応を細胞の場で説明できる 2. 細胞内小器官や小胞の構造と機能を説明できる 3. 細胞の増殖や細胞死の機構とその役割を説明できる 4. 細胞社会の成立原理とその破綻による癌の発生機構を説明できる											
[授業計画と内容]											
1. 細胞生物学概論 2. モデル生物を用いた細胞生物学研究 3. 細胞周期 4. 細胞増殖 5. 細胞死 6. 細胞の数と大きさの制御 7. 膜の構造・膜輸送 8. 細胞内区画と細胞内輸送 9. 細胞骨格と細胞運動 10. 細胞極性と細胞接着 11. 細胞の情報伝達 12. 性と遺伝の細胞生物学 13. がんの発生メカニズム 14. 多細胞生物の発生 15. 細胞のつくる社会											
[履修要件]											
特になし											
[成績評価の方法・観点]											
平常点（小テスト）30％、定期試験70％の割合で評価する。 特に、種々の生化学的反応や細胞内小器官、小胞、細胞骨格、細胞接着、細胞増殖、細胞死の機構やその役割を説明できるか、またそれらの破綻による病態発現（癌など）を説明できるかを評価する。											
[本講義と関連する講義]											
生物化学Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅵ											

生物化学V（細胞生物学）【H30以降入学者用】(2)へ続く↓↓↓											

生物化学V（細胞生物学）【H30以降入学者用】(2)

【対応するコアカリキュラム一般目標（薬学科）】

C6 (1) (2) (3) (4) (5) (6) (7)、C7 (1)

【教科書】

プリント

【参考書等】

（参考書）

『Essential 細胞生物学』

【授業外学修（予習・復習）等】

毎回、講義の最後に講義内容に関する小テストを行い、次回講義の最初にその解説を行う。知識や考え方の定着を図るために、毎回復習を行うこと。

（その他（オフィスアワー等））

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング			U-PHA00 3C216 LJ86									
授業科目名 ＜英訳＞		感染防御学I【H30以降入学者用】 Infection and Host Defense I					担当者所属・ 職名・氏名		医生物学研究所 教授 伊藤 貴浩 医生物学研究所 教授 橋口 隆生 医生物学研究所 教授 伊藤 能永 医生物学研究所 教授 生田 宏一			
配当 学年	2,3回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2023・ 前期	曜時限	水1	授業 形態	講義	使用 言語	日本語	
学科		薬学部,薬科学科,薬学科				科目に対する区分		選択				
[授業の概要・目的]												
本講義では感染に関わる病原微生物とそれに対する生体の防御反応について、細菌学、ウイルス学、免疫学の講義を行う。細菌学として、(1) 細菌の分類と構造、(2) 細菌の生理と代謝、(3) 細菌の遺伝学、(4) 細菌と感染・疾患、(5) 抗菌薬・抗生物質について講述する。さらに、ウイルス学として、(1) ウイルスの性状・分類・構造、(2) ウイルスの複製と病原性の機序、(3) ウイルスの進化とデュアルユーセージ、ウイルス感染症の歴史(4) ウイルス感染症に対する予防・診断・治療法と作用機序について講述する。免疫学として、(1) 免疫系の構成要素と役割、(2) 自然免疫応答、(3) 抗体の構造とB細胞の多様性、(4) T細胞による抗原の認識、(5) リンパ球の分化、(6) 適応免疫応答について講述する。微生物の分類、構造、生活環などに関する基本的事項、ヒトと微生物の関わりにおける生体防御反応に関する知識ならびにそれに関する考察力の修得を目的とする。												
[到達目標]												
1. 細菌の分類、性質、構造、増殖機構について説明できる。 2. 細菌の同化作用、代謝調節、適応について概説できる。 3. 細菌の遺伝子伝達について説明できる。 4. 殺菌、静菌の概念および滅菌法、感染の成立や毒素、代表的な病原細菌について説明できる。 5. 抗菌薬・抗生物質の作用機構および薬剤耐性菌や薬剤耐性化機構について概説できる。 6. ウイルスの性状、分類、構造について説明できる。 7. 個体へのウイルスや寄生虫の感染成立過程と発症プロセスとパターンを概説できる。 8. ウイルスの進化適応・デュアルユーセージについて説明できる。 9. ウイルスに対する検査法・予防法・治療法について説明できる。 10. 免疫系の細胞・器官とその機能を説明できる。 11. 病原微生物に対する自然免疫応答について説明できる。 12. 抗原受容体の構造と多様性ならびに抗原認識について説明できる。 13. リンパ球の分化について説明できる。 14. 病原微生物に対する適応免疫応答について説明できる。												
[授業計画と内容]												
1. 細菌の分類・構造 伊藤（貴） 2. 細菌の生理・代謝 伊藤（貴） 3. 細菌と感染・疾病 伊藤（貴） 4. 抗菌薬・抗生物質 伊藤（貴） 5. 細菌の遺伝学 垣内 6. ウイルスの性状・分類・構造 橋口 7. ウイルス増殖と感染機構 橋口 8. 個体・集団レベルのウイルス感染およびウイルス感染症の歴史 橋口 9. ウイルスに対する宿主の防御機構とウイルスの進化・デュアルユーセージ 橋口 10. ウイルス感染症に対する検査法・予防法・治療法と作用機序 佐藤 11. 免疫学序論、免疫系の構成要素と生体防御における役割、自然免疫（感染に対する即時応答） 生田 12. 自然免疫（感染に対する誘導応答）、抗体の構造とB細胞の多様性 生田 13. T細胞による抗原の認識 伊藤（能） 14. B細胞の分化、T細胞の分化 生田 15. T細胞を介する免疫、B細胞と抗体による免疫 伊藤（能）												
----- 感染防御学I【H30以降入学者用】(2)へ続く↓↓↓												

感染防御学I【H30以降入学用】(2)

【履修要件】

特になし

【成績評価の方法・観点】

定期試験（細菌学、ウイルス学、免疫学）（75％）、その他、平常点（小試験等）（25％）を考慮して総合評価する。

定期試験では、1から14の各到達目標について80％以上の内容を論述できるか、微生物学や免疫学の諸問題や解決策に対して解説することができるかが問われる。到達目標に関わるキーワードの説明は各授業で解説する。

【本講義と関連する講義】

感染防御学II、生物化学III

【対応するコアカリキュラム一般目標（薬学科）】

C8(1)(2)(3)(4), E2(7)

【教科書】

使用しない

【参考書等】

（参考書）

吉田眞一、柳雄介、吉開泰信『戸田新細菌学 改定34版』（南山堂）

高田賢藏 編『医科ウイルス学（改訂第3版）』（南江堂）

Peter Parham 著（笹月健彦監訳）『エッセンシャル免疫学（改訂第3版）』（ディカル・サイエンス・インターナショナル社）

Kenneth Murphyら著（笹月健彦ら監訳）『Janeway's 免疫生物学（原著第9版）』（南江堂）

笹川千尋、林 哲也『医科細菌学（改訂第4版）』（南江堂）

【授業外学修（予習・復習）等】

講義ノートと配布資料を活用した復習により、講義内容のより深い理解と知識の定着を図ること。

（その他（オフィスアワー等））

事前連絡の上、随時可能。学内の各担当講師に連絡のこと。

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング				U-PHA00 3C217 LJ86							
授業科目名 ＜英訳＞		感染防御学Ⅱ【H30以降入学者用】 Infection and Host Defense II				担当者所属・ 職名・氏名		医生物学研究所 教授 伊藤 貴浩 医生物学研究所 教授 橋口 隆生 医生物学研究所 教授 伊藤 能永 医生物学研究所 教授 生田 宏一			
配当 学年	2,3回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2023・ 後期	曜時限	水1	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
学科		薬学部,薬科学科,薬学科				科目に対する区分		選択			
[授業の概要・目的]											
本講義では感染に関わる病原微生物とそれに対する生体の防御反応について、細菌学、寄生虫・原虫学、ウイルス学、免疫学の講義を行う。細菌学、寄生虫・原虫学として、(1) 病原性細菌・真菌やマラリアを含む微生物感染症の病態および病原性発現機構、(2) 細菌と宿主の生理・相互作用について講述する。さらに、ウイルス学として、(1) DNAウイルス感染症、(2) RNAウイルス感染症、(3) 感染症対策の各論について講述する。免疫学として、(1) 粘膜免疫、(2) 免疫記憶とワクチン、(3) 自然免疫系リンパ球、(4) 免疫不全、(5) アレルギー、(6) 移植免疫、(7) 自己免疫、(8) 腫瘍免疫について講述する。各病原微生物の病原性と感染症に関する基本的事項、微生物に対する生体防御反応に関する病態と治療に関する知識ならびにそれに関する考察力の修得を目的とする。											
[到達目標]											
1. ヒトに感染する代表的な病原微生物〔細菌（黄色ブドウ球菌、大腸菌など）・真菌（カンジダ、アスペルギルス）・寄生虫（マラリア、アニサキスなど）・ウイルス（インフルエンザウイルス、コロナウイルス、HIVなど）の各論〕についての病原性ならびに予防・治療的観点も含めた対策を説明できる。 2. 代表的な寄生虫、原虫による感染症について説明できる。 3. 常在性・病原性細菌が宿主の生理に与える影響について説明できる。 4. 代表的なウイルスの生活環および対応する感染症とその対策について説明できる。 5. 粘膜免疫について説明できる。 6. 免疫記憶とワクチンについて説明できる。 7. 自然免疫系リンパ球の機能について説明できる。 8. 免疫不全について説明できる。 9. アレルギー反応について説明できる。 10. 移植免疫について説明できる。 11. 自己免疫応答と自己免疫疾患について説明できる。 12. 抗腫瘍免疫と癌免疫療法について説明できる。											
[授業計画と内容]											
1.病原性細菌・真菌 1 伊藤（貴） 2.病原性細菌・真菌 2 伊藤（貴） 3.細菌と宿主の生理・相互作用 1 伊藤（貴） 4.細菌と宿主の生理・相互作用 2 伊藤（貴） 5.寄生虫・原虫 村越 6.麻疹ウイルス等の呼吸器感染症RNAウイルス 橋口 7.ヒトレトロウイルス、肝炎ウイルス、消化器ウイルス 小柳 8.がんウイルスおよびヘルペスウイルス等のDNAウイルス 橋口 9. BSL4関連ウイルスならびに人獣共通感染症ウイルス 橋口 10.インフルエンザ・コロナウイルス及び感染症研究の最前線 橋口 11.粘膜表面の感染防御、免疫記憶とワクチン 生田 12.自然免疫と獲得免疫の共進化、生体防御機構の破綻 生田 13. IgE介在性免疫とアレルギー 伊藤（能） 14.組織と臓器の移植 伊藤（能） 15.適応免疫応答による正常組織の破壊、がんと免疫系の相互作用 伊藤（能）											
----- 感染防御学Ⅱ【H30以降入学者用】(2)へ続く↓↓↓ -----											

感染防御学II【H30以降入学者用】(2)

【履修要件】

特になし

【成績評価の方法・観点】

定期試験（細菌学、ウイルス学、免疫学）（75％）、その他、平常点（小試験等）（25％）を考慮して総合評価する。

定期試験では、1から12の各到達目標について80％以上の内容を論述できるか、微生物学や免疫学の諸問題や解決策に対して解説することができるかが問われる。到達目標に関わるキーワードの説明は各授業で解説する。

【本講義と関連する講義】

感染防御学I、生物化学III

【対応するコアカリキュラム一般目標（薬学科）】

C8(1)(2)(3)(4), E2(7)

【教科書】

使用しない

【参考書等】

（参考書）

吉田眞一、柳雄介、吉開泰信『戸田新細菌学 改定34版』（南山堂）

高田賢藏 編『医科ウイルス学（改訂第3版）』（南江堂）

Peter Parham 著（笹月健彦監訳）『エッセンシャル免疫学（改訂第3版）』（メディカル・サイエンス・インターナショナル社）

Kenneth Murphyら著（笹月健彦ら監訳）『Janeway's 免疫生物学（原著第9版）』（南江堂）

【授業外学修（予習・復習）等】

講義ノートと配布資料を活用した復習により、講義内容のより深い理解と知識の定着を図ること。

（その他（オフィスアワー等））

事前連絡の上、随時可能。学内の各担当講師に連絡のこと。

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング		U-PHA00 3C212 LJ86											
授業科目名 <英訳>		衛生薬学I（健康化学）【H30以降入学者用】 Pharmaceutical Health Science I (Health Chemistry)				担当者所属・ 職名・氏名		薬学研究科 薬学研究科		教授 准教授		中山 和久 申 惠媛	
配当 学年	2,3回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2023・ 前期	曜時限	月1	授業 形態	講義	使用 言語	日本語		
学科		薬学部,薬科学科,薬学科				科目に対する区分		選択					
[授業の概要・目的]													
人の健康の維持および増進と環境因子や薬物との関連を理解するために、栄養素と食品の化学、食品衛生について学ぶ。また、経口感染症や食中毒に関して、公衆衛生的観点から理解を深める。													
[到達目標]													
栄養素と食品の化学について説明できる。 食品衛生、経口感染症や食中毒に関して説明できる。 人の健康の維持および増進と環境因子や薬物との関連について理解する。													
[授業計画と内容]													
1. 三大栄養素 2. 脂溶性ビタミン 3. 水溶性ビタミン 4. ミネラル 5. 保健機能食品 6. 食品添加物 7. 食品成分の変質と食品の保存 8. 経口感染症と食中毒（1） 9. 経口感染症と食中毒（2） 10. プリオン病 11. 高病原性トリインフルエンザ 12. 遺伝子組換え作物 13. 自然毒食中毒 14. 食物アレルギー 15. 健康と疾病の予防													
[履修要件]													
事前に生物化学I（物質生化学）、生物化学II（代謝生化学）、生物化学III（分子生物学）を受講していること。													
[成績評価の方法・観点]													
小テスト30%、期末テスト70% 人の健康の維持および増進と環境因子や薬物との関連、栄養素と食品の化学、食品衛生、経口感染症や食中毒について、公衆衛生的観点から理解し、説明できるのかが評価の対象となる。													
[本講義と関連する講義]													
衛生薬学II、生物化学I、生物化学II、生物化学III、感染防御学I、感染防御学II													
[対応するコアカリキュラム一般目標（薬学科）]													
D1 (1) (2) (3)													
[教科書]													
使用しない													
衛生薬学I（健康化学）【H30以降入学者用】(2)へ続く↓↓↓													

[参考書等]

（参考書）

今井浩孝・小椋康光編 『衛生薬学：基礎・予防・臨床（改訂第3版）』（南江堂）
鍛冶利幸・佐藤雅彦編 『コンパス衛生薬学－健康と環境－改訂第3版』（南江堂）
那須正夫・和田啓爾編 『食品衛生学（「食の安全」の科学）改訂第2版』（南江堂）

[授業外学修（予習・復習）等]

3回行う小テストの前に、それまでの講義の復習をして臨みましょう。

（その他（オフィスアワー等））

快適な人間環境を築いて維持していくために必須の知識

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング		U-PHA00 3C213 LJ86									
授業科目名 <英訳>		衛生薬学Ⅱ（環境衛生学）【H30以降入学者用】 Pharmaceutical Health Science II (Public Health)				担当者所属・ 職名・氏名		薬学研究科 教授 中山 和久			
配当 学年	2,3回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2023・ 後期	曜時限	月1	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
学科		薬学部,薬科学科,薬学科			科目に対する区分		選択				
[授業の概要・目的]											
環境と人間の相互作用の重要性を理解し、生活環境の質の評価および確保の方法、および保健衛生について学ぶ。また、化学物質と生体とのかかわり、特に異物の体内動態と代謝反応についての理解を深める。											
[到達目標]											
環境と人間の相互作用の重要性を理解する。 生活環境の質の評価および確保の方法、および保健衛生について説明できる。 化学物質と生体とのかかわり、特に異物の体内動態と代謝反応について理解を深める。											
[授業計画と内容]											
1. 無機化学物質による汚染 2. 農薬の種類と毒性 3. ダイオキシン類 4. 内分泌攪乱化学物質 5. 異物の体内動態 6. 異物代謝の第一相反応（1） 7. 異物代謝の第一相反応（2） 8. 異物代謝の第二相反応 9. 異物代謝を左右する因子 10. 化学物質による発がん（1） 11. 化学物質による発がん（2） 12. オゾン層の破壊 13. 地球の温暖化 14. 水の衛生 15. 空気の衛生											
[履修要件]											
事前に衛生薬学Ⅰ（健康化学）を受講していること。											
[成績評価の方法・観点]											
小テスト30%、期末テスト70% 環境と人間の相互作用の重要性、生活環境の質の評価および確保の方法、保健衛生、化学物質と生体とのかかわり（特に異物の体内動態と代謝反応）について理解し、説明できるのかが評価の対象となる。											
[本講義と関連する講義]											
衛生薬学Ⅰ、生物化学Ⅰ、生物化学Ⅱ、生物化学Ⅲ、感染防御学Ⅰ、感染防御学Ⅱ											
[対応するコアカリキュラム一般目標（薬学科）]											
D2 (1) (2)											
[教科書]											
使用しない											
----- 衛生薬学Ⅱ（環境衛生学）【H30以降入学者用】(2)へ続く↓↓↓											

[参考書等]

（参考書）

今井浩孝、小椋康光編 『衛生薬学 基礎・予防・臨床（改訂第3版）』（南江堂）
鍛冶利幸、佐藤雅彦編 『コンパス衛生薬学：健康と環境（改訂第3版）』（南江堂）
大沢基保、内海英雄編 『環境衛生科学』（南江堂）

[授業外学修（予習・復習）等]

3回行う小テストの前に、それまでの講義の復習をして臨みましょう。

（その他（オフィスアワー等））

環境と衛生に関するキーワードの理解。異物（薬物）代謝は必須の知識

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング			U-PHA00 1C301 LJ86									
授業科目名 <英訳>		生理学I（基礎生理学）【H30以降入学者用】 Physiology I (Basic Physiology)				担当者所属・ 職名・氏名		国際高等教育院 教授 土居 雅夫 薬学研究科 准教授 長谷川 恵美				
配当 学年	1回生以上	単位数	2	開講年度・ 開講期	2023・ 後期	曜時限	水4	授業 形態	講義	使用 言語	日本語	
学科		薬学部,薬科学科,薬学科				科目に対する区分		必修				
[授業の概要・目的]												
医療系薬学・生物系薬学の基礎となる人体の生理学を講義する。生理学をよく理解するためには、人体の解剖についての基礎的知識がまず必要である。人体の基本的な成り立ちを解説したうえで、個体・臓器・細胞の各レベルでの講義を行う。まず、身体全体の機能に関わる基本の細胞生理学を扱い、生理現象を科学的に理解するために必要な基本的な原理を解説する。そのうえで、身体を構成する各臓器についてその解剖学的特徴に基づいた生理機能を講義する。												
[到達目標]												
1. 人体の基本的な解剖学的構造を説明することができる。 2. 身体全体の機能に関わる基本的な細胞生理を物理化学的原理に基づいて説明することができる。 3. 人体を構成する器官、器官系の名称、形態、体内での位置および機能的特徴を説明することができる。												
[授業計画と内容]												
1. 生理学とは 2. 人体の成り立ち 3. 体の化学的組成 4. 細胞生理の形態学的基礎 5. 細胞生理の物理化学的基礎 6. 細胞生理の生化学的基礎 7. 脳・神経系の解剖と生理 8. 感覚器系の解剖と生理 9. 筋骨格系の解剖と生理 10. 内分泌器官の解剖と生理 11. 心血管系の解剖と生理 12. 消化器系の解剖と生理 13. エネルギー代謝系器官の解剖と生理 14. 泌尿器系の解剖と生理 15. 生殖器官の解剖と生理												
[履修要件]												
特になし												
[成績評価の方法・観点]												
定期試験(90%), 平常講義での小テストまたは中間テスト(10%)												
[本講義と関連する講義]												
健康・生命科学入門、生理学Ⅱ・Ⅲ、薬理学Ⅰ・Ⅱ、臨床疾病論A・D・G												
----- 生理学I（基礎生理学）【H30以降入学者用】(2)へ続く↓↓↓												

生理学I（基礎生理学）【H30以降入学用】(2)

【対応するコアカリキュラム一般目標（薬学科）】

C4(1)(2), C6(1)(2)(3)(4)(5)(6)(7), C7(1)(2), E1(1), E2(1)(3)(5)

【教科書】

監訳 中村桂子・松原謙一・榊佳之・水島昇 『Essential細胞生物学 原書第5版』（南江堂）

【参考書等】

（参考書）

監訳 坂東武彦・小山省三 『バーン・レヴィ 基本生理学』（西村書店）

監訳 植村慶一 『オックスフォード 生理学』（丸善）

監訳 内山安男・相磯貞和 『ROSS 組織学』（南江堂）

【授業外学修（予習・復習）等】

配布プリントを用いた講義内容の予習と復習。毎回、講義の後に講義内容に関する小テストを行い、次回講義の最初にその解説を行う。

（その他（オフィスアワー等））

2回生以降の医療系科目講義の基礎となる。

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング		U-PHA00 2C303 LJ86									
授業科目名 <英訳>		生理学Ⅱ（病態生理学）【H30以降入学者用】 Physiology II (Pathophysiology)				担当者所属・ 職名・氏名		薬学研究科 准教授 平澤 明			
配当 学年	2,3回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2023・ 後期	曜時限	水2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
学科		薬学部,薬科学科,薬学科				科目に対する区分		選択			
[授業の概要・目的]											
病気に対する薬物治療の理解のためには、生命活動、特に人体の生理とその異常（病態生理）のメカニズムを理解する必要がある。ゲノム科学や分子レベルの知識を統合したシステムバイオロジーの観点から生理学、病態生理学を捉える。本課程では医療薬学、創薬科学の基礎となる生理・病態生理を概説する。病気の病態生理に基づく治療学についても講述する。											
[到達目標]											
病気に対する薬物治療の理解のために必要となる、生命活動、特に人体の生理とその異常（病態生理）のメカニズムを説明することができる。ゲノム科学や分子レベルの知識を統合したシステムバイオロジーの観点から生理学、病態生理学を捉えることができる。医療薬学、創薬科学の基礎となる生理・病態生理を概説することができる。病気の病態生理に基づく治療学について論じることができる。											
[授業計画と内容]											
1. 正常生理と疾病に伴う病態生理 2. 心臓と血管系の生理・病態生理 3. 血液・造血器官の生理・病態生理 4. 消化器系器官の生理・病態生理 5. 腎臓と尿路の生理・病態生理 6. 男性生殖器官の生理・病態生理 7. 女性生殖器官の生理・病態生理 8. 呼吸器の生理・病態生理 9. 内分泌器官の生理・病態生理 10. 生体代謝の生理・病態生理 11. 感覚・知覚神経系の生理・病態生理 12. 運動神経系の生理・病態生理 13. 視覚系の生理・病態生理 14. 聴覚系の生理・病態生理 15. 全身器官の統合的生理・病態生理											
[履修要件]											
特になし											
[成績評価の方法・観点]											
定期試験70%、小テスト・授業への参加状況30%											
[本講義と関連する講義]											
生理学Ⅰ・Ⅲ、薬理学Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、生物化学Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ											
[対応するコアカリキュラム一般目標（薬学科）]											
C4(1)(2), C6(1)(2)(3)(4)(5)(6)(7), C7(1)(2), E1(1), E2(1)(3)(5)											
生理学Ⅱ（病態生理学）【H30以降入学者用】(2)へ続く↓↓↓											

生理学Ⅱ（病態生理学）【H30以降入学者用】(2)

【教科書】

『コスタンゾ明解生理学』（エルゼビア・ジャパン）

【参考書等】

（参考書）
授業中に紹介する

【授業外学修（予習・復習）等】

指定教科書（コスタンゾ明解生理学）を用いた講義内容の予習と復習

（その他（オフィスアワー等））

知識の覚え込みより典型的な各種疾患の生理・病態生理を考察する。

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング				U-PHA00 3C304 LJ86							
授業科目名 <英訳>		生理学Ⅲ（臨床生理学）【H30以降入学者用】 Physiology III (Clinical Physiology)				担当者所属・ 職名・氏名		国際高等教育院 教授 土居 雅夫 薬学研究科 准教授 長谷川 恵美			
配当 学年	2,3回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2023・ 前期	曜時限	火2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
学科		薬学部,薬科学科,薬学科				科目に対する区分		選択			
[授業の概要・目的]											
病気の新規治療薬を創成するためには、人の健常時の生理と病変時の病態を深く理解しておく必要がある。本講義では、これまでに学修した生理学と病理学の基本概念の理解の向上を目指し、ゲノム科学・システム情報生物学による生体機能の統合的理解を目指す。実際の創薬・臨床医療との接点を示しながら、病気の発症・進行の過程を時間軸にそってシステムレベルで統合的に理解することを目指す。											
[到達目標]											
病気治療薬を創成する上で必要となる、人体の生理とその異常（病態生理）を統合的に理解することができる。ゲノム科学・システム情報生物学の観点に立って、生体機能を統合的に理解することができる。病気の発症・進行のメカニズムおよびそのゲノム科学的素因に基づいた創薬および臨床医療を論ずることができる。											
[授業計画と内容]											
1. 疾病に伴う症状のメカニズム 2. 疾病に伴う各種臨床検査値の変化 3. 患者個々に応じた薬の用法・用量の設定 4. 患者個々に応じた薬の選択および各々の医薬品の「使用上の注意」を考慮した適正な薬物治療のデザイン 5. テーラーメイド薬物治療に関する基本的知識とその具体的な治療計画 6. 心臓と血管系の生理・病態生理 7. 血液・造血器官の生理・病態生理 8. 消化器系器官の生理・病態生理 9. 腎臓と尿路の生理・病態生理 10. 生殖器官の生理・病態生理 11. 呼吸器の生理・病態生理 12. 内分泌器官の生理・病態生理 13. 生体代謝の生理・病態生理 14. 神経・筋組織の生理・病態生理 15. 全身器官の統合的生理・病態生理											
[履修要件]											
特になし											
[成績評価の方法・観点]											
定期試験(90%), 平常講義での小テスト(10%)											
[本講義と関連する講義]											
生理学Ⅰ・Ⅱ、薬理学Ⅰ・Ⅱ、生物科学Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ											
[対応するコアカリキュラム一般目標（薬学科）]											
C4(1)(2), C6(1)(2)(3)(4)(5)(6)(7), C7(1)(2), E1(1), E2(1)(3)(5)											
[教科書]											
監訳 中村桂子・松原謙一 『Essential細胞生物学 原書第4版』（南江堂）											
----- 生理学Ⅲ（臨床生理学）【H30以降入学者用】(2)へ続く↓↓↓											

[参考書等]

（参考書）

監訳 植村慶一 『オックスフォード・生理学』（丸善）

監訳 坂東武彦・小山省三 『バーン・レヴィ 基本生理学』（西村書店）

岡田 忠・菅谷 潤壺 『コスタンゾ 明解生理学』（エルゼビア・ジャパン）

[授業外学修（予習・復習）等]

配布プリントを用いた講義内容の予習と復習

（その他（オフィスアワー等））

知識の覚え込みより典型的な各種疾患の生理・病態生理を考察する。

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング		U-PHA00 2C305 LJ86									
授業科目名 <英訳>		薬理学I【H30以降入学者用】 Pharmacology I				担当者所属・ 職名・氏名		薬学研究科 准教授 平澤 明			
配当 学年	2,3回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2023・ 前期	曜時限	火2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
学科		薬学部,薬科学科,薬学科			科目に対する区分		必修				
[授業の概要・目的]											
からだの中で薬物が作用する生体分子は受容体、酵素、膜輸送タンパク質、転写因子のいずれかであり、これら機能タンパク質を内在性リガンド（生理活性物質）や細胞内情報伝達系とともに知ることが薬理学の基本となります。本講義では、それら生体分子が細胞レベルで構築する巧妙な情報ネットワークと、臓器および細胞機能を制御するメカニズム、さらには主な病態での破綻について理解することを目標とします。											
[到達目標]											
1. 薬が標的とする生体分子に結合、相互作用する理論を説明できる。 2. 創薬標的として開発された生体分子と、これから開発される余地を説明できる。 3. 生体内に存在する生理活性物質の種類、分類、機能を説明できる。 4. 生理活性物質が生体に作用する標的分子の分布や細胞内情報伝達系を説明できる。 5. 細胞内シグナル伝達に用いられる膜電位変化や物質代謝の基本原理を説明できる。 6. 病態における細胞機能の破綻と薬物治療のメカニズムを説明できる。											
[授業計画と内容]											
教科書の参照ページとともに授業計画を示します。 1. ガイダンス：薬物受容体理論（p. 4-16） 2. 生体内情報伝達（p. 43-48） 2. Gタンパク質共役受容体、細胞内情報伝達（p.49-56） 3. 受容体キナーゼ、核内受容体（p.57-69） 4. シナプス伝達・筋収縮、Ca²⁺チャネル（p.74-79） 5. 膜電位・活動電位、電位依存性Na⁺/K⁺チャネル（p.79-85） 6. トランスポーター、経細胞輸送（p.86-94） 7. 抑制性アミノ酸（p.96-109） 8. 興奮性アミノ酸（p.109-115） 9. アセチルコリン（p.116-124）、一酸化窒素（p.193-195） 10. カテコラミン（p.125-139） 11. セロトニン（p.140-150） 12. ヒスタミン、ヌクレオチド（p.151-163） 13. 神経ペプチド（p.164-172） 14. 一酸化窒素（p.193-195） 15. 全体のまとめと演習											
[履修要件]											
特になし											
[成績評価の方法・観点]											
定期試験70%、小テスト・授業への参加状況30%											
薬理学I【H30以降入学者用】 (2)へ続く↓↓↓											

薬理学I【H30以降入学者用】(2)

[本講義と関連する講義]

薬理学II, III

[対応するコアカリキュラム一般目標（薬学科）]

C6(6), C7(2)

[教科書]

田中／加藤／成宮 『NEW薬理学（改訂第7版）』（南江堂）ISBN:978-4-524-26175-8

[参考書等]

（参考書）

L.L.Brunton (Ed.) 『Goodman & Gilman's Pharmacological Basis of Therapeutics 14th Ed.』（McGraw-Hill）

[授業外学修（予習・復習）等]

指定教科書（NEW薬理学（改訂第7版））を用いた講義内容の予習と復習

（その他（オフィスアワー等））

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング		U-PHA00 2C307 LJ86									
授業科目名 <英訳>		薬理学II【H30以降入学用】 Pharmacology II				担当者所属・ 職名・氏名		非常勤講師 金子 周司 助教 永安 一樹			
配当 学年	2,3回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2023・ 後期	曜時限	火1	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
学科		薬学部,薬科学科,薬学科				科目に対する区分		選択			
[授業の概要・目的]											
本科目では、前半で末梢神経系（自律神経・感覚神経・運動神経）に作用する薬物について、名称、薬理作用とそのメカニズム、臨床応用と主な副作用を学びます。ここまでの範囲で中間試験を行います。後半では中枢神経系に作用する薬物について、名称、薬理作用とそのメカニズム、臨床応用と主な副作用を学びます。ここまでの範囲で期末（定期）試験を行います。											
[到達目標]											
1. 中枢神経系と末梢神経系の構造と機能を説明できる。 2. 自律神経に作用する薬物の名称と作用メカニズム、臨床応用を説明できる。 3. 感覚神経や運動神経に作用する薬物の名称と作用メカニズム、臨床応用を説明できる。 4. 中枢神経系に作用する薬物の名称と作用メカニズム、臨床応用を説明できる。											
[授業計画と内容]											
1. ガイダンス、局所麻酔薬（p.353-358） 2. 抗炎症薬（p.454-464、508-513） 3. アドレナリン作用薬（p.252-261）と適応症（喘息） 4. 抗アドレナリン薬（p.262-271）と適応症（高血圧、前立腺肥大） 5. コリン作用薬（p.234-242）と適応症（重症筋無力症、緑内障） 6. 抗コリン薬（p.243-251）と適応症（COPD、排尿障害） 7. 中間試験およびフィードバック 8. 抗パーキンソン病薬（p.301-311）、抗認知症薬（p.312-314） 9. 統合失調症治療薬（p.277-286） 10. 抗うつ薬・気分安定薬（p.287-300） 11. 催眠鎮静薬（p.318-334）、全身麻酔薬（p.345-352） 12. 抗てんかん薬（p.335-341） 13. 中枢性鎮痛薬（p.359-370）、依存性薬物（p.371-379） 14-15. 後半のまとめ											
[履修要件]											
薬理学Iで生体の仕組みを理解していることを前提にして、疾患と治療薬についての講義を進めます。											
[成績評価の方法・観点]											
小テスト20%、中間試験40%、定期試験40%の割合で評価します。小テストは予習を前提として授業時間の最初にPandAを用いて行います。											
[本講義と関連する講義]											
薬理学I, III											
薬理学II【H30以降入学用】(2)へ続く↓↓↓											

薬理学II【H30以降入学者用】(2)

[教科書]

田中／加藤／成宮 『NEW薬理学（改訂第7版）』（南江堂）ISBN:978-4-524-26175-8（薬理学シリーズ（I, II, III）で共通に用いる教科書です）

[参考書等]

（参考書）

D.E.Golan et al. 『Principles of Pharmacology 4th Edition』（Wolters Kluwer）ISBN:78-1-45119-100-4（Kindle version 図表をプリントにて使用）

L.L.Brunton (Ed.) 『Goodman & Gilman's Pharmacological Basis of Therapeutics 12th Ed.』（McGraw-Hill）ISBN:978-0-07-176939-6（Kindle version 図表をプリントにて使用）

[授業外学修（予習・復習）等]

本科目は、反転授業です。第1回目を除く毎回、授業までに各自でYouTubeビデオ予習を行ってください。予習に必要なプリントは前回の授業で配布します。授業時間はパソコンやスマホを必ず用意して、まずPandAページの確認テストを行ってください。次に演習課題を出しますので、教科書やネットを調べ、情報をノートに書いて整理してください。

（その他（オフィスアワー等））

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング		U-PHA00 3C306 LJ86									
授業科目名 <英訳>		薬理学Ⅲ【H30以降入学者用】 Pharmacology III				担当者所属・ 職名・氏名		薬学研究科 准教授 白川 久志			
配当 学年	2,3回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2023・ 前期	曜時限	金1	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
学科		薬学部,薬科学科,薬学科			科目に対する区分		選択				
[授業の概要・目的]											
循環器、血液・造血器、泌尿器、呼吸器および消化器での疾病の治療に用いられる薬物の薬理作用について、これら臓器の生理、疾患の発生機序と疫学、薬物治療のターゲットとなる生体分子と薬物の分子作用メカニズム、臨床応用での薬物選択における注意点や問題点などの知識を修得するとともに、新薬の開発動向と関連学問領域の最新知見を知る。											
[到達目標]											
1. それぞれの臓器の生理機能とその制御機構の破綻に起因する疾患のメカニズムを理解し、説明できるとともに、新薬の開発動向と関連学問領域の最新知見について概説できる。 2. 各疾患の薬物選択における注意点や問題点を理解し、説明できる。 3. 各疾患の薬物治療に用いられる治療薬の作用機序、薬理作用および主な副作用を理解し、説明できる。											
[授業計画と内容]											
1. 高血圧の病態生理、適切な治療薬及びその薬理作用 2. 低血圧の病態生理、適切な治療薬及びその薬理作用 3. 不整脈の病態生理、適切な治療薬及びその薬理作用 4. 心不全の病態生理、適切な治療薬及びその薬理作用 5. 狭心症・心筋梗塞の病態生理、適切な治療薬及びその薬理作用 6. 末梢循環障害の病態生理、適切な治療薬及びその薬理作用 7. 中間試験およびフィードバック 8. 血液凝固系における疾患の病態生理、適切な治療薬及びその薬理作用 9. 線溶系における疾患の病態生理、適切な治療薬及びその薬理作用 10. 造血器における疾患の病態生理、適切な治療薬及びその薬理作用 11. 貧血の病態生理、適切な治療薬及びその薬理作用 12. 泌尿器系における疾患の病態生理、適切な治療薬及びその薬理作用 13. 呼吸器系における疾患の病態生理、適切な治療薬及びその薬理作用 14. アレルギー疾患の病態生理、適切な治療薬及びその薬理作用 15. 消化器系における疾患の病態生理、適切な治療薬及びその薬理作用											
[履修要件]											
本科目の学修には、薬理学Ⅰの履修範囲である薬理学の概念や細胞内情報伝達の基本原理の知識を前提としており、薬理学Ⅰをすでに履修していることが条件となる。											
[成績評価の方法・観点]											
中間試験50%、定期試験 50%。出席小テストの内容により加算する。											
[本講義と関連する講義]											
生理学Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、薬理学Ⅰ・Ⅱ											
-----薬理学Ⅲ【H30以降入学者用】(2)へ続く↓↓↓-----											

薬理学III【H30以降入学用】(2)

【対応するコアカリキュラム一般目標（薬学科）】

E2 (3), (4)

【教科書】

『NEW薬理学』（南江堂）
毎回、補足プリント配布

【参考書等】

（参考書）
『今日の治療薬』（南江堂）
『「ハーバード大学講義テキスト」臨床薬理学』（丸善出版）
『治療薬マニュアル』（医学書院）

【授業外学修（予習・復習）等】

薬理学Iの履修範囲である薬理学の概念（薬物受容体、薬物の用量-反応関係等）や各種神経伝達物質・細胞内情報伝達の基本を理解していることを前提に授業を進める。

（その他（オフィスアワー等））

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング				U-PHA00 2C310 LJ86							
授業科目名 <英訳>		薬剤学Ⅰ（製剤学）【H30以降入学者用】 Pharmaceutics I (Galenical Pharmacy)				担当者所属・ 職名・氏名		薬学研究科 准教授 高橋 有己			
配当 学年	2,3回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2023・ 後期	曜時限	木2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
学科		薬学部,薬科学科,薬学科				科目に対する区分		必修			
[授業の概要・目的]											
生理活性物質を医薬品として利用するためには、有効性・安全性・安定性・使用性などを考慮して適した剤形に整形する、すなわち製剤化が必要となる。本講義では、各種製剤に関して、基礎から臨床に至る総合的な視点から、その治療上の意義、製剤設計法、製造法および評価法について学ぶ。											
[到達目標]											
1. 製剤設計の意義および医薬品開発上の位置づけを説明できる。 2. 各種医薬品製剤の治療的意義・特徴、処方設計、製造法、試験法について説明できる。 3. 各種医薬品製剤の製造に関係する物理化学的理論を説明できる。 4. 各種医薬品製剤を製する際の問題点および解決策について説明できる。											
[授業計画と内容]											
1. 医薬品開発における製剤設計の意義 2. 注射剤の治療上の意義と分類 3. 注射剤の設計に関する基礎理論（溶解性） 4. 注射剤の設計に関する基礎理論（安定性） 5. 注射剤の製造と日本薬局方製剤試験法を含めた注射剤に関わる各種一般試験法 6. 分散系製剤の特徴と製造法 7. 点眼剤、噴霧製剤、生薬製剤を含むその他の液状製剤の種類・適用と調製方法 8. 日本薬局方に収載される代表的な固形製剤の種類 9. 経口固形製剤の設計に関する基礎理論（粉体工学） 10. 散剤、顆粒剤、錠剤の製剤設計と製造法、評価法 11. カプセル剤・坐剤の製剤設計と製造法、評価法 12. 日本薬局方製剤試験法を含めた固形製剤の評価方法、製剤のレオロジー特性 13. 軟膏剤、貼付剤などの外用製剤の製剤設計と製造法、評価法 14. ドラッグデリバリーシステム（DDS）の意義と代表的なDDS製剤 15. 生物学的同等性および後発医薬品開発											
[履修要件]											
特になし											
[成績評価の方法・観点]											
出席・小テスト10%、定期試験90%の割合で評価する。											
[本講義と関連する講義]											
薬剤学Ⅱ、医療社会学、薬局方・薬事関連法規											
[対応するコアカリキュラム一般目標（薬学科）]											
C1（1）、C1（3）、E5（1）、E5（2）、E5（3）											
----- 薬剤学Ⅰ（製剤学）【H30以降入学者用】(2)へ続く↓↓↓											

薬剤学I（製剤学）【H30以降入学者用】(2)

[教科書]

プリント配布

[参考書等]

（参考書）

『薬剤学第5版』（廣川書店）

『図解で学ぶDDS第2版』（じほう）

[授業外学修（予習・復習）等]

講義プリントは事前に配布されるので、その内容を一読し、疑問点等を整理しておくこと。また、以前の講義内容から知識を問う小テストを実施することがあるので、知識の定着を図るために必ず復習を行うこと。

（その他（オフィスアワー等））

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング			U-PHA00 3C312 LJ86								
授業科目名 <英訳>		薬剤学Ⅱ（薬物動態学）【H30以降入学者用】 Pharmaceutics II (Pharmacokinetics)				担当者所属・ 職名・氏名		薬学研究科 教授 樋口 ゆり子			
配当 学年	2,3回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2023・ 後期	曜時限	火2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
学科		薬学部,薬科学科,薬学科				科目に対する区分		選択			
[授業の概要・目的]											
本講義では、薬物の生体内動態すなわち吸収、分布、代謝、排泄を理解するために必要な生体の解剖学的・生理学的特性を解説した後、各過程における薬物動態のメカニズムについて講述するとともに体内動態の制御方法すなわちドラッグデリバリーシステムについて基本的概念および実例を概説する。さらに、薬物の生体内動態を定量的に記述するためのファーマコキネティクス理論と手法について講述する。											
[到達目標]											
1. 薬物の体内動態の基本事項およびその制御方法としてのドラッグデリバリーシステムについて説明できる。 2. 各種経路から投与された薬物の吸収過程と影響因子について説明できる。 3. 薬物が各組織に分布する際の支配因子と分布のプロセスについて説明できる。 4. 薬物の尿中排泄および胆汁排泄のプロセスとメカニズムについて説明できる。 5. 薬物の代謝様式とそれに関与する代表的な代謝酵素を説明できる。											
[授業計画と内容]											
1. 薬物体内動態の基本事項とドラッグデリバリーシステムの目的 2. 注射により投与された薬物の吸収過程と影響因子 3. 皮膚の解剖学的、生理学的特徴と薬物の経皮吸収の関係 4. 薬物の経皮吸収促進法についての具体例 5. 消化管の構造、機能と薬物吸収の関係 6. 薬物の消化管吸収促進法についての具体例 7. 消化管以外の粘膜部位（直腸、肺、鼻）における薬物吸収 8. 薬物が各組織に分布する際の支配因子 9. 血液-脳関門、血液-脳脊髄液関門の意義と薬物の脳への移行 10. 胎盤関門の意義と薬物の胎児への移行 11. 腎臓の構造、機能と薬物の尿中排泄機構 12. 薬物の胆汁排泄と腸肝循環 13. 薬物代謝様式とそれに関与する代表的な代謝酵素 14. 薬物相互作用についての具体例 15. 各種ファーマコキネティクス解析法の特徴											
[履修要件]											
特になし											
[成績評価の方法・観点]											
出席および小テスト20%、定期試験80%。 小テストは2回実施し、講義内容のうち重要な基本的語句についての理解を求める。定期試験では、薬物動態の各過程に関する重要な事項の理解を問うとともに各動態過程相互の関係や総合的な理解ができているかについて論述させ、講義全体の理解についての達成度を評価する。											
-----薬剤学Ⅱ（薬物動態学）【H30以降入学者用】(2)へ続く↓↓↓											

薬剤学Ⅱ（薬物動態学）【H30以降入学者用】(2)

[本講義と関連する講義]

薬剤学Ⅰ、医療社会学、薬局方・薬事関連法規

[対応するコアカリキュラム一般目標（薬学科）]

E4（１）（２）、E5（３）

[教科書]

プリント

[参考書等]

（参考書）

『薬剤学第５版』（廣川書店）

[授業外学修（予習・復習）等]

講義プリントを事前に配布するので、内容に目を通し、疑問点等を整理しておくこと。また、講義内容の理解を確認するため小テストを実施するので、知識の定着を図るために必ず復習を行うこと。

（その他（オフィスアワー等））

薬物の効果と副作用を決定する体内動態の基本事項を学び、薬学専門実習３と併せて臨床薬物治療を理解するための基礎となる。オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング		U-PHA00 3C311 LJ86									
授業科目名 <英訳>		ファーマコメトリクス論 Pharmacometrics				担当者所属・ 職名・氏名		薬学研究科 教授 山下 富義			
配当 学年	4回生以上	単位数	1	開講年度・ 開講期	2023・ 前期前半	曜時限	水2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
学科		薬学部,薬科学科,薬学科				科目に対する区分		選択			
[授業の概要・目的]											
薬物動態は、医薬品の有効性・安全性に関わる重要な因子であり、これを定量的に理解することが医薬品の開発設計や適正使用に不可欠である。ファーマコメトリクスは、数理モデルを用いて薬物の体内動態および薬効との関係を記述し、シミュレーションを行う学問領域である。本講義では、各モデルの概念と特徴を理解するとともに、演習を通じてその活用を学ぶ。											
[到達目標]											
1. 薬物動態／薬力学解析のための各モデルの特徴について説明できる。 2. クリアランス理論を活用して臨床薬物動態を予測できる。 3. 母集団解析法を利用して薬物動態・薬効の個人差をシミュレートできる。											
[授業計画と内容]											
1. コンパートメントモデル 2. モーメント解析 3. クリアランス理論 4. 薬物間相互作用予測 5. 薬効モデル、薬物動態との関係（PK/PD理論） 6. 母集団解析とベイズ推定 7. 特殊集団（高齢者、小児）のPK/PD解析 8. まとめ											
[履修要件]											
薬剤学Ⅱ（薬物動態学）を履修していること											
[成績評価の方法・観点]											
出席および小テスト20%、定期試験80%。 小テストは2回実施し、講義内容のうち重要な基本的語句についての理解を求める。定期試験では、ファーマコメトリクスに関する重要な事項の理解を問うとともに、およびモデルを活用できるかを測定し、講義全体の理解についての達成度を評価する。											
[本講義と関連する講義]											
薬剤学Ⅱ（薬物動態学）、医療社会学、臨床薬学総論											
[対応するコアカリキュラム一般目標（薬学科）]											
E1(1), E3(1)(3), E4(1)(2)											
----- ファーマコメトリクス論(2)へ続く↓↓↓											

ファーマコメトリクス論(2)

[教科書]

授業中に指示する

[参考書等]

(参考書)

授業中に紹介する

[授業外学修（予習・復習）等]

講義内容の理解を確認するため課題テストを実施するので、知識の定着を図るために必ず復習を行うこと。

(その他（オフィスアワー等）)

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング			U-PHA00 3C316 LJ86										
授業科目名 <英訳>		バイオ医薬製剤論 Biological Medicinal Formulations					担当者所属・ 職名・氏名		薬学研究科 教授 樋口 ゆり子				
配当 学年	4回生以上	単位数	1	開講年度・ 開講期	2023・ 前期後半	曜時限	水2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語		
学科		薬学部,薬科学科,薬学科				科目に対する区分		選択					
[授業の概要・目的]													
本講義では、遺伝子組換え技術や細胞培養技術によって得られ、従来の化学合成医薬品とは異なる挙動を示すバイオ医薬品を取り上げ、物性、体内動態、治療メカニズムに基づいた製剤開発について学ぶ。													
[到達目標]													
1. 主なバイオ医薬品の治療メカニズムを説明できる。 2. 主なバイオ医薬品の製剤化における課題と工夫を説明できる。													
[授業計画と内容]													
1. ペプチド・タンパク質医薬品 2. 抗体医薬品 3. 核酸・遺伝子医薬品 4. 細胞を利用した製剤 5. 分子標的薬・コンパニオン診断薬 6. バイオ医薬品のレギュラトリーサイエンス・ELSI 7. バイオシミラー、バイオ医薬品の現状と課題 8. まとめ													
[履修要件]													
特になし													
[成績評価の方法・観点]													
出席20％、定期試験80％。 定期試験では、バイオ医薬品の製剤化に関する重要な事項について問い、講義全体に対する習熟度を評価する。													
[本講義と関連する講義]													
薬剤学1（溶液製剤論）、薬剤学2（固形製剤論）、薬剤学3（薬物動態学）													
[対応するコアカリキュラム一般目標（薬学科）]													
E2(8), E4(1), E5(2)(3)													
[教科書]													
授業中に指示する													
[参考書等]													
（参考書） 授業中に紹介する													
[授業外学修（予習・復習）等]													
講義内容の理解を確認するため課題テストを実施するので、知識の定着を図るために必ず復習を行うこと。													
（その他（オフィスアワー等））													
※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。													

科目ナンバリング				U-PHA00 1C318 LJ86											
授業科目名 <英訳>		臨床疾病論A Clinical Overview of Medicine A					担当者所属・ 職名・氏名		医学研究科	教授	澤本	伸克			
									医学研究科	教授	湊谷	謙司			
									医学研究科	教授	伊達	洋至			
									医学研究科	准教授	尾野	亘			
									医学研究科	准教授	松本	久子			
									医学研究科	講師	静田	聡			
									附属病院	准教授	加藤	貴雄			
薬学研究科		教授	高須	清誠											
配当 学年	2回生以上		単位数	1	開講年度・ 開講期	2023・ 前期後半		曜時限	金3		授業 形態	講義	使用 言語	日本語	
学科		薬学部,薬科学科,薬学科					科目に対する区分		選択						
[授業の概要・目的]															
患者の疾病について、十分かつ正確な知識をもつことは医療専門職にとって不可欠である。本講義では各領域の専門医が新しい疾病概念も含め、各疾患について病態、診断、治療を解説する。															
[到達目標]															
循環器疾患と呼吸器疾患の病態を理解する。															
[授業計画と内容]															
詳細は追って連絡する。過去の講義内容を下記に例として示す。本講義は医学部人間健康科学科で実施する講義と共通であるが、授業計画の詳細は薬学部教員に聞くこと。															
第1回 循環器内科学1 第2回 呼吸器外科学 第3回 循環器内科学2 第4回 心臓血管外科学 第5回 循環器内科学3 第6回 呼吸器内科学1 第7回 呼吸器内科学2															
[履修要件]															
(重要) 生理学の基本的知識が修得できていない二回生での受講は薦めない。															
[成績評価の方法・観点]															
平常点30%と、毎回のレポート70%を基に二段階評価（合格・不合格）で評価する。															
[本講義と関連する講義]															
生理学I・II・III、薬物治療学、臨床薬学総論、臨床疾病論B・C・D・E・F・G															
[対応するコアカリキュラム一般目標（薬学科）]															
C7(1)(2), E1(1)(2), E2(3)(4)															
-----臨床疾病論A(2)へ続く↓↓↓-----															

臨床疾病論A(2)

[教科書]

授業中に指示する

[参考書等]

(参考書)

授業中に紹介する

[授業外学修（予習・復習）等]

復習をすること

（その他（オフィスアワー等））

受講により各疾患の病態に関する重要なポイントの理解が可能となる。
レポート課題の詳細は、PandAで指定する。

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

[実務経験のある教員による授業]

①分類

実務経験のある教員による実務経験を活かした授業科目

②当該授業科目に関連した実務経験の内容

③実務経験を活かした実践的な授業の内容

科目ナンバリング		U-PHA00 1C319 LJ86									
授業科目名 <英訳>	臨床疾病論B Clinical Overview of Medicine B					担当者所属・ 職名・氏名	医学研究科	教授	藤井	康友	
							医学研究科	教授	妹尾	浩	
							医学研究科	教授	溝脇	尚志	
							医学研究科	特定准教授	金井	雅史	
							医学研究科	講師	角田	茂	
							附属病院	助教	八木	真太郎	
							医学研究科	特定助教	西村	幸司	
							附属病院	講師	福田	晃久	
薬学研究科	教授	高須	清誠								
配当 学年	2回生以上	単位数	1	開講年度・ 開講期	2023・ 後期前半	曜時限	月2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
学科	薬学部,薬科学科,薬学科				科目に対する区分	選択					
[授業の概要・目的]											
良い医療とは、的確な病歴聴取、診察、検査により、患者の疾患を正確に診断し、最良の治療法を選択することに集約しうる。そのためには患者の持つ疾病についての十分かつ正確な知識を有することは医療専門職にとって必要不可欠であり、病態生理を中心とした講義を展開する。											
[到達目標]											
消化器病学（内科および外科），耳鼻咽喉科・頭頸部外科学、臨床腫瘍学（薬物および放射線療法）に関して、各領域の専門医が主要疾患の病態生理，診断，治療を枢軸とした解説を行う。これら領域の主要疾患に関する理解を深めることを目標とする。											
[授業計画と内容]											
講義の題目および順番は変更する可能性があります（合計7回）。 ・耳鼻咽喉科頭頸部疾患概論 ・がん薬物療法総論 ・肝胆膵疾患（内科） ・がん放射線治療総論 ・肝胆膵疾患（外科） ・消化管疾患（外科） ・消化管疾患（内科）											
[履修要件]											
（重要）生理学の基本的知識が修得できていない二回生での受講は薦めない。											
[成績評価の方法・観点]											
平常点30%と、毎回のレポート70%を基に二段階評価（合格・不合格）で評価する。											
[本講義と関連する講義]											
生理学I・II・III、薬物治療学、臨床薬学総論、臨床疾病論A・C・D・E・F・G											
[対応するコアカリキュラム一般目標（薬学科）]											
C7(1)(2), D2(1), E1(1)(2), E2(4)(6)(7)											
[教科書]											
使用しない											
臨床疾病論B(2)へ続く↓↓↓											

臨床疾病論B(2)

[参考書等]

(参考書)
井村裕夫編『わかりやすい内科学』(文光堂)

[授業外学修（予習・復習）等]

広範囲にわたる講義内容なので、講義のみでは十分な知識の取得は難しい。講義毎にその分野の成書を精読することを勧める。

(その他（オフィスアワー等）)

レポート課題の詳細は、PandAで指定する。

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

[実務経験のある教員による授業]

①分類
実務経験のある教員による実務経験を活かした授業科目

②当該授業科目に関連した実務経験の内容

③実務経験を活かした実践的な授業の内容

科目ナンバリング		U-PHA00 1C320 LJ86									
授業科目名 <英訳>		臨床疾病論C Clinical Overview of Medicine C				担当者所属・ 職名・氏名		医学研究科 教授 木下 彩栄 医学研究科 特定准教授 曾根 正勝 医学研究科 准教授 原田 範雄 附属病院 講師 藤田 義人 附属病院 特定病院助教 山尾 幸広 薬学研究科 教授 高須 清誠			
配当 学年	2回生以上	単位数	1	開講年度・ 開講期	2023・ 後期後半	曜時限	月2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
学科		薬学部,薬科学科,薬学科				科目に対する区分		選択			
[授業の概要・目的]											
患者の持つ疾病についての十分かつ正確な知識を有することは医療専門職にとって不可欠である。 内科学的アプローチは患者への観察から始まり、病態生理の解明により診断・治療法を開発することに集約する。 本講義では、臨床神経学、脳神経外科学、糖尿病・内分泌内科学の専門家が、疾患の考え方、診断、治療を解説する。											
[到達目標]											
神経系・代謝・内分泌系の疾病の病態生理、診断、治療について、十分な知識を得る											
[授業計画と内容]											
授業内容は変更する場合がある。授業初回に詳しい予定を説明する。											
第1回目 インTRODakション・神経系1（神経系の機能と解剖） 第2回目 神経系2（神経変性疾患） 第3回目 神経系3（脳血管障害、末梢神経疾患、筋疾患） 第4回目 脳神経外科（脳腫瘍、脳血管障害） 第5回目 代謝疾患 第6回目 糖尿病 第7回目 内分泌疾患											
[履修要件]											
（重要）生理学の基本的知識が修得できていない二回生での受講は薦めない。											
[成績評価の方法・観点]											
平常点30%と、毎回のレポート70%を基に二段階評価（合格・不合格）で評価する。											
[本講義と関連する講義]											
生理学I・II・III、薬物治療学、臨床薬学総論、臨床疾病論A・B・D・E・F・G											
[対応するコアカリキュラム一般目標（薬学科）]											
C7(1)(2), E1(1)(2), E2(1)(5)											
[教科書]											
適宜、下記の参考書を利用してください。 授業中に紹介される場合もあります。											

臨床疾病論C(2)へ続く↓↓↓

臨床疾病論C(2)

【参考書等】

（参考書）

井村裕夫 編『わかりやすい内科学』（文光堂）

『病気が見える vol7 神経系』（メディックメディア）（神経系に興味のある方）

渡辺雅彦『脳神経ペディア』（羊土社）（神経系に興味のある方、神経解剖学を深く学びたい方）

【授業外学修（予習・復習）等】

シラバスの参考書や、講義中に教員が示した参考書を参考にして、講義内容を復習し、さらに知識や考え方を深めることが望ましい。

神経系の授業では、特に予習をしておくことが望ましい。授業までにアップロードされた資料に目をとおしておくこと。

復習に関しては、講義資料を参考にすること。授業中に教員が重要とコメントしたことに関しては、特に十分に理解に努めること。

（その他（オフィスアワー等））

レポート課題の詳細は、PandAで指定する。

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

【実務経験のある教員による授業】

①分類

実務経験のある教員による実務経験を活かした授業科目

②当該授業科目に関連した実務経験の内容

③実務経験を活かした実践的な授業の内容

科目ナンバリング		U-PHA00 1C321 LJ86									
授業科目名 <英訳>		臨床疾病論D Clinical Overview of Medicine D				担当者所属・ 職名・氏名		医学研究科 教授 恒藤 暁 医学研究科 教授 足立 壯一 医学研究科 准教授 大村 浩一郎 医学研究科 准教授 八角 高裕 附属病院 助教 小川 絵里 附属病院 特定病院助教 辰巳 健一郎 薬学研究科 教授 高須 清誠			
配当 学年	2回生以上	単位数	1	開講年度・ 開講期	2023・ 前期後半	曜時限	火3	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
学科		薬学部,薬科学科,薬学科			科目に対する区分		選択				
[授業の概要・目的]											
血液病学、免疫病学、小児外科学、麻酔科学・集中治療学の基本的な考え方を概説する。各疾患の病態生理、診断、治療を解説する。医療専門職が身につけるべき基本的な知識を教授する。											
[到達目標]											
各疾患の病態生理、診断、治療の基礎知識を習得することを目標とする。											
[授業計画と内容]											
第1回 血液病学① 第2回 血液病学② 第3回 血液病学③ 第4回 免疫病学① 第5回 免疫病学② 第6回 小児外科学 第7回 麻酔科学・集中治療学											
[履修要件]											
(重要) 生理学の基本的知識が修得できていない二回生での受講は薦めない。											
[成績評価の方法・観点]											
平常点30%と、毎回のレポート70%を基に二段階評価（合格・不合格）で評価する。											
[本講義と関連する講義]											
生理学I・II・III、薬物治療学、臨床薬学総論、臨床疾病論A・B・C・E・F・G											
[対応するコアカリキュラム一般目標（薬学科）]											
C7(1)(2), C8(1)(2), E1(1)(2), E2(1)(2)(3)											
[教科書]											
使用しない											
----- 臨床疾病論D(2)へ続く↓↓↓ -----											

臨床疾病論D(2)

【参考書等】

(参考書)
特になし

【授業外学修（予習・復習）等】

講義資料を参考にして、自主学習すること

（その他（オフィスアワー等））

多領域にわたる疾患の講義であり、欠かさず受講すること
レポート課題の詳細は、PandAで指定する。

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

【実務経験のある教員による授業】

①分類
実務経験のある教員による実務経験を活かした授業科目

②当該授業科目に関連した実務経験の内容

③実務経験を活かした実践的な授業の内容

科目ナンバリング		U-PHA00 1C322 LJ86											
授業科目名 <英訳>		臨床疾病論E Clinical Overview of Medicine E				担当者所属・ 職名・氏名		医学研究科 薬学研究科		教授 教授		青山 朋樹 高須 清誠	
配当 学年	2回生以上	単位数	1	開講年度・ 開講期	2023・ 後期前半	曜時限	金1	授業 形態	講義	使用 言語	日本語		
学科		薬学部,薬科学科,薬学科				科目に対する区分		選択					
[授業の概要・目的]													
臨床疾病論Eでは眼科、皮膚科、泌尿器科、腎臓内科、形成外科、整形外科の基礎知識として、病態生理、診断、治療法の解説を行う。各領域において医療専門職が持つべき必須の知識を教授する。													
[到達目標]													
眼科、皮膚科、泌尿器科、腎臓内科、形成外科、整形外科の基礎知識を習得する。													
[授業計画と内容]													
1. ガイダンス 2. 泌尿器科診療の基本と高度医療 3. 眼科診療の基礎知識 4. 皮膚科診療の基礎知識 5. 腎臓内科診療の基礎知識 6. 整形外科診療の基礎知識 7. 形成外科診療の基礎知識													
[履修要件]													
(重要) 生理学の基本的知識が修得できていない二回生での受講は薦めない。													
[成績評価の方法・観点]													
平常点30%と、毎回のレポート70%を基に二段階評価（合格・不合格）で評価する。													
[本講義と関連する講義]													
生理学I・II・III、薬物治療学、臨床薬学総論、臨床疾病論A・B・C・D・F・G													
[対応するコアカリキュラム一般目標（薬学科）]													
C7(1)(2), E1(1)(2), E2(3)(6)													
[教科書]													
使用しない													
[参考書等]													
(参考書)													
----- 臨床疾病論E(2)へ続く↓↓↓ -----													

臨床疾病論E(2)

[授業外学修（予習・復習）等]

各回の授業の復習を中心とし、さらに興味をもったテーマについて自主学習を進めることを望みます。

（その他（オフィスアワー等））

レポート課題の詳細は、PandAで指定する。

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

[実務経験のある教員による授業]

①分類

実務経験のある教員による実務経験を活かした授業科目

②当該授業科目に関連した実務経験の内容

③実務経験を活かした実践的な授業の内容

科目ナンバリング		U-PHA00 1C323 LJ86									
授業科目名 <英訳>	臨床疾病論F Clinical Overview of Medicine F					担当者所属・ 職名・氏名	医学研究科	教授	十一	元三	
							医学研究科	教授	足立	壯一	
							医学研究科	教授	藤井	康友	
								非常勤講師	横出	正之	
							医学研究科	准教授	谷向	仁	
							附属病院	教授	大鶴	繁	
							附属病院	助教	下戸	学	
						薬学研究科	教授	高須	清誠		
配当 学年	2回生以上	単位数	1	開講年度・ 開講期	2023・ 後期前半	曜時限	金2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
学科	薬学部,薬科学科,薬学科				科目に対する区分	選択					
[授業の概要・目的]											
本科目では臨床医学のなかの精神医学、診断学、救急医学、特殊感染病学、加齢医学への入門となる講義を行う。											
[到達目標]											
精神医学、診断治療学入門、救急医学、特殊感染病学、加齢医学の5領域について重要な基礎事項を講義する。											
[授業計画と内容]											
1回目 「診断治療学入門」											
2回目 「加齢医学」、「脂質代謝異常」											
3回目 「外傷総論」											
4回目 「腹痛急性腹症」											
5回目 「特殊感染症学」											
6回目 「精神医学総論」											
7回目 「精神腫瘍学」											
[履修要件]											
(重要) 生理学の基本的知識が修得できていない二回生での受講は薦めない。											
[成績評価の方法・観点]											
平常点30%と、毎回のレポート70%を基に二段階評価（合格・不合格）で評価する。											
[本講義と関連する講義]											
生理学I・II・III、薬物治療学、臨床薬学総論、臨床疾病論A・B・C・D・E・G											
[対応するコアカリキュラム一般目標（薬学科）]											
C7(1)(2), C8(1)(2), E1(1)(2), E2(1)(7)											
[教科書]											
授業中に指示する											
----- 臨床疾病論F(2)へ続く↓↓↓ -----											

臨床疾病論F(2)

【参考書等】

(参考書)
授業中に紹介する

【授業外学修（予習・復習）等】

特になし

（その他（オフィスアワー等））

レポート課題の詳細は、PandAで指定する。

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

【実務経験のある教員による授業】

①分類
実務経験のある教員による実務経験を活かした授業科目

②当該授業科目に関連した実務経験の内容

③実務経験を活かした実践的な授業の内容

科目ナンバリング		U-PHA00 1C324 LJ86									
授業科目名 <英訳>	臨床疾病論G Clinical Overview of Medicine G					担当者所属・ 職名・氏名	医学研究科	教授	足立	壯一	
							医学研究科	准教授	近藤	英治	
							医学研究科	講師	堀江	昭史	
							附属病院	准教授	濱西	潤三	
							附属病院	助教	馬場	志郎	
							附属病院	准教授	鈴木	栄治	
薬学研究科	教授	高須	清誠								
配当 学年	2回生以上	単位数	1	開講年度・ 開講期	2023・ 前期後半	曜時限	金1	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
学科	薬学部,薬科学科,薬学科				科目に対する区分	選択					
[授業の概要・目的]											
患者のもつ疾病についての十分かつ正確な知識を有することは医療専門職にとって、必要不可欠である。疾病論Gでは、産婦人科、乳腺外科、小児科の講義を行い、婦人科、周産期、小児疾患に対する、理解を深められるよう、専門家が講義を行う。											
[到達目標]											
産婦人科、乳腺外科、小児科の各疾患に関して、診断学から、病態、治療まで、各専門医による解説を行い、理解を深めることを目標とする。											
[授業計画と内容]											
1.オリエンテーション、小児科全般 2. 産婦人科（生殖医療） 3. 小児科学（循環器、消化器） 4. 産婦人科（婦人科腫瘍） 5. 乳腺外科 6. 産婦人科（周産期） 7. 小児科学（血液腫瘍、代謝・内分泌）											
[履修要件]											
（重要）生理学の基本的知識が修得できていない二回生での受講は薦めない。											
[成績評価の方法・観点]											
平常点30%と、毎回のレポート70%を基に二段階評価（合格・不合格）で評価する。											
[本講義と関連する講義]											
生理学I・II・III、薬物治療学、臨床薬学総論、臨床疾病論A・B・C・D・E・F											
[対応するコアカリキュラム一般目標（薬学科）]											
C7(1)(2), E1(1)(2), E2(3)(4)(5)											
[教科書]											
授業中に指示する											
[参考書等]											
（参考書） 授業中に紹介する											
-----臨床疾病論G(2)へ続く↓↓↓-----											

臨床疾病論G(2)

[授業外学修（予習・復習）等]

配布資料を、十分、復習すること
レポート課題の詳細は、PandAで指定する。

（その他（オフィスアワー等））

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

[実務経験のある教員による授業]

①分類
実務経験のある教員による実務経験を活かした授業科目

②当該授業科目に関連した実務経験の内容

③実務経験を活かした実践的な授業の内容

科目ナンバリング		U-PHA00 3C308 LJ86									
授業科目名 <英訳>		薬物治療学【H30以降入学者用】 Therapeutic Pharmacology				担当者所属・ 職名・氏名		薬学研究科 准教授 津田 真弘			
配当 学年	4回生以上	単位数	2	開講年度・ 開講期	2023・ 前期	曜時限	火1	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
学科		薬学部,薬科学科,薬学科				科目に対する区分		選択			
[授業の概要・目的]											
医療の場において有効かつ安全性の高い薬物療法の提供に薬剤師として寄与するために、薬学的管理に必要な基本的事項について学習する。さらに、代表的疾患の症例を用いたPBL形式での演習によって、疾患に関する理解を深めるとともに、キードラッグに関する使用上の注意点について学習し、EBMに基づく薬物療法の提案ができることを目指す。											
[到達目標]											
1. 服薬指導の意義について説明できる。 2. 薬物治療を行う上で必要となる患者情報や検査値について理解し説明できる。 3. 主な疾患の病態と治療に必須のキードラッグについて禁忌や副作用、使用上の注意点について説明できる。											
[授業計画と内容]											
1. 薬物治療の実際（1）：高血圧 2. 薬物治療の実際（2）：糖尿病 3. 症例発表（1） 4. 薬物治療の実際（3）：脳血管障害 5. 薬物治療の実際（4）：心疾患 6. 症例発表（2） 7. 薬物治療の実際（5）：免疫・アレルギー疾患 8. 症例発表（3） 9. 薬物治療の実際（6）：精神神経疾患 10. 症例発表（4） 11. 薬物治療の実際（7）：がん 12. 症例発表（5） 13. 薬物治療の実際（8）：感染症 14. 症例発表（6） 15. まとめ、試験、解説											
[履修要件]											
特になし											
[成績評価の方法・観点]											
小テスト10%、演習発表30%、定期試験60% 小テストでは、前週の講義内容のうち重要な語句について正誤あるいは簡単な説明について問う。演習発表は、提示された症例に対する疾患の概要と薬物治療計画をについて、2－4回発表する。定期試験では、薬物治療管理上の重要語句に関する論述と、代表的疾患に対するキードラッグとその薬学的管理事項に関する理解を問う。											
[本講義と関連する講義]											
地域医療薬学、医療実務事前学習、薬局実務実習、病院実務実習											
薬物治療学【H30以降入学者用】(2)へ続く↓↓↓											

薬物治療学【H30以降入学者用】(2)

【教科書】

日本薬学会 編 『臨床薬学ⅡⅠ（スタンダード薬学シリーズⅡ-7）』（東京化学同人）ISBN:9784807917211

【参考書等】

（参考書）
授業中に紹介する

【授業外学修（予習・復習）等】

基本的には教科書に沿って授業を行うため、予習、復習を行うこと。
また、症例を用いた薬物治療演習では、診断基準や最新のガイドラインについて調査し、症例に適した処方とその薬学的管理事項に関して十分理解できるよう予習が必須である。

（その他（オフィスアワー等））

症例を通して、疾病と薬剤の使い方について理解を深める。

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング		U-PHA00 3C317 LJ86									
授業科目名 <英訳>		地域医療薬学【H30以降入学者用】 Community Clinical Pharmacy				担当者所属・ 職名・氏名		薬学研究科 講師 喜多 知子 薬学研究科 助教 宗 可奈子 薬学研究科 准教授 津田 真弘 名古屋市立大学 教授 鈴木 匡 一般社団法人メディカプラン京都 中川 直人 理事長			
配当 学年	2,3回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2023・ 前期	曜時限	木1	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
学科		薬学部,薬科学科,薬学科				科目に対する区分		選択			
[授業の概要・目的]											
現在、医療現場では超高齢社会を迎え在宅医療などの必要性が増している。また、医薬分業の進展により薬剤師の職能は様々に変化している。本授業では、地域医療における薬剤師の役割を学ぶとともに、在宅医療、学校薬剤師、災害時医療など現在の薬剤師に求められている活動について学ぶ。さらに、チーム医療やプライマリケア、セルフメディケーションについてグループ討議を通して自らが主体的に考え意見を述べる能力を養う。これらの活動を通して、医療の担い手として地域医療に参画し地域で活躍できる薬剤師に求められる基本的知識とそれらを活用するための基本的態度を修得する。											
[到達目標]											
1. 地域の保健、医療、福祉について現状と課題を認識するとともに、その質を向上させるための薬局及び薬剤師の役割とその意義を理解する。 2. 在宅医療・介護の必要性を認識し、在宅医療・介護の仕組みと薬剤師の役割について理解する。 3. 地域保健における薬剤師の活動に関心を持ち、公衆衛生の向上に貢献する使命感を身につける。 4. 生活習慣病、職業病などについて現状とその予防に関する基本的事項を説明できる。 5. 災害時における医療の課題を認識するとともに、災害時医療における薬局及び薬剤師の役割を理解する。 6. 要指導医薬品・一般用医薬品及びセルフメディケーションに関する基本的知識を修得し、これらを適切に活用する基本的技能、態度を身につける。 7. 自身および他者の意見を論理的に整理・統合し、プレゼンテーションする能力を身につける。											
[授業計画と内容]											
1. 地域における薬局と薬剤師（1）：医薬分業の意義と動向、地域における薬局の機能 2. 地域における薬局と薬剤師（2）：地域包括ケアの理念、在宅医療・居宅介護の概要 3. 在宅医療・介護への参画（1）：在宅医療・介護の目的、仕組み、支援内容 4. 在宅医療・介護への参画（2）：在宅医療・介護を受ける患者の特色と背景、利用可能な社会資源（ソーシャルワーカー、老人ホーム、デイサービス等） 5. 在宅医療・介護への参画（3）：在宅医療・介護における薬剤師の役割 6. 地域保健への参画（1）：薬物乱用の現状と薬剤師にできること 7. 地域保健への参画（2）：地域における代表的活動（自殺防止、感染予防、アンチドーピング）、学校薬剤師、スポーツファーマシストの役割 8. 前半のまとめ 9. 災害時医療：災害時における薬局および薬剤師の役割 10. 疾病予防への参画：疾病予防への方策（1～3次予防、健康増進政策等）、生活習慣と疾病の関わり、母子保健（新生児マススクリーニング、母子感染と予防対策）、労働衛生 11. 地域におけるチーム医療（1）：地域の保健、医療、福祉に関わる職種とその連携体制およびその意義 12. 地域におけるチーム医療（2）：地域における医療機関と薬局薬剤師の連携、地域から求められる医療提供施設、福祉施設及び行政との連携（討議） 13. セルフメディケーション（1）：プライマリケア、セルフメディケーションの重要性および代表的疾患・症候に使用する要指導医薬品・一般用医薬品（討議） 14. セルフメディケーション（2）：代表的な症候を示す来局者に関する適切な情報収集、疾患の推測および受診勧奨を含む適切な対応、代表的な症候に対する薬局製剤、要指導医薬品、一般用医薬品の取り扱いと説明（討議、ロールプレイ） 15. 全体のまとめ											
----- 地域医療薬学【H30以降入学者用】(2)へ続く↓↓↓											

地域医療薬学【H30以降入学用】(2)

[履修要件]

特になし

[成績評価の方法・観点]

平常点（授業への出席およびその態度、20点）、課題レポート（30点）、定期試験（50点）により評価する。授業態度とは、討論や討議への参加の程度、意見の斬新さや説得力によって評価する。課題レポートでは、課題に対する理解度、文章の表現力や論理性によって評価する。定期試験では、在宅医療や災害時における薬剤師の役割、地域における薬剤師の代表的活動の意義、地域医療に関する諸問題や解決策に関して薬剤師としてどのように関わるか等について論述できるかが問われる。

[本講義と関連する講義]

「薬の世界」入門、多職種連携医療体験実習、医療社会学、医療実務事前学習、薬局実務実習など

[対応するコアカリキュラム一般目標（薬学科）]

A（1）、A（4）、B（3）、B（4）、D1（2）、E2（9）、F（4）、F（5）

[教科書]

授業中にプリントを配布する。

[参考書等]

（参考書）

日本薬学会 編 『スタンダード薬学シリーズⅡ-1 「薬学総論Ⅱ 薬学と社会」』（東京化学同人）

[授業外学修（予習・復習）等]

授業内容の理解を深めるために、事前に配布される資料等を読んでもらうこと。また、適宜、授業内容に関するレポートが課され、これに基づいて成績評価がなされるので注意すること。

（その他（オフィスアワー等））

事前に配布される資料を読み、授業でその内容についての報告や討議ができるように準備すること。また、適宜、授業内容に関するレポートが課され、これに基づいて成績評価がなされるので注意すること。

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

[実務経験のある教員による授業]

①分類

実務経験のある教員による実務経験を活かした授業科目

②当該授業科目に関連した実務経験の内容

該当教員：津田真弘、実務経験：京都大学医学部附属病院（薬剤師）

該当教員：宗可奈子、実務経験：京都大学医学部附属病院（薬剤師）

③実務経験を活かした実践的な授業の内容

薬剤師としての勤務経験を活かし、地域医療における薬剤師の役割に関する講義・演習などを行う。

科目ナンバリング				U-PHA00 3C313 LJ86									
授業科目名 <英訳>		医療社会学 Medical Sociology				担当者所属・ 職名・氏名		薬学研究科 薬学研究科 薬学研究科		教授 講師 助教		山下 富義 喜多 知子 宗 可奈子	
配当 学年	4回生以上	単位数	2	開講年度・ 開講期	2023・ 前期	曜時限	水1	授業 形態	講義	使用 言語	日本語		
学科		薬学部,薬科学科,薬学科				科目に対する区分		必修(薬学科) , 選択 (薬科学科)					
[授業の概要・目的]													
超高齢化社会を迎え、医療は大きな方向転換を迫られる一方で、医療の質を維持・向上することが求められている。前半では、医療制度と医療経済を取り上げ、限りある医療資源の効果的かつ効率的な利用について考察する。後半では、地域包括ケアシステム・チーム医療において薬剤師が果たすべき役割について学ぶ。													
[到達目標]													
1. 医療制度・政策の構造と課題について説明できる。 2. 高齢化社会の問題を経済学的に分析できる。 3. チーム医療における薬剤師の職能を説明できる。 4. 安全管理における薬剤師の役割を説明できる。													
[授業計画と内容]													
1. 医療と社会 2. 健康の多面性とヘルスプロモーション 3. 医療倫理と資源の分配 4. 医療経済と政策 5. 医療保険制度の構造と課題 6. 医療供給制度の構造と機能分化 7. 医療制度の国際比較 8. 医療と薬剤師 9. プライマリ・ケアと薬剤師 10. 在宅医療・介護と薬剤師 11. 病院でのチーム医療 12. 医薬品の管理と供給 13. 医薬品情報とリスクマネジメント 14. 薬害 15. 全体のまとめ													
[履修要件]													
地域医療薬学を履修していること。													
[成績評価の方法・観点]													
出席および小テスト20%、定期試験80%。 小テストでは、講義内容のうち重要な基本的語句についての理解を求める。定期試験では、医療と社会、それに関わる薬剤師の役割に関する重要な事項について問い、講義全体に対する習熟度を評価する。													
[本講義と関連する講義]													
「薬の世界」入門、地域医療薬学、医療実務事前学習													
----- 医療社会学(2)へ続く ↓ ↓ ↓ -----													

医療社会学(2)
[対応するコアカリキュラム一般目標（薬学科）]
A(1)(2)(3)(4), B(1)(2)(3)(4), E3(1), F(3)(4)(5)
[教科書]
授業中にプリントを配布する。
[参考書等]
(参考書) 津川友介『「医療政策」の教科書』（医学書院）ISBN:978-4-260-02553-9 望月眞弓，武居光雄，狭間研至『薬学と社会』（中山書店）ISBN:978-4-521-74448-3 日本薬学会 編『薬学総論Ⅱ』（東京化学同人）ISBN:978-4-807-91701-3 日本薬学会 編『臨床薬学Ⅰ 臨床薬学の基礎および処方箋に基づく調剤』（東京化学同人）ISBN:978-4-807-91719-8 日本薬学会 編『臨床薬学Ⅱ 薬物療法の実践』（東京化学同人）ISBN:978-4-807-91720-4 日本薬学会 編『臨床薬学Ⅲ チーム医療および地域の保健・医療・福祉への参画』（東京化学同人）ISBN:978-4-807-91721-1 堀 了平ら監修『医療薬学 第6版』（廣川書店）ISBN:978-4-567-48166-3
[授業外学修（予習・復習）等]
授業内容の理解を深めるために、事前に配布される資料等を読んでくこと。また、適宜、授業内容に関するレポートが課され、これに基づいて成績評価がなされるので注意すること。
(その他（オフィスアワー等）)
※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。
[実務経験のある教員による授業]
①分類 実務経験のある教員による実務経験を活かした授業科目 ②当該授業科目に関連した実務経験の内容 実務経験のある教員による実務経験を活かした授業科目 該当教員：津田真弘、実務経験：京都大学医学部附属病院（薬剤師） 該当教員：宗可奈子、実務経験：京都大学医学部附属病院（薬剤師） ③実務経験を活かした実践的な授業の内容 薬剤師としての勤務経験を活かし、地域医療およびチーム医療に関する講義・演習を行う。

科目ナンバリング				U-PHA00 3C315 LJ86							
授業科目名 <英訳>		薬局方・薬事関連法規【H30以降入学者用】 Pharmacopoeia ; Pharmaceutical Laws				担当者所属・ 職名・氏名		薬学研究科 教授 樋口 ゆり子 非常勤講師 山本 いづみ			
配当 学年	4回生以上	単位数	2	開講年度・ 開講期	2023・ 前期	曜時限	火2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
学科		薬学部,薬科学科,薬学科				科目に対する区分		必修(薬学科) , 選択 (薬科学科)			
[授業の概要・目的]											
医薬品の製造、販売、使用を業とする者は、国民に対して安心・安全で良質な医療を提供するために、関係の法規や制度、薬業経済を正しく理解し行動することが求められる。本講義では、薬事関連の各法律の背景、内容、運用に加え、薬事制度、行政の役割についても講義し、関係法律等に関する基本的な知識と活用能力の習得を目的とする。また、日本薬局方は、医薬品医療機器等法の規定により厚生労働大臣が定める医療上重要な医薬品に関する規格書である。本授業では、日本薬局方の沿革、すべての条項に適用される通則、代表的な一般試験法、医薬品各条にある代表的な収載薬品等を順に講義し、日本薬局方の意義と内容を理解し、実際の医薬品評価に適用する際の基本的な知識・技能を習得することも併せて目標とする。											
[到達目標]											
1. 薬事関連の法・倫理・責任について概説できる。 2. 関係法令の背景、内容、運用について説明できる。 3. 医療制度と薬剤師の果たすべき役割について説明できる。 4. 日本薬局方の概要（沿革、社会的背景、国際化対応）を説明できる。 5. 日本薬局方の構成を理解し、活用できる。											
[授業計画と内容]											
(日本薬局方) 1. 日本薬局方の概要：沿革、社会的背景 2. 日本薬局方の概要：各国薬局方、国際的ハーモナイゼーション 3. 通則 4. 製剤総則 5. 一般試験法 (重金属試験法、ヒ素試験法、定性反応その他) 6. 医薬品各条の概要（表記法、内容、各国薬局方の比較） 7. 医薬品各条の記載事項 8. まとめ (薬事関係法規) 9. 医薬品医療機器等法（1） 10. 医薬品医療機器等法（2） 11. 麻薬及び向精神薬取締法、あへん法・大麻取締法、覚せい剤取締法 12. 毒物及び劇物取締法、製造物責任法 13. その他関連法規 14. 医療制度 15. 薬業経済											
[履修要件]											
特になし											
----- 薬局方・薬事関連法規【H30以降入学者用】 (2)へ続く↓↓↓											

薬局方・薬事関連法規【H30以降入学者用】(2)

[成績評価の方法・観点]

出席・小テスト20点、中間テスト40点、定期試験40点で、総合評価する。中間テストや定期テストでは、薬事関連法規や日本薬局方の概要（背景や意義）について論述する能力、および法規範や制度に関する重要な記載事項に関する基本的知識が問われる。

[教科書]

山本いづみ『実証 薬事関係法規 ー薬事法規は生きているー』（京都廣川書店）

[参考書等]

（参考書）

『薬事衛生六法【学生版】』（薬事日報社）

『第17改正日本薬局方解説書 学生版』（廣川書店）

[授業外学修（予習・復習）等]

非常に範囲が広いため、授業では進度が速く基本的なエッセンスのみが講義される。したがって、授業内容の復習に加え、各回の授業でカバーされなかった内容についての自主的な学習が求められる。

（その他（オフィスアワー等））

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

[実務経験のある教員による授業]

①分類

・実務に関連した内容の授業科目

②当該授業科目に関連した実務経験の内容

③実務経験を活かした実践的な授業の内容

科目ナンバリング			U-PHA00 1C501 SJ86										
授業科目名 <英訳>		薬学研究SGD演習 SGD Classes for Pharmaceutical Research				担当者所属・ 職名・氏名		薬学研究科 薬学研究科 薬学研究科 薬学研究科 薬学研究科 薬学研究科		准教授 助教 教授 教授 准教授		津田 真弘 宗 可奈子 高須 清誠 山下 富義 柿澤 昌 薬学研究科教員	
配当 学年	1回生以上	単位数	2	開講年度・ 開講期	2023・ 前期	曜時限	水4,5	授業 形態	演習	使用 言語	日本語		
学科		薬学部,薬科学科,薬学科				科目に対する区分		選択					
[授業の概要・目的]													
医薬品の創製から適正使用に渡る幅広い薬学領域において創造的な研究活動を実践するためには、十分な基礎学力に加えて、自ら目的を設定し挑戦する行動力、組織や社会と関わり情報を発信する高いコミュニケーション能力、プレゼンテーション能力、リーダーシップが求められる。本授業では、その資質を高め素養を磨く学部授業の始まりに際し、薬学に関連する基本的な問題を取り上げた演習やグループ討議を行うことによって、科学的に思考し主体的に行動する基本的な能力を身につける。													
[到達目標]													
1. 好奇心をもってトピックを深く探求する。 2. 情報を多面的に分析し、批判的に捉えて文脈の重要性を評価できる。 3. 他者の知的・感情的側面を認識し、円滑にコミュニケーションを図ることができる。 4. 明確で一貫した話の構成を考え、思慮深く言葉を選んでプレゼンテーションできる。 5. 他者の考えを発展させたりメンバーの貢献を建設的に積み重ね、チーム活動を円滑かつ効果的に進められる。													
[授業計画と内容]													
1. オリエンテーション 2－3. コミュニケーション技術を学ぶ 4. ロジカルシンキングの基本を学ぶ 5－6. ディベートの基本技術を学ぶ 7. 医療・生命倫理について考える 8－9. サイエンティフィック・ディベートを体験する 10－13. 研究室を訪問する（事前調査，実地調査，発表準備，発表） 14. 薬学研究について考える 15. まとめ													
[履修要件]													
特になし													
[成績評価の方法・観点]													
・グループワークへの参加評価（30％） ・発表の評価（30％） ・提出物（グループワークに関わるもの、ミニレポートなど）の評価（40％） グループワークは、主体的な学び・課題への取り組み・コミュニケーション・グループ活動への貢献の観点から評価する。 発表は、ディベート、プレゼンテーション、ディスカッションのスキルを評価する。 提出物は、課題内容に対する理解度、文章の表現力や論理性により評価する。 なお、それぞれの評価はルーブリックに基づいて実施する。													
薬学研究SGD演習(2)へ続く↓↓↓													

薬学研究SGD演習(2)

【本講義と関連する講義】

基礎創薬研究、基礎臨床研究、医薬品開発プロジェクト演習1・2、特別実習

【対応するコアカリキュラム一般目標（薬学科）】

A(2)(3)(5)、G(1)(2)(3)

【教科書】

授業中に指示する

【参考書等】

（参考書）

授業中に紹介する

【授業外学修（予習・復習）等】

本演習では、授業時間外の学習が前提となる。事前に与えられる課題を個人もしくはグループ単位でこなし、授業でその内容についての報告や討議ができるように準備すること。また、適宜、授業内容に関する「ミニ」レポートが課され、これに基づいて成績評価がなされるので注意すること。

（その他（オフィスアワー等））

授業は演習やグループ討議を中心に展開されるので、積極的な参加が強く求められる。

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング		U-PHA00 2C502 SJ86									
授業科目名 <英訳>		基礎創薬研究 Basic Drug Discovery Research				担当者所属・ 職名・氏名		薬学研究科 教授 高須 清誠			
配当 学年	2,3回生	単位数	1	開講年度・ 開講期	2023・ 後期前半	曜時限	月3	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
学科		薬学部,薬科学科,薬学科			科目に対する区分		選択				
[授業の概要・目的]											
創薬科学は、物理学・化学・生物学・数学を基礎とする総合科学であり、それらが統合、融合された学問として成立しています。2年次前期までにも、薬学専門科目のうち基礎的な科目をいくつか履修していると思います。すなわち、創薬科学を理解するためには、各科目の関連性を紐付けていくことが重要になります。また、その紐付けをすること で 本科目では、様々な専門をもつ創薬研究者の研究や体験にまつわる講演を聞き、創薬研究について理解を深めるとともに、講演内容に含まれるキーワードについてどのような学問が関連しているのかについて思考・討論する。それにより、これまで受けた講義と薬学の関連性を理解する。 キャリアパスのヒントになる講義なので積極的な参加を期待する。											
[到達目標]											
・創薬研究の概略について説明できるようになる。 ・創薬科学の基礎と応用の関連性について理解する。 ・これまで受講した種々の講義の関連性について理解する。 ・小グループで自分の考えを発表し、他人の意見を理解できるようになる。 ・将来、どのように創薬研究に関わりたいかについて思考する。											
[授業計画と内容]											
1. 若手アカデミア研究者のキャリアパスと研究の話題 2. 中堅アカデミア研究者のキャリアパスと研究の話題 3. 若手企業創薬研究者のキャリアパスと研究の話題 4. 中堅企業創薬研究者のキャリアパスと研究の話題 5. 行政研究者のキャリアパスと研究の話題 6. シニア研究者のキャリアパスと研究の話題 7. 君たちはキャリアパスをどう考えるか？ 8. まとめ 各回について内容の変更をする場合があるが、その場合は初回の講義で説明する。											
[履修要件]											
講義への積極的な参加：本講義では、学生が主体的に学び、小グループで討論する内容を含みます。											
[成績評価の方法・観点]											
平常点（出席状況、授業内の発言、グループワークでの積極性など） 20% レポート（提出及び内容） 80%											
[本講義と関連する講義]											
薬学研究SGD演習、基礎臨床研究、医薬品プロジェクト演習1											
[対応するコアカリキュラム一般目標（薬学科）]											
A(5)、C、D、E、G											
-----基礎創薬研究(2)へ続く↓↓↓-----											

基礎創業研究(2)

[教科書]

使用しない

[参考書等]

(参考書)
授業中に紹介する

[授業外学修（予習・復習）等]

適宜、授業内容に関するレポートが課され、これに基づいて成績評価がなされるので注意すること。

（その他（オフィスアワー等））

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング		U-PHA00 2C503 SJ86									
授業科目名 <英訳>		基礎臨床研究 Basic Clinical Research				担当者所属・ 職名・氏名		薬学研究科 教授 山下 富義 附属病院 教授 寺田 智祐 非常勤講師 長縄 華子 非常勤講師 西郷 雅美子 非常勤講師 梅村 圭祐 非常勤講師 片田 佳希 非常勤講師 川田 将義 非常勤講師 土手 賢史			
配当 学年	2,3回生	単位数	1	開講年度・ 開講期	2023・ 後期後半	曜時限	月3	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
学科		薬学部,薬科学科,薬学科			科目に対する区分		選択				
[授業の概要・目的]											
医療が急速に高度化・複雑化する中で、薬剤師には患者に寄り添いながら安全・安心な医療を提供するだけではなく、薬学的視点から新たなエビデンスを創出することも求められている。特に、京大病院など、高度な医療を提供している特定機能病院ではその役割は大きい。一方で大学においては医療現場で働く薬剤師との接点は限られており、機会があったとしても薬剤業務の話が大半で、薬剤師が行う臨床研究に関する話題は少ないのが現状である。本科目では、実際に臨床現場で活躍する薬剤師が取り組む臨床研究や臨床業務に関する講演を聞き概要や事例に触れて、臨床研究についての理解を深め、薬学臨床研究の面白さ、難しさについて考える。 キャリアパスのヒントになる講義・演習なので積極的な参加を期待する。											
[到達目標]											
1. 臨床研究の概略について説明できる。 2. 薬剤師が臨床研究を行う社会的意義を説明できる。 3. 臨床研究の面白さ、難しさについて理解できる。 4. 臨床研究の倫理性に配慮できる。 5. 将来、どのように臨床研究に関わりたいかについて思考する。											
[授業計画と内容]											
1. 序論（山下） 2. 病院薬剤師の業務と研究活動（寺田） 3. 薬剤師レジデント制度と研究活動（長縄、西郷） 4. 薬剤師と社会人博士課程（梅村） 5. 薬剤師が行う臨床研究(1)～感染・移植医療・医療安全領域～（片田） 6. 薬剤師が行う臨床研究(2)～脳神経領域～（川田） 7. 薬剤師が行う臨床研究(3)～がん領域～（土手） 8. まとめ ※各回について内容や順番を変更する場合があるが、その場合は初回の講義で説明する。											
[履修要件]											
特になし											
[成績評価の方法・観点]											
平常点（授業への出席、演習プロダクトなど30点）、課題レポート（70点）により評価する。 課題レポートでは、課題内容に対する理解度、文章の表現力や論理性によって評価する。											
基礎臨床研究(2)へ続く ↓ ↓ ↓											

基礎臨床研究(2)

[本講義と関連する講義]

薬学研究SGD演習、基礎創薬研究、医薬品プロジェクト演習 2

[対応するコアカリキュラム一般目標（薬学科）]

A(1)(2)(5)、G(1)(2)(3)

[教科書]

授業でプリント資料が配布される。

[参考書等]

（参考書）

授業中に紹介する

[授業外学修（予習・復習）等]

適宜、授業内容に関するレポートが課され、これに基づいて成績評価がなされるので注意すること。

（その他（オフィスアワー等））

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング		U-PHA00 3C402 LJ86									
授業科目名 <英訳>		基礎バイオインフォマティクス【H30以降入学用】 Introduction to Bioinformatics				担当者所属・ 職名・氏名		医学研究科 薬学研究科		教授 奥野 恭史 准教授 白川 久志	
配当 学年	3回生以上	単位数	2	開講年度・ 開講期	2023・ 前期	曜時限	月2	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
学科		薬学部,薬科学科,薬学科				科目に対する区分		選択			
[授業の概要・目的]											
近年、あらゆる分野において爆発的に増大し続けるビッグデータから知識発見や新たな価値を創造する科学技術として、ビッグデータ科学が注目されている。創薬・生命科学分野においても、ハイスループット技術やオミクス計測技術の著しい進展に伴いデータ爆発が起こり、ビッグデータ科学の研究開発が急務とされている。このように多種多様かつ膨大なデータに直面する最中、一方ではこれらビッグデータを解析する技術として人工知能（AI）が注目されるに至っている。本科目では医学・薬学におけるデータサイエンス、人工知能（AI）、シミュレーションなどの計算・情報技術について、具体的な事例について講述する。											
[到達目標]											
バイオインフォマティクス、ケモインフォマティクス、インシリコ創薬など、薬学における情報科学と計算科学の基本的考え方を修得する。											
[授業計画と内容]											
1. 概要説明：医療・創薬のためのデータサイエンス 2. データ解析・AIの基礎 1 3. データ解析・AIの基礎 2 4. 医療データ解析とAI 1 5. 医療データ解析とAI 2 6. コホート研究と健診データ解析 7. データベース 8. バイオインフォマティクス 9. システムズバイオロジー 10. ゲノム医療 11. AI創薬 1 12. AI創薬 2 13. 分子シミュレーション 14. マルチスケールシミュレーション 15. フィードバック * 授業の理解度、進行度等により、講義の順番や内容が変わる場合がある。											
[履修要件]											
特になし											
[成績評価の方法・観点]											
平常点60%，レポート40％											
[教科書]											
Webを用いて、講義資料を配信する											
-----基礎バイオインフォマティクス【H30以降入学用】(2)へ続く↓↓↓											

基礎バイオインフォマティクス【H30以降入学者用】(2)

[参考書等]

(参考書)

奥野恭史(編集)『最新 創薬インフォマティクス活用マニュアル』((株)メディカルドウ)

[授業外学修（予習・復習）等]

毎回の授業終了時に出題するレポートに取り組むことで、復習を行うこと。

(その他（オフィスアワー等）)

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング			U-PHA00 3C408 LJ86								
授業科目名 ＜英訳＞		ゲノムインフォマティクス Genome Informatics				担当者所属・ 職名・氏名		化学研究所 化学研究所 化学研究所 化学研究所	教授 准教授 助教 助教	緒方 遠藤 岡崎 疋田	博之 寿 友輔 弘之
配当 学年	3回生以上	単位数	2	開講年度・ 開講期	2023・ 前期	曜時限	その他	授業 形態	講義	使用 言語	日本語
学科		薬科学科,薬学科				科目に対する区分		選択			
[授業の概要・目的]											
バイオインフォマティクスは、分子生物学、細胞生物学、医学、生態学、進化学など、様々な生命科学の研究分野で必須とされる技術である。授業では、ゲノム・メタゲノム解析から得られる大規模配列データから生物学的意味を見出すために利用されるバイオインフォマティクス技術について、その基礎を習得する。手法の背景となる理論・概念を理解すると同時に、解析ツールを利用した数回の演習を行う。演習は、学術情報メディアセンターの計算機システムを利用する。											
[到達目標]											
・ 配列解析の基礎となるアライメント、類似配列検索、遺伝子予測、分子系統解析などの計算手法の原理を理解する。 ・ タンパク質の機能予測、比較ゲノム解析、メタゲノム解析で利用される手法や概念を理解する。 ・ 上述の手法について、実際にソフトウェアの利用を通して、解析ツールの使い方とその機能を習得する。											
[授業計画と内容]											
-授業形式等についてはPandAに随時掲載しますので注意して下さい-											
第1回 配列アライメント（疋田） 第2回 ホモロジー検索（緒方） 第3回 ホモロジー検索 【演習】（疋田） 第4回 配列モチーフ・隠れマルコフモデル（緒方） 第5回 遺伝子予測（緒方） 第6回 機能・構造予測 【演習】（岡崎） 第7回 アセンブリ・ゲノム解析（岡崎） 第8回 分子系統解析（緒方） 第9回 分子系統解析【演習】（疋田） 第10回 KEGGパスイデータベース【演習】（遠藤） 第11回 分子進化（緒方） 第12回 データベース利用（ゲノムネット・学術文献）【演習】（遠藤） 第13回 メタゲノム解析（岡崎） 第14回 メタゲノム解析（群集解析）【演習】（遠藤） 第15回 予備日・フィードバック（緒方）											
[履修要件]											
分子生物学の基礎を習得していることが望ましいが、必須ではない。											
[成績評価の方法・観点]											
生体分子情報を計算機で解析するために必要なバイオインフォマティクスの基礎が理解できているか、関連する問題を解決することができるかを、平常点評価（100%、複数回の小レポートを含む）により評価する。											
[教科書]											
講義資料を配布する。											
-----ゲノムインフォマティクス(2)へ続く↓↓↓-----											

ゲノムインフォマティクス (2)

[参考書等]

(参考書)

日本バイオインフォマティクス学会編 『バイオインフォマティクス入門』（慶応義塾大学出版会）ISBN:978-4-7664-2251-1

藤博幸（編） 『はじめてのバイオインフォマティクス』（講談社）ISBN:4061538624

David Mount 『Bioinformatics: Sequence and Genome Analysis』（Cold Spring Harbor Laboratory Press）ISBN:0879697121
（邦訳が「バイオインフォマティクス ゲノム配列から機能解析へ」としてメディカル・サイエンス・インターナショナルから出ています。）

金久實 『ポストゲノム情報への招待』（共立出版）ISBN:4320055748

[授業外学修（予習・復習）等]

- ・ 予習は必ずしも必要ない
- ・ 復習においては、講義資料、関連論文の調査、ソフトウェアを実際に利用することを通して、授業内容の理解を深める。

(その他（オフィスアワー等）)

メディア授業科目

オフィスアワーは特に設けていませんが、講義での疑問点などがあれば、ogata@kuicr.kyoto-u.ac.jpまでメールで連絡して下さい。

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング		U-PHA00 3C404 SJ86										
授業科目名 <英訳>		医薬品開発プロジェクト演習1【H30以降入学者用】 Pharmaceutical R&D Exercise 1				担当者所属・ 職名・氏名		薬学研究科 薬学研究科		准教授	井貫 晋輔 薬学研究科教員	
配当 学年	2,3回生	単位数	1	開講年度・ 開講期	2023・ 前期集中	曜時限	集中講義	授業 形態	演習	使用 言語	日本語	
学科		薬学部,薬科学科,薬学科				科目に対する区分		選択				
[授業の概要・目的]												
製薬企業において実際に開発に成功した代表的医薬品を題材にし、探索研究から臨床研究医薬品候補の決定までのプロセスを仮想的に体験する。学生少人数からなるグループを仮想開発プロジェクトチームとして組織し、研究会議・製品開発会議での討議を通してグループ内で最善と思われる解決方法を導く訓練を行い、創薬に関して必要な知識・発想法・調査法・討論法を取得する。また、他の講義で習得した専門的知識を横断的・統合的に結びつけ、薬学に対する理解を深化させる。												
[到達目標]												
1. 創薬研究がもたらす効果を、研究者の立場および患者の立場から理解するとともに、市場や科学技術に与える影響を理解する。 2. 明確な答えが見えない課題に対して新たなアイデアを創出して解決の糸口を見つける訓練をし、研究マインドを醸成する。 3. 創薬研究に関心を持ち、新しい課題に積極的に取り組む姿勢を身につける。 4. 情報を論理的に整理・統合し、プレゼンテーションする能力を身につける。 5. 異なる意見、対立する意見を尊重しつつ、自分の考えを発表・討論する能力を身につける。												
[授業計画と内容]												
1. 導入（当該年度で取り扱うテーマ・疾病・医薬品の説明） 2. 予備調査1：課題となる疾病について、患者の立場からの治療に対するニーズを調査する。 3. 予備調査2：上記疾病の原因や結果を理解する。 4. 予備調査3：上記疾病治療に使用される医薬品の開発経緯を理解する。 5. 戦略企画1：既存薬の特徴を抽出し、より優れた医薬品を創製するための課題を設定する。 6. 戦略企画2：新薬の市場規模を調査する。 7. 戦略企画3：新薬開発のための科学的方法論を論文調査する。 8. 戦略企画4：新薬開発のための戦略を小グループで討議し、決定する。 9. 研究企画1：適切なスクリーニング法を調査・討論し、まとめる。 10. 研究企画2：適切なリード化合物最適化法を調査・討論し、まとめる。 11. 研究企画3：適切な薬理試験法を調査・討論し、まとめる。 12. 研究企画4：適切な製剤化法を調査・討論し、まとめる。 13. 企画発表1：上記の調査結果を総合し、新薬を創製するための戦略・手法を発表コンテンツとしてまとめあげる。 14. 企画発表2：仮想製薬企業ごとに企画を発表し、内容について討論する。 15. 企画発表3：異なる意見、対立する意見を尊重し、討論を通してよりよい意見をまとめる。												
[履修要件]												
9月下旬頃に実施される集中講義の全期間（約10日間）に出席できること。詳細な日程については5月末までに通知する。 この演習は、自ら積極的に討論に参加して発言しないと面白くないし、意味がない。												
[成績評価の方法・観点]												
授業への出席およびその態度（50点満点）、課題レポート（20点満点）、課題発掘・解決に対する積極性（30点満点）により評価する。 授業態度とは、SGDでの討論での積極性および課題調査の程度によって評価する。 課題レポートでは、演習内容や課題に対する理解度、文章の表現力や論理性によって評価する。 課題発掘・解決に対する積極性とは、演習全体を通して斬新なアイデアの創出や、アイデアをまとめる能力によって評価する。												
-----医薬品開発プロジェクト演習1【H30以降入学者用】(2)へ続く↓↓↓												

医薬品開発プロジェクト演習1【H30以降入学者用】(2)

【本講義と関連する講義】

薬学部で開講される全ての講義

【対応するコアカリキュラム一般目標（薬学科）】

A（5）、B（1）～（3）、G1（1）（3）

【教科書】

使用しない

【参考書等】

（参考書）

初回講義時にプリントを配付する。参考書は演習中に適宜紹介する。

【授業外学修（予習・復習）等】

提示されたテーマに関して、実臨床の問題点や創薬ニーズをまとめ、初回討議の前に準備すること。また、各回のSGDで明らかになった課題を論文やWEBサイトで再調査し、次回SGDでの討論資料として準備すること。

（その他（オフィスアワー等））

創薬に関わるサイエンスについて、予習、討論、問題提起など能動的な態度で演習に取りくむことのできる学生対象です。製薬企業ならびに関連職（産・官・学）に従事を希望する学生には非常に重要な演習です。薬剤師職を目指す学生にとっても創薬方法を知る良い機会となる演習です。受講希望者多数の場合は抽選により受講者を決定する場合があります。

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング		U-PHA00 3C405 SJ86											
授業科目名 <英訳>		医薬品開発プロジェクト演習2【H30以降入学者用】 Pharmaceutical R&D Exercise 2				担当者所属・ 職名・氏名		薬学研究科 薬学研究科 薬学研究科		教授 講師 助教		山下 富義 喜多 知子 宗 可奈子	
配当 学年	4回生以上	単位数	1	開講年度・ 開講期	2023・ 前期集中	曜時限	集中講義	授業 形態	演習	使用 言語	日本語		
学科		薬学部,薬科学科,薬学科				科目に対する区分		選択					
[授業の概要・目的]													
将来、医薬品開発と生産に参画できるようになるために、医薬品開発の各プロセスについての基本的技能と態度を修得する。具体的には、臨床試験のデザインと解析に必要な臨床統計に関して計算演習を行うほか、実際の現場で使用する治験実施計画書の一部を学生に提供し、不足する重要な情報について討議・補完したのち、ロールプレイ方式で医療機関における治験実施計画の説明をする。													
[到達目標]													
1. 医薬品の臨床試験の流れについて具体的な手順を説明できる。 2. 治験実施計画書の記載事項を列挙し、各項目に記すべき重要なポイントを説明できる。 3. 臨床試験デザインにおける倫理的な問題に配慮する。 4. 治験内容を医師や医療従事者に対して適切にコミュニケーションできる。 5. 統計的基礎に基づいて臨床試験を適切にデザインできる。													
[授業計画と内容]													
1. 講義（1）： 医薬品開発と市場の動向 2. 講義（2）： 非臨床試験の目的と実施概要 3. 講義（3）： 臨床試験の目的と実施概要 4. 講義（4）： 医薬品の製造販売承認申請、市販後調査の実施概要 5. 講義（5）： 臨床試験のデザインと解析 6. 講義（6）： モデルベース医薬品開発 7－8. 演習（1）： 臨床試験のデザインと解析 9. 演習（2）： 治験に関わる職種の役割 10. 演習（3）： 臨床試験のフローシート作成 11. 演習（4）： 開発候補医薬品の特徴づけ 12. 演習（5）： 治験実施目的の明確化 13－14. 演習（6）： 治験実施計画概要の作成 15. 演習（7）： 医療機関における治験実施計画の説明（ロールプレイ）													
[履修要件]													
特になし													
[成績評価の方法・観点]													
授業への出席（25点）およびその態度（25点）、コンテンツ・発表(25点)、課題レポート（25点）により評価する。授業態度とは、討論や討議への参加の程度、意見の斬新さや説得力によって評価する。コンテンツ・発表とは、ロールプレイにおけるプレゼンテーションの明快さ、表現力、説得力を重視する。課題レポートでは、演習内容や課題に対する理解度、文章の表現力や論理性によって評価する。													
[本講義と関連する講義]													
医薬品開発プロジェクト演習Ⅰ													
―――――――――― 医薬品開発プロジェクト演習2【H30以降入学者用】(2)へ続く↓↓↓													

医薬品開発プロジェクト演習2【H30以降入学用】(2)
[対応するコアカリキュラム一般目標（薬学科）]
A(1)
[教科書]
授業時にプリントを配布する
[参考書等]
(参考書) J.L.フライス 『臨床試験のデザインと解析』（株式会社アーム）ISBN:4-9902097-0-2 柴田敏之ほか編 『医薬品開発論』（廣川書店）ISBN:978-4-567-39770-4
[授業外学修（予習・復習）等]
本授業は演習が中心であり、事前に知識を確実に身につけておく必要がある。前半の講義部分では復習をしっかりと行うこと。また、演習においては、授業時間内はグループワーク等が中心となるので、治験実施計画概要の作成やプレゼンテーション資料の作成は原則、授業外で行うこと。
(その他（オフィスアワー等）)
製薬企業における医薬品開発業務への従事を希望する学生には非常に重要な演習です。受講希望者多数の場合は抽選により受講者を決定する可能性があります。 ※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。
[実務経験のある教員による授業]
①分類 実務経験のある教員による実務経験を活かした授業科目 ②当該授業科目に関連した実務経験の内容 ③実務経験を活かした実践的な授業の内容

科目ナンバリング			U-PHA00 1C407 PJ86										
授業科目名 <英訳>		多職種連携医療体験実習 Interprofessional Clinical Exposure				担当者所属・ 職名・氏名		薬学研究科 薬学研究科 薬学研究科 医学研究科 医学研究科 医学研究科		教授 講師 助教 教授 講師 助教		山下 富義 喜多 知子 宗 可奈子 恒藤 暁 山本 憲 種村 文孝	
配当 学年	1回生以上	単位数	1	開講年度・ 開講期	2023・ 前期	曜時限	その他	授業 形態	実習・演習	使用 言語	日本語		
学科		薬学部,薬科学科,薬学科				科目に対する区分		選択					
[授業の概要・目的]													
薬剤師には患者本位の視点に立ち、患者の安全に配慮しつつ医療の担い手として求められる活動を適切な態度で実践することが求められる。また、チーム医療における多職種連携の必要性を理解し、チームの一員としての薬剤師の役割を積極的に果たすことが求められる。本授業では、医療機関における早期体験実習を通じ、患者・医療者と接することで医療の実際を知り、医療人としての自覚を身につけ、チーム医療における薬剤師の役割を学ぶ。なお、本授業は医学部と合同で実施し、グループ討議を通じて、多職種の中で自らの意見を発しチーム医療に貢献する素地を養う。													
[到達目標]													
1. 患者の視点に立ち、病院における様々な部署の業務、医療及び病院の現状を知る。 2. チーム医療における薬剤師および他職種の役割と多職種連携の重要性を理解する。													
[授業計画と内容]													
1. 導入オリエンテーション（5月）：医療体験実習の概要、実習施設の登録方法 2. 直前ガイダンス（7月）：実習レポート作成方法 3. 事前勉強会（7月）：グループ毎に実習施設の予習や実習目的の共有、実施報告書の作成 4～13. 実習（8～9月の1週間）：病院見学・体験（薬剤部、手術部、外来診察室、検査室、医療情報部等） 14～15. 実習後ワークショップ（9月）：他の学生との病院における様々な部署の業務、医療及び病院の現状に対する認識の共有、チーム医療における薬剤師の役割および多職種連携の重要性に関する討議、プロダクトの作成と発表													
[履修要件]													
特になし													
[成績評価の方法・観点]													
平常点（40点）、グループ討議（プロダクト作成など）（40点）、実習レポート作成（20点）で評価する。グループ討議では議論やプロダクト作成への参加の程度によって評価する。実習レポートでは、薬剤師および他職種の業務に対する理解度、文章の表現力や論理性によって評価する。													
[本講義と関連する講義]													
「薬の世界」入門、地域医療薬学、医療実務事前学習、病院実務実習、薬局実務実習など													
[対応するコアカリキュラム一般目標（薬学科）]													
A（1）（2）（3）（4）、F（1）（4）													
----- 多職種連携医療体験実習(2)へ続く ↓ ↓ ↓													

多職種連携医療体験実習(2)

[教科書]

プリントを配布します。

[参考書等]

(参考書)
授業中に紹介する

[授業外学修（予習・復習）等]

多職種連携医療体験実習では事前に配布される資料を読み、実習施設で医療者に業務内容等について質問ができるように準備すること。また、実習中は毎日実習内容をレポートにまとめる必要があり、これが成績評価の一部となるので注意すること。

(その他（オフィスアワー等）)

能動的な態度で受講してください。受講希望者が40名を超える場合は抽選する可能性があります。

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

[実務経験のある教員による授業]

- ①分類
実務経験のある教員による実務経験を活かした授業科目
- ②当該授業科目に関連した実務経験の内容
該当教員：津田真弘、実務経験：京都大学医学部附属病院（薬剤師）
該当教員：宗可奈子、実務経験：京都大学医学部附属病院（薬剤師）
実習先の医療従事者
- ③実務経験を活かした実践的な授業の内容
実習先の医療従事者の指導の下、医療現場における多職種連携の実際を知る。教員は薬剤師としての勤務経験を活かし、多職種連携に関する講義・演習を行う。

科目ナンバリング		U-PHA00 1C504 SJ86									
授業科目名 <英訳>		早期専門研究体験 Early Research Exposure				担当者所属・ 職名・氏名		薬学研究科 教授 石濱 泰			
配当 学年	2,3回生	単位数	1	開講年度・ 開講期	2023・ 前期	曜時限	その他	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
学科		薬学部,薬科学科,薬学科			科目に対する区分		選択				
[授業の概要・目的]											
分野配属前の2～3年次生のうち、薬学研究に対してモチベーションの高い学生を対象に、早期から研究分野の一員となり教員および院生の指導のもとで研究を実施します。研究に必要な考え方や技術に触れるとともに学年を超えた密度の濃い交流を経験することで、4年次からの特別実習（卒業研究）、大学院修士課程・博士（後期）課程での専門研究やその後の将来設計を考える機会が得られます。 積極的な参加を期待しています。											
[到達目標]											
早期に研究の一端に触れることで、学生は次のきっかけを得ることを目的とする。 1. 研究に対する具体的イメージを抱いて学習に取り組めるようになる。 2. 薬学および関連領域について、より高い次元で考えることができるようになる。 3. 将来設計を考えることができる。 4. 同級生以外のコミュニティでのふるまいができるようになる。 5. 研究倫理、安全倫理について理解する。											
[授業計画と内容]											
受入教員の計画と内容に従う。											
[履修要件]											
・早期研究室体験を開始する直前のセメスターまでの必修科目をすべて修得していること ・専門研究を強く希望し、高い研究意欲を有していること。 ・大学院博士後期課程もしくは博士課程進学を前向きに検討していること。 ・受入担当教員との面談を経て、双方の条件（研究時間、指導方法など）を合意すること。 ・授業時間等を除き、研究活動に参加できる学生を対象とする。途中から来なくなる可能性がある場合は、早期研究体験を希望しないこと。											
[成績評価の方法・観点]											
平常点（出席状況、履修態度）		70%									
研究レポート		30%									
[本講義と関連する講義]											
基礎化学実験、薬学専門実習、特別実習											
----- 早期専門研究体験 (2)へ続く↓↓↓ -----											

早期専門研究体験 (2)

[対応するコアカリキュラム一般目標（薬学科）]

G

[教科書]

使用しない

[参考書等]

（参考書）
授業中に紹介する

[授業外学修（予習・復習）等]

受入教員の指示に従うこと。

（その他（オフィスアワー等））

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング		U-PHA00 1C504 SJ86									
授業科目名 <英訳>		早期専門研究体験 Early Research Exposure				担当者所属・ 職名・氏名		薬学研究科 教授 石濱 泰			
配当 学年	2,3回生	単位数	1	開講年度・ 開講期	2023・ 後期	曜時限	その他	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
学科		薬学部,薬科学科,薬学科			科目に対する区分		選択				
[授業の概要・目的]											
分野配属前の2～3年次生のうち、薬学研究に対してモチベーションの高い学生を対象に、早期から研究分野の一員となり教員および院生の指導のもとで研究を実施します。研究に必要な考え方や技術に触れるとともに学年を超えた密度の濃い交流を経験することで、4年次からの特別実習（卒業研究）、大学院修士課程・博士（後期）課程での専門研究やその後の将来設計を考える機会が得られます。 積極的な参加を期待しています。											
[到達目標]											
早期に研究の一端に触れることで、学生は次のきっかけを得ることを目的とする。 1. 研究に対する具体的イメージを抱いて学習に取り組めるようになる。 2. 薬学および関連領域について、より高い次元で考えることができるようになる。 3. 将来設計を考えることができる。 4. 同級生以外のコミュニティでのふるまいができるようになる。 5. 研究倫理、安全倫理について理解する。											
[授業計画と内容]											
受入教員の計画と内容に従う。											
[履修要件]											
・早期研究室体験を開始する直前のセメスターまでの必修科目をすべて修得していること。 ・専門研究を強く希望し、高い研究意欲を有していること。 ・大学院博士後期課程もしくは博士課程進学を前向きに検討していること。 ・受入担当教員との面談を経て、双方の条件（研究時間、指導方法など）を合意すること。 ・授業時間等を除き、研究活動に参加できる学生を対象とする。途中から来なくなる可能性がある場合は、早期研究体験を希望しないこと。											
[成績評価の方法・観点]											
平常点（出席状況、履修態度）		70%									
研究レポート		30%									
[本講義と関連する講義]											
基礎化学実験、薬学専門実習、特別実習											
[対応するコアカリキュラム一般目標（薬学科）]											
G											
----- 早期専門研究体験 (2)へ続く↓↓↓ -----											

早期専門研究体験 (2)

[教科書]

使用しない

[参考書等]

(参考書)
授業中に紹介する

[授業外学修（予習・復習）等]

受入教員の指示に従うこと。

(その他（オフィスアワー等）)

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング				U-PHA00 3C505 SJ86							
授業科目名 <英訳>		専門研究導入演習 A Introduction Seminar for Research Training A				担当者所属・ 職名・氏名		薬学研究科 教授 石濱 泰			
配当 学年	3回生以上	単位数	1	開講年度・ 開講期	2023・ 後期	曜時限	その他	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
学科		薬学部,薬科学科,薬学科				科目に対する区分		選択			
[授業の概要・目的]											
3年間の一般教養科目および専門基礎科目の必要単位を取得すると、4年次から分野配属をし専門的な研究を実施する特別実習が始まります。本科目は、専門研究を始めるにあたって、橋渡しの内容の科目となります。各分野の教員が3週にわたって、その分野が専門とする学問や研究について紹介します。 配属する分野で就職先などの将来が決定するわけではありませんが、特別実習は皆さんのキャリアデザインを考える際のよい機会になっています。よりよい環境で特別実習を受けるために、皆さんの学問的興味を今一度考え直すとともに、その分野の心構えや知識の準備をする科目です。 開講する分野の中から、興味をもつ2つの分野（研究室）を選択し履修します。											
[到達目標]											
履修する分野の学問・研究に関する基本的事項を理解する。 これまでに学んだ専門科目の内容と特別実習の関連について理解する。 今後のキャリアについて考える。											
[授業計画と内容]											
・ A分野の専門領域についての講義（3週） ・ B分野の専門領域についての講義（3週） ・ 研究室の見学と大学院生インタビュー（1週） ・ レポートもしくは試験（1週）											
[履修要件]											
履修する分野の基盤知識について、一定程度理解していること。											
[成績評価の方法・観点]											
授業への積極的な参加状況（40％）、レポートもしくは試験（60％）を基に2段階（合格・不合格）で評価します。なお、2つの分野で6割以上の評価を得た場合に、本講義を合格とします。いずれか1分野でも6割に満たない評価の場合は、不合格になります。											
[本講義と関連する講義]											
専門研究導入演習 B、特別実習											
[教科書]											
授業中に指示する											
[参考書等]											
（参考書） 授業中に紹介する											
[授業外学修（予習・復習）等]											
教員の指示に従うこと。 特にその分野での研究について興味をもって自学自習すること。											
（その他（オフィスアワー等））											
各分野の最大履修人数を30名程度までとする場合がある。											
※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

科目ナンバリング				U-PHA00 3C506 SJ86							
授業科目名 <英訳>		専門研究導入演習 B Introduction Seminar for Research Training B				担当者所属・ 職名・氏名		薬学研究科 教授 石濱 泰			
配当 学年	3回生以上	単位数	1	開講年度・ 開講期	2023・ 後期	曜時限	その他	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
学科		薬学部,薬科学科,薬学科				科目に対する区分		選択			
[授業の概要・目的]											
3年間の一般教養科目および専門基礎科目の必要単位を取得すると、4年次から分野配属をし専門的な研究を実施する特別実習が始まります。本科目は、専門研究を始めるにあたって、橋渡しの内容的科目となります。各分野の教員が3週にわたって、その分野が専門とする学問や研究について紹介します。 配属する分野で就職先などの将来が決定するわけではありませんが、特別実習は皆さんのキャリアデザインを考える際のよい機会になっています。よりよい環境で特別実習を受けるために、皆さんの学問的興味を今一度考え直すとともに、その分野の心構えや知識の準備をする科目です。 開講する分野の中から、興味をもつ2つの分野を選択し履修します。											
[到達目標]											
履修する分野の学問・研究に関する基本的事項を理解する。 これまでに学んだ専門科目の内容と特別実習の関連について理解する。 今後のキャリアについて考える。											
[授業計画と内容]											
・ C 分野の専門領域についての講義（3週） ・ D 分野の専門領域についての講義（3週） ・ 研究室の見学と大学院生インタビュー（1週） ・ レポートもしくは試験（1週）											
[履修要件]											
履修する分野の基盤知識について、一定程度理解していること。											
[成績評価の方法・観点]											
授業への積極的な参加状況（40％）、レポートもしくは試験（60％）を基に2段階（合格・不合格）で評価します。なお、2つの分野で6割以上の評価を得た場合に、本講義を合格とします。いずれか1分野でも6割に満たない評価の場合は、不合格になります。											
[教科書]											
授業中に指示する											
[参考書等]											
（参考書） 授業中に紹介する											
[授業外学修（予習・復習）等]											
教員の指示に従うこと。 特にその分野での研究について興味をもって自学自習すること。											
（その他（オフィスアワー等））											
各分野の最大履修人数を30名程度までとする場合がある。											
※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

科目ナンバリング		U-PHA12 4E351 SJ86									
授業科目名 <英訳>		医療薬学ワークショップ Medical pharmacy workshop				担当者所属・ 職名・氏名		薬学研究科 薬学研究科		配属分野教員 医療系教員	
配当 学年	4-6回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2023・ 通年	曜時限	その他	授業 形態	講義・実験	使用 言語	日本語
学科		薬学科			科目に対する区分		必修（薬学科）				
[授業の概要・目的]											
医療薬学研究・創薬研究に関連する実務や研究等について、講義、実験、演習、調査・発表、実地経験などを通じて知識、技能、態度を習得する。特別実習とは別に配属分野で様々な行事に参加することにより、研究マインドの涵養、能動的学習態度、自己表現能力、コミュニケーション能力、問題解決能力、個人および集団の意見を整理して発表できるプレゼンテーション能力を身につける。											
[到達目標]											
1. 医療薬学研究・創薬研究に関する総合的な知識、技能、態度を習得し、研究マインドを涵養する。 2. 能動的学習態度、自己表現能力、コミュニケーション能力、問題解決能力、プレゼンテーション能力を身につける。											
[授業計画と内容]											
履修内容や履修計画は配属した分野によって示され、特別実習や他の授業の実施時以外の時間帯に実施される。											
授業内容の例は以下のとおりである。 ・特別実習の準備、立案（4年次前期） ・大学院生対象の講義（概論、特論等）の聴講（4～6年次） ・特別講演会（外人講師を含む）への参加（4～6年次） ・特別実習発表会およびそのリハーサルへの参加（4～6年次） ・学会参加・学会発表およびそのリハーサルへの参加（4～6年次）											
[履修要件]											
特になし											
[成績評価の方法・観点]											
平常点（出席および履修態度）70%、レポート・資料30%により評価する。習得した知識、技能、態度を総合的に評価して判定する。講義聴講、特別講演会への参加、特別実習発表会への参加、学会参加等については、分野主任に発表資料やレポートを提出する。											
[本講義と関連する講義]											
特別実習、学術情報論、医療薬学実験技術											
[対応するコアカリキュラム一般目標（薬学科）]											
G（1）（2）（3）											
[教科書]											
授業中に指示する											
[参考書等]											
（参考書） 授業中に紹介する											
-----医療薬学ワークショップ(2)へ続く↓↓↓-----											

医療薬学ワークショップ (2)

[授業外学修（予習・復習）等]

あらかじめ情報が提供されている講義、特別講演会、特別実習発表会、学会等については、教科書、参考書、要旨集等を予習し、授業内容のより深い理解を図ること。いずれの場合も、分野主任に提出したレポートにより復習態度を評価し、成績を総合的に評価するので注意すること。

（その他（オフィスアワー等））

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング		U-PHA12 4E352 PJ86									
授業科目名 <英訳>		医療薬学実験技術 Methods in Medical and Pharmaceutical Sciences				担当者所属・ 職名・氏名		薬学研究科 薬学研究科		配属分野教員 医療系教員	
配当 学年	4-6回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2023・ 通年	曜時限	その他	授業 形態	実習	使用 言語	日本語
学科		薬学科			科目に対する区分		必修（薬学科）				
[授業の概要・目的]											
最先端の医療薬学研究・創薬研究に関連する特別実習を実施するにあたり、基本的な技能（実験技術）を習得する。また、実験ノートに記載に関する注意事項や実験データの管理等についても基本事項を学び、研究者としての基本的態度を身につける。さらに各分野が担当している薬学専門実習の指導を通じて専門的な実験に関する技能、指導者としての態度を習得する。											
[到達目標]											
1. 特別実習を実施するための基本的な実験技術を習得する。 2. 実験ノートに記載や実験データの管理等についての基本事項を学ぶ。 3. 薬学専門実習の指導を通じて専門的な実験に関する技能、指導者としての態度を習得する。											
[授業計画と内容]											
履修内容や履修計画は配属した分野によって示される。											
[履修要件]											
特になし											
[成績評価の方法・観点]											
実験技術50%、実験ノート・データ管理40%、研究指導力10%により評価する。 （基本的な技能実験技術と研究者としての基本的態度） 3年間を通じて実験技術習得レベルと実験ノート等を総合的に判定する。 （薬学専門実習の指導） 各学年における薬学専門実習期間中の出席状況と実際の実習指導の技能を総合的に評価する。											
[本講義と関連する講義]											
学術情報論、医療薬学ワークショップ											
[対応するコアカリキュラム一般目標（薬学科）]											
G（1）（2）（3）											
[教科書]											
授業中に指示する											
-----医療薬学実験技術 (2)へ続く↓↓↓-----											

医療薬学実験技術 (2)

[参考書等]

(参考書)
授業中に紹介する

[授業外学修（予習・復習）等]

基本的な技能実験技術と研究者としての基本的態度については、実験ノートにポイントを整理しておき十分復習をしておくこと。薬学専門実習の指導に際しては、実習書を十分予習するとともに指導する実験については十分準備をし、スムーズな指導が行えるよう心掛けること。これらの状況を総合的に判断して成績評価がなされるので注意すること。

(その他（オフィスアワー等）)

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング		U-PHA12 4E353 SJ86									
授業科目名 <英訳>		学術情報論 Recent Advances in Medical and Pharmaceutical Sciences				担当者所属・ 職名・氏名		薬学研究科 配属分野教員			
配当 学年	4-6回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2023・ 通年	曜時限	その他	授業 形態	演習	使用 言語	日本語
学科		薬学科			科目に対する区分		必修（薬学科）				
[授業の概要・目的]											
医療薬学研究・創薬研究に関連する最新の研究動向について、演習方式での発表と議論を通じて最先端の研究に関する知識、専門情報を扱う技能、研究に対する態度を習得する。また、各分野の研究テーマに関連した英語論文を題材に取り上げ、読解力、プレゼンテーション能力、論理的考察力、語学力等を身に付ける。少人数参加型の形式で演習を実施し、能動的に授業に臨むことで研究へのモチベーションを向上させる。さらに、学術情報の取り扱い上の留意事項や研究倫理に関する基本事項を学び、研究者としての倫理観を涵養する。											
[到達目標]											
1. 最先端の創薬研究・医療薬学研究に関する知識、専門情報を扱う技能、研究に対する態度を習得する。 2. 読解力、プレゼンテーション能力、論理的考察力、語学力等を身に付ける。 3. 学術情報の取り扱い上の留意事項や研究倫理に関する基本事項を学び、研究者としての倫理観を涵養する。											
[授業計画と内容]											
履修内容や履修計画は配属した分野によって示される。											
[履修要件]											
特になし											
[成績評価の方法・観点]											
平常点（出席および履修態度）70%、発表・質疑応答30%により評価する。演習における発表内容、議論への貢献、出席および参加状況を総合して判定する。											
[本講義と関連する講義]											
特別実習、医療薬学ワークショップ、医療薬学実験技術											
[対応するコアカリキュラム一般目標（薬学科）]											
G (1) (2) (3)											
[教科書]											
授業中に指示する											
[参考書等]											
(参考書) 授業中に紹介する											
[授業外学修（予習・復習）等]											
発表にあたっては、自分の取り上げたテーマについて十分な時間をかけて準備、資料を作成し、理解しやすいプレゼンテーション、質疑応答ができるように準備すること。発表しない場合も、積極的に討議に参加するよう心掛けること。これらの状況を総合的に判断して成績評価がなされるので注意すること。											
(その他（オフィスアワー等）)											
※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

科目ナンバリング		U-PHA12 4E354 PJ86											
授業科目名 <英訳>		医療実務事前学習【H30以降入学者用】 Pre-Training for Clinical Clerkship				担当者所属・ 職名・氏名		薬学研究科 薬学研究科 薬学研究科 薬学研究科 薬学研究科		教授 講師 助教 非常勤講師		山下 富義 喜多 知子 宗 可奈子 薬学研究科教員 医学部附属病院薬剤部教員および薬剤師 医学部附属病院医療安全管理部 教員	
配当 学年	4回生以上	単位数	2	開講年度・ 開講期	2023・ 後期	曜時限	その他	授業 形態	実習	使用 言語	日本語		
学科		薬学科				科目に対する区分		必修（薬学科）					
[授業の概要・目的]													
5年次に医療現場で実施される実務実習は、実際の処方箋に基づき調剤や注射薬調製を行い、患者さんや医療スタッフとも接する参加・体験型実習である。本授業では、実務実習をより効果的に実施するために、また、卒業後、薬剤師として臨床現場で活躍するために、大学内で実務実習に先立って、調剤及び製剤、服薬指導などの基本的知識、技能、態度を修得する。													
[到達目標]													
1. 薬剤師として臨床現場に必要な心構えと薬学的管理の基本的な流れを把握する。 2. 基本的な調剤業務（処方監査、計数調剤、計量調剤、疑義照会、調剤薬監査）を身につける。 3. 注射薬調製の基本的な無菌操作を実施できる。 4. 薬物療法上必要な患者情報を収集できる。 5. 代表的な医薬品の服薬指導を実施できる。													
[授業計画と内容]													
ユニット（１）事前学習を始めるにあたって（講義） 1. 病院・薬局における薬剤師業務全体の流れ、薬学的管理の重要性 2. 医療機関における処方オーダーリング、電子カルテと基本的記載事項 3. 患者・来局者応対と服薬指導および患者教育 4. 医薬品の供給と管理 5. 医薬品情報の収集と活用 6. 感染予防と対策における基本的考え方とその方法 ユニット（２）処方箋と調剤（講義・演習・実習） 1. 処方箋、薬袋、薬札（ラベル）の様式と必要記載事項、記載方法 2. 処方箋に従った計数調剤・計量調剤と調剤薬監査 ユニット（３）疑義照会・持参薬チェック（講義・演習・実習） 1. 注意が必要な代表的な医薬品の禁忌、用法・用量、相互作用、配合変化 2. 処方箋の監査と不適切処方の指摘および疑義照会の実施（ロールプレイ） 3. 入院患者が持参する薬剤の確認 ユニット（４）注射薬の調製（講義・演習・実習） 1. 注射薬・輸液の種類、投与方法、無菌操作の意義 2. 無菌操作の実践（手洗い、手袋・ガウンの着用、クリーンベンチを使用した注射薬混合） ユニット（５）リスクマネジメント、医療安全（講義・演習） 1. ハイリスク医薬品の特徴と注意点 2. 医薬品が関わる代表的な医療事故の原因と防止策 3. 医療安全総論、医療者－患者間／医療者間のコミュニケーションエラー 4. 薬剤誤投与事例についてのRCA（Root Cause Analysis＝根本原因分析法）を用いた多職種グループ・ディスカッション ※3, 4については、医学部医学科・人間健康科学科との合同授業とし、医学部生と混成グループを作り討議する。 ユニット（６）服薬指導（講義・演習・実習） 1. 使用上の説明が必要な製剤の取り扱い方法 2. 注意が必要な患者（妊婦、小児、高齢者、肝・腎障害）への対応 3. 患者情報の収集と服薬指導（ロールプレイ・吸入指導）													
----- 医療実務事前学習【H30以降入学者用】(2)へ続く↓↓↓ -----													

医療実務事前学習【H30以降入学者用】(2)

4. 薬物療法上の問題点と薬学的管理の立案
- ユニット（7）実務実習に向けて（事前学習まとめ）（講義）
1. 臨床における心構え（倫理規範や個人情報保護、守秘義務）
 2. 医療機関・地域におけるチーム医療と薬剤師の役割
- ユニット（8）臨床体験（講義・演習・実習）
1. 一次救命講習
 2. フィジカルアセスメント

[履修要件]

特になし

[成績評価の方法・観点]

平常点（授業への出席およびその態度、50点）、演習・実習を含むユニット中に実施する実地試験（40点）、課題レポート（10点）で評価する。授業態度とは、演習・実習への積極的な参加や作成したプロダクトの完成度によって評価する。実地試験では調剤、無菌操作、コミュニケーションスキルの習熟度を評価する。課題レポートでは、演習内容や課題に対する理解度、文章の表現力や論理性によって評価する。別途提示するルーブリックを用いての評価も行う。

[本講義と関連する講義]

医療社会学、薬物治療学、地域医療薬学、多職種連携医療体験実習、病院実務実習、薬局実務実習

[対応するコアカリキュラム一般目標（薬学科）]

A（1）、A（2）、A（3）、A（4）、F（1）、F（2）、F（3）、F（4）

[教科書]

『医療実務事前学習 実習書』
その他、授業中にプリントを配付します。

[参考書等]

（参考書）
日本薬学会 編 『スタンダード薬学シリーズⅡ-1 「薬学総論Ⅰ 薬剤師としての基本事項」, 「薬学総論Ⅱ 薬学と社会」』（東京化学同人）
日本薬学会 編 『スタンダード薬学シリーズⅡ-7 「臨床薬学Ⅰ 臨床薬学の基礎および処方箋に基づく調剤」, 「臨床薬学Ⅱ 薬物療法の実践」, 「臨床薬学Ⅲ チーム医療および地域の保健・医療・福祉への参画」』（東京化学同人）
『実務実習事前学習のための調剤学』（廣川書店）
『薬学実習生のための病院・薬局実習の手引き』（じほう）
『調剤指針』（薬事日報社）
『治療薬マニュアル』（医学書院）

[授業外学修（予習・復習）等]

本講義と関連する講義で習得した薬物治療に関する内容を復習し、処方監査や疑義照会、服薬指導にその知識を活用すること。授業内で配付するプリントや参考書等を活用し、知識の定着をはかること。

医療実務事前学習【H30以降入学者用】(3)へ続く↓↓↓

医療実務事前学習【H30以降入学者用】(3)

(その他（オフィスアワー等）)

実務実習を効果的かつ安全に実施するために非常に重要な授業です。

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

[実務経験のある教員による授業]

①分類

実務経験のある教員による実務経験を活かした授業科目

②当該授業科目に関連した実務経験の内容

該当教員：津田真弘、実務経験：京都大学医学部附属病院（薬剤師）

該当教員：宗可奈子、実務経験：京都大学医学部附属病院（薬剤師）

③実務経験を活かした実践的な授業の内容

薬剤師としての勤務経験を活かし、次年度に実施される参加体験型の薬学実務実習に向けて必要な基本的な知識、技能、態度の修得を目指す臨床準備教育を担当する。

科目ナンバリング				U-PHA12 4E355 SJ86									
授業科目名 <英訳>		臨床薬学総論 Introduction to Clinical Pharmacy				担当者所属・ 職名・氏名		薬学研究科 附属病院		教授 准教授		山下 富義 中川 貴之	
配当 学年	6回生	単位数	2	開講年度・ 開講期	2023・ 後期	曜時限	その他	授業 形態	演習	使用 言語	日本語		
学科		薬学科				科目に対する区分		必修（薬学科）					
[授業の概要・目的]													
薬学教育モデル・コアカリキュラムに従い、6年間の薬学科で履修した様々な科目の集大成として、学習内容全体を振り返って達成度を自己評価する。それによって自らの弱点や不足箇所を正しく認識し、社会から求められる医療人としての資質を満たすことを目的として、補習を含めた総合的問題演習を行う。													
[到達目標]													
1. これまでに取得した単位と成績を振り返り、自分の学習到達度を把握できる。 2. 学習到達度が不足している科目について、どのような勉強をすべきかがわかる。 3. 薬剤師国家試験に合格できるだけの知識を備える。													
[授業計画と内容]													
1. 導入：学習内容の回顧、国家試験の概要、過去の成績の統計学的解析 2ー1 5. 各科目の補習講義と問題演習：内容は年によって異なる													
[履修要件]													
特になし													
[成績評価の方法・観点]													
授業や補習への出席10%、定期試験90%とする。													
[本講義と関連する講義]													
薬物治療学、医療社会学 その他、薬学コアカリキュラムに関連するすべての科目													
[対応するコアカリキュラム一般目標（薬学科）]													
C, D, Eの全項目													
[教科書]													
授業中に指示する													
[参考書等]													
（参考書） 授業中に紹介する													
[授業外学修（予習・復習）等]													
6回生の1年間を通して、国家試験の合格に向けた勉学を自ら積み上げること。													
（その他（オフィスアワー等））													
※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。													

科目ナンバリング				U-PHA00 3C901 PJ86							
授業科目名 <英訳>		薬学専門実習Ⅰ【H30以降入学者用】 Pharmaceutical LaboratoryⅠ: Analytical and Physical Chemistry				担当者所属・ 職名・氏名		薬学研究科 薬学研究科 薬学研究科 薬学研究科 薬学研究科	准教授 准教授 准教授 助教 助教 助教	星野 杉山 小川 小形 金尾 河野	大 直幸 治夫 公亮 英佑 健一
配当 学年	3回生以上	単位数	4	開講年度・ 開講期	2023・ 前期	曜時限	その他	授業 形態	実習	使用 言語	日本語
学科		薬学部,薬科学科,薬学科				科目に対する区分		必修			
[授業の概要・目的]											
全実習を通じての基礎となる実験データの取扱いと統計処理を学んだ後、分析学及び物理化学に関する基礎的測定・解析法、すなわち、分光分析、中和滴定、分離分析、質量分析、電気化学的測定（膜表面電位・導電率・起電力）、X線結晶構造解析、タンパク質の立体構造視覚化などを実習する。											
[到達目標]											
1. 分析化学、物理化学、構造生物学に関する実験手法を習得する。 2. 得られた実験データを正しく解釈できる能力を養う。											
[授業計画と内容]											
(生体分子計測学) 1. 吸光分析：吸光分析の基礎と薬物の定量（1） 2. 吸光分析：吸光分析の基礎と薬物の定量（2） 3. 中和滴定：ファクターと真の試薬濃度の算出 4. 逆滴定：滴定法を用いたアスピリンの定量 5. HPLC：HPLCの基礎と応用、アスピリン分解速度定数の導出（1） 6. HPLC：HPLCの基礎と応用、アスピリン分解速度定数の導出（2） 7. 質量分析計：質量分析の基礎と応用、プロテオーム解析法（1） 8. 質量分析計：質量分析の基礎と応用、プロテオーム解析法（2） (薬品機能解析学) 9. NMR： ¹ H-NMRスペクトルの測定、軽水消去法 10. NMR： ¹ H-NMRスペクトルの測定、二次元スペクトルの解析 11. 薬物の膜結合性と表面電位：リポソームの調製、薬物の膜分配係数測定、Gouy-Chapman理論（1） 12. 薬物の膜結合性と表面電位：リポソームの調製、薬物の膜分配係数測定、Gouy-Chapman理論（2） 13. 導電率：イオン水和数・酢酸解離定数・臨界ミセル濃度の測定（1） 14. 導電率：イオン水和数・酢酸解離定数・臨界ミセル濃度の測定（2） 15. 濃淡電池：銀イオン濃淡電池の起電力と硝酸銀の平均活量係数の測定（1） 16. 濃淡電池：銀イオン濃淡電池の起電力と硝酸銀の平均活量係数の測定（2） (構造生物薬学) 17. タンパク質の結晶化（1） 18. タンパク質の結晶化（2） 19. X線回折実験、タンパク質立体構造決定（1） 20. X線回折実験、タンパク質立体構造決定（2） 21. X線回折実験、タンパク質立体構造決定（3） 22. タンパク質立体構造の視覚化と描画（1） 23. タンパク質立体構造の視覚化と描画（2） 24. タンパク質立体構造の視覚化と描画（3）											
薬学専門実習Ⅰ【H30以降入学者用】(2)へ続く↓↓↓											

薬学専門実習Ⅰ【H30以降入学用】(2)

【履修要件】

特になし

【成績評価の方法・観点】

平常点（実習態度）50%、レポート50%で評価する。

レポートでは分析化学、物理化学、構造生物学の実験を行う上で必要な理論、実験手法が習得できているか、得られた実験データを正しく処理できているか、処理されたデータを正しく解釈し論じることができているか、を問う。実習態度については、出席状況、実習を行う上での準備状況や実験態度について評価し、その内容を成績に加味することもある。

【本講義と関連する講義】

分析化学1・3、物理化学1・2・3・4、基礎物理化学（熱力学）、情報基礎演習など

【対応するコアカリキュラム一般目標（薬学科）】

C1(1)(2)(3), C2(1)(2)(3)(4)(5), C6(1)(2)(3)

【教科書】

『実習書』

【参考書等】

（参考書）

授業中に紹介する

【授業外学修（予習・復習）等】

あらかじめ実習書を読んで、実際に行う実験の手順などを確認し、理解しておくこと。

（その他（オフィスアワー等））

薬品機能解析学、生体分子計測学、構造生物薬学の各分野について評価し、その総合点として薬学専門実習Ⅰの成績とする。いずれかの分野が不可の場合、総合評価も不可になるので注意のこと。

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング				U-PHA00 3C902 PJ86							
授業科目名 <英訳>		薬学専門実習Ⅱ【H30以降入学者用】 Pharmaceutical Laboratory II : Organic Chemistry				担当者所属・ 職名・氏名		薬学研究科 薬学研究科 薬学研究科 薬学研究科 薬学研究科 薬学研究科 薬学研究科	准教授 准教授 准教授 講師 助教 助教 助教 特定助教	服部 明 中 寛史 井貫 晋輔 瀧川 紘 倉永 健史 南條 毅 有地 法人 黒田 悠介	
配当 学年	3回生以上	単位数	4	開講年度・ 開講期	2023・ 前期	曜時限	その他	授業 形態	実習	使用 言語	日本語
学科		薬学部,薬科学科,薬学科				科目に対する区分		必修			
[授業の概要・目的]											
有機化合物の合成・精製法の実習を通して、有機化学実験に必要な基本操作を習得する。基本的な官能基変換を実習し、知識と実際の反応を融合させる。天然アルカロイド、気管支拡張薬、抗てんかん薬、ペプチド等の多段階合成を実地に学ぶ。さらに、医薬品としての微生物代謝産物・生薬・薬用植物の取扱いを実習し、天然有機化合物の単離・同定法、標識法、標的タンパク質同定法、生薬の鑑別法、生薬製剤の調製法などを習得する。											
[到達目標]											
1. 危険物質や有害薬品の取り扱いに注意を払い、実験を安全に実施できる。 2. 適切な実験記録を取り、レポートをまとめて報告することができる。 3. 代表的な有機化学実験器具を適切に取り扱うことができる。 4. ガラス細工の基本操作を習得し、簡単なガラス器具を作成できる。 5. 液体や固体を正確かつ精密に秤量し、物質量をすばやく計算できる。 6. 有機化合物の性質に応じて、適切な方法を使い分けて有機化合物を精製できる。 7. 基本的なスペクトルデータの測定と解析を行い、化合物を同定できる。 8. 呈色反応により、化合物の持つ特徴的な構造や官能基を検出することができる。 9. 基本的な官能基の導入と変換を行うことができる。 10. 医薬品を含む目的の化合物を合成するために、代表的な炭素骨格構築を行える。 11. 適切な保護基を選択し、保護基の導入・脱保護操作を行うことができる。 12. ラセミ化を抑制して、適切にペプチド合成を行うことができる。 13. 天然有機化合物の標識と標的タンパク質同定のための基本操作を行える。 14. 生薬・薬用植物を適切に取り扱い、未知検体の鑑別を行うことができる。											
[授業計画と内容]											
実際の実習については、以下項目の幾つかを抜粋して実施する。実施内容に関する詳細は事前に連絡する。											
[A] 導入講義・実習 1. 導入講義 2. ガラス細工 3. 再結晶 4. 抽出 5. 蒸留 6. TLCとカラムクロマトグラフィー											
[B] 有機化合物の合成Ⅰ 芳香族化合物の官能基変換と天然物アルカロイドの合成 1. カルボン酸のFischerエステル化 2. Grignard反応 3. 天然アルカロイド・キシロピニンの全合成（1） 4. 天然アルカロイド・キシロピニンの全合成（2） 5. 天然アルカロイド・キシロピニンの全合成（3） 6. 天然アルカロイド・キシロピニンの全合成（4）											
-----薬学専門実習Ⅱ【H30以降入学者用】(2)へ続く↓↓↓											

薬学専門実習Ⅱ【H30以降入学者用】(2)

7. アルカロイドの全合成とGrignard反応についての討議と考察

〔C〕有機化合物の合成Ⅱ

テオフィリンとフェニトインの合成

1. ジメチル尿素とシアノ酢酸の脱水縮合反応
2. ニトロソ化反応
3. 還元反応とホルミル化反応
4. テオフィリン合成とベンゾイン縮合反応
5. 酸化反応
6. フェニトインの合成

〔D〕有機化合物の合成Ⅲ

ペプチド化学とアスパルテーム合成

1. Diels-Alder反応
2. ラセミ化抑制剤HONBの合成
3. フェニルアラニンメチルエステルの合成
4. Z化によるアミノ基の保護
5. 縮合による保護ジペプチドの合成
6. アスパルテームの合成

〔E〕天然有機化合物

天然有機化合物の取り扱いと標的タンパク質の同定

1. プローブ用スパーサーの保護
2. スパーサーとビオチンの縮合
3. ビオチン化シクロスポリンAの合成
4. シクロスポリンA標的タンパク質の単離・精製
5. シクロスポリンA標的タンパク質の検出

〔F〕生薬・薬用植物

生薬・薬用植物の取り扱い

1. 薬用植物園実習
2. 漢方製剤の作成
3. 呈色反応試験

【履修要件】

特になし

【成績評価の方法・観点】

原則としてすべての実習に参加すること。

概ね、平常点50%、レポート50%。

平常点の評価には、出席状況、技能および態度、実験操作に対する理解、安全に対する意識、実験に対する考察と実習中の議論等も含める。

レポート点は、実験ノート、予習、課題レポート等によって評価する。

【本講義と関連する講義】

基礎有機化学Ⅰ・Ⅱ、有機化学Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ、天然物薬学Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、薬用植物学、医薬品化学、創薬有機化学演習、生命有機化学演習

【対応するコアカリキュラム一般目標（薬学科）】

C2（4）（5）；C3（1）（2）（3）（4）；C4（1）（3）；C5；C6（2）（4）；C8（3）

薬学専門実習Ⅱ【H30以降入学者用】(3)へ続く↓↓↓

薬学専門実習Ⅱ【H30以降入学者用】(3)

【教科書】

『実習書』

【参考書等】

(参考書)
授業中に紹介する

(関連URL)

<http://www.chem.zenkyo.h.kyoto-u.ac.jp/>(全学共通科目化学系実験のホームページ。基本操作の動画を参考にしてください。)

【授業外学修(予習・復習)等】

毎実習前に実験の背景と目的、使用する器具や試薬についての情報、実験手順、予想される結果を予習しておくこと。

(その他(オフィスアワー等))

実験保護眼鏡と白衣を持参のこと。

実際の実習については、[授業計画と内容]に記載された項目の幾つかを抜粋して実施する。実施内容に関する詳細は事前に連絡する。

参考までに、2022年度の実施内容を記載する(2022年度は新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、実習内容を縮小した)。受講者の密集を避けるために全体を約25名のグループに分けて実施した。

オンライン講義・実習

1. 導入講義(A-1)
2. 再結晶操作(A-3)
3. 抽出操作(A-4)
4. 蒸留操作(A-5)
5. 解析実習1:機器説明・解析の基礎
6. 解析実習2:解析練習1
7. 解析実習3:解析練習2
8. 解析実習4:解析練習3
9. 解析実習5:カルボン酸のFischerエステル化(B-1)・Grignard反応(B-2)
10. 解析実習6:Diels-Alder反応(D-1)・ラセミ化抑制剤HONBの合成(D-2)
11. 解析実習7:フェニルアラニンメチルエステルの合成(D-3)・Z化によるアミノ基の保護(D-4)
12. 解析実習8:縮合による保護ジペプチドの合成(D-5)・アスパルテームの合成(D-6)

対面実習

1. カルボン酸のFischerエステル化(B-1)
2. Grignard反応(B-2)
3. Diels-Alder反応(D-1)
4. ラセミ化抑制剤HONBの合成(D-2)
5. フェニルアラニンメチルエステルの合成(D-3)
6. Z化によるアミノ基の保護(D-4)
7. 縮合による保護ジペプチドの合成(D-5)
8. アスパルテームの合成(D-6)
9. 薄層クロマトグラフィー(A-6)
10. 漢方製剤の作成(F-2)
11. 呈色反応試験(F-3)

薬学専門実習Ⅱ【H30以降入学者用】(4)へ続く↓↓↓

薬学専門実習Ⅱ【H30以降入学者用】(4)

オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング				U-PHA00 3C905 PJ86							
授業科目名 <英訳>		薬学専門実習Ⅲ【H30以降入学者用】 Pharmaceutical Laboratory III : Pharmaceutics and Pharmacology				担当者所属・ 職名・氏名		薬学研究科	講師	渡邊 裕之	
								薬学研究科	准教授	高橋 有己	
								薬学研究科	准教授	白川 久志	
								薬学研究科	教授	樋口 ゆり子	
								薬学研究科	助教	永安 一樹	
								薬学研究科	助教	三宅 崇仁	
								薬学研究科	助教	河本 佑介	
配当 学年	3回生以上	単位数	4	開講年度・ 開講期	2023・ 後期	曜時限	その他	授業 形態	実習	使用 言語	日本語
学科		薬学部,薬科学科,薬学科				科目に対する区分		必修			
[授業の概要・目的]											
本実習では、解剖学、薬理学、薬剤学、放射化学領域（医療薬科学領域）の実験を行う上で必要とされる基本的手技および、その医療薬科学研究への応用について習得する。動物の解剖および動物個体・摘出臓器標本を用いた薬物の作用点評価法および薬効試験法を実習するとともに、薬物の体内動態の解析を通じて、生体機能の生理的調節機構を理解する。また、放射線の安全取扱い、放射性医薬品の調製法、臨床検査と関連した生体内微量成分分析法を習得する。さらに各種製剤試験法、臨床試験法の実践を認識する。											
[到達目標]											
○ 動物モデルあるいは動物摘出標本を用いた中枢神経系、自律神経系、循環器系、消化器系に対する薬効評価法について説明し、代表的な薬物の効果を測定できる（生体機能解析学分野） ○ 放射線の測定原理を説明し、適切な方法で測定できる。代表的な放射性医薬品の調製および使用に関する実験手法を習得する（病態機能分析学分野） ○ 内用固形製剤適用時の薬理効果発現に影響を及ぼす、製剤の崩壊性・溶出性および医薬品の安定性、消化管からの吸収、体内動態の各過程を解析できる（病態情報薬学分野・薬品動態制御学分野） ○ 体を構成する代表的な臓器を列挙し、形態的特徴を説明できる。脳切片を作製し、顕微鏡を用いて脳細胞の形態を観察できる(システムバイオロジー分野)											
[授業計画と内容]											
1. 全体導入講義：医療系実習の概要と動物の取扱法についての講義 2. 薬理学導入講義：薬理学実習に関する講義 3. 心臓機能の調節機構：摘出心房標本に対する薬物の作用 4. 腸管収縮の制御機構：摘出腸管標本に対する薬物の作用 5. 鎮痛薬の効力判定：マウスを用いた鎮痛試験法と鎮痛薬の効果の判定 6. 行動観察による薬効評価：マウス行動観察による中枢作用薬の薬効評価 7. 二重盲検法：カフェインが作業能力に及ぼす影響の実験 8. 薬理学実習のまとめ：データ集計と統計演習 9. 放射導入講義：放射性薬品化学実習に関する講義 10. 放射線の安全取扱いとその管理：放射線測定の原理と測定法および安全取扱い・管理 11. 放射性医薬品(1)(2)：In-111標識アルブミンの作製とマウス循環血液量測定 12. 放射性医薬品(3)：Tc-99m標識MDPを用いた骨シンチグラフィ 13. 蛍光イメージング：インドシアニグリーンを用いたインビボ光イメージング・ルミノール反応の発光観察 14. 医薬品の安定性：アスピリンの安定性に関する実験と解析 15. 薬物の消化管吸収：ラット in situ小腸連続灌流法を用いた薬物の消化管吸収に関する実験と機構解析 16. ファーマコキネティクス：薬物血中濃度の推移、代謝・排泄動態に関するシミュレーション実験および解析 17. クリアランス解析：クリアランス理論に基づく薬物動態シミュレーション 18. 内用固形製剤の崩壊性・溶出性：日本薬局方収載の崩壊試験・溶出試験法 19. 神経解剖学(1): マウス脳および末梢臓器の巨視的解剖 20. 神経解剖学(2): 免疫組織化学による脳細胞の顕微鏡観察											
薬学専門実習Ⅲ【H30以降入学者用】(2)へ続く↓↓↓											

薬学専門実習Ⅲ【H30以降入学者用】(2)

【履修要件】

特になし

【成績評価の方法・観点】

レポート50%、平常点50%の割合で評価する。

- 生体における薬物の作用を適切に評価し、それらに関与する機能分子を解析できるかが問われる（生体機能解析学分野）
- 放射線の種類に応じた適切な測定ができるか、放射性薬品を安全に調製し、適切に使用できるかが問われる（病態機能解析学分野）
- 医薬品の製剤化および投与後の体内動態とそれらに影響する因子を適切に評価し、解析できるかが問われる（病態情報薬学分野・薬品動態制御学分野）
- 生体を構成する器官の名称、形態、体内での位置および機能を解剖学的に把握できるか、顕微鏡を使用し、細胞の形態を適切に観察できるかが問われる（システムバイオロジー分野）

【本講義と関連する講義】

生理学Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、薬理学Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、薬剤学Ⅰ・Ⅱ、分析化学Ⅱ・Ⅳ、ファーマコメトリスク論・バイオ医薬製剤論、創薬物理化学演習、薬物治療学、薬局方・薬事関連法規

【対応するコアカリキュラム一般目標（薬学科）】

C1(1)(3), C2(6), C6(1)(4), C7(1)(2), D2(1), E1(1), E2(1), E3(1), E4(1)(2), E5(1)(2)

【教科書】

『実習書』

【参考書等】

（参考書）
配布プロトコル

【授業外学修（予習・復習）等】

実習中に指示する。

（その他（オフィスアワー等））

医療薬科学研究を行う上で必須となる動物実験の基本的手技および放射線の基本的取扱いを学ぶとともに、動物愛護や放射線防護の意識を養う。

生体機能解析学、病態機能解析学、薬品動態制御学・病態情報薬学、システムバイオロジーの各分野について評価し、その総合点として薬学専門実習Ⅲの成績とする。いずれかの分野が不可の場合、総合評価も不可になるので注意のこと。

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング			U-PHA00 3C906 PJ86										
授業科目名 ＜英訳＞		薬学専門実習Ⅳ 【H30以降入学者用】 Pharmaceutical Laboratory IV : Biochemistry and Microbiology				担当者所属・ 職名・氏名		薬学研究科 准教授 柿澤 昌 薬学研究科 准教授 申 惠媛 薬学研究科 准教授 平澤 明 薬学研究科 講師 加藤 洋平 薬学研究科 助教 秋葉 宏樹 薬学研究科 助教 市村 敦彦 医生物学研究所 教授 伊藤 貴浩 生命科学研究科 准教授 加藤 裕教 生命科学研究科 准教授 菅田 浩司 医生物学研究所 准教授 服部 鮎奈 生命科学研究科 助教 大植 隆司 医生物学研究所 助教 沖川 沙佑美 医生物学研究所 助教 松浦 顕教					
配当 学年	3回生以上	単位数	4	開講年度・ 開講期	2023・ 後期	曜時限	その他	授業 形態	実習	使用 言語	日本語		
学科		薬学部,薬科学科,薬学科				科目に対する区分		必修					
[授業の概要・目的]													
本実習では生物化学およびゲノム創薬科学の基礎的な実験の遂行に必要な知識・技能を修得し、生命薬科学の基本概 念を理解することを目的とする。													
[到達目標]													
タンパク質 (酵素)に関する生化学の実験法を習得する 遺伝子に関する生化学の実験法を習得する 細胞間競合・コミュニケーションに関する生化学の応用実験法を習得する 動物組織・動物細胞を用いた生化学の応用実験法を習得する 培養細胞を用いた生化学の応用実験法を習得する ゲノム解析に関する実験法を習得する													
[授業計画と内容]													
○生物化学実習Ⅰ(生体分子認識学) タンパク質 (酵素)に関する生化学の実験 （１） 酵素反応の基質特異性 （２） 酵素反応の p H 依存性 （３） 酵素反応速度論と阻害機構 ○生物化学実習Ⅱ(がん・幹細胞シグナル学/医生物学研究所) 蛍光タンパク質を用いて遺伝子組換え・遺伝生化学実験 （１） 大腸菌の形質転換と表現型解析 （２） DNA・組換えタンパク質の調整と性状解析 ○生物化学実習Ⅲ(生理活性制御学/生命科学研究科) ショウジョウバエを用いた遺伝学的実験 （１） ショウジョウバエを用いたシグナル伝達経路の解析 （２） ショウジョウバエを用いた遺伝子発現制御の解析 ○生物化学実習Ⅳ(生体情報制御学) 動物細胞を用いた生化学の応用実験 （１） 動物組織の摘出、ホモジネート （２） 細胞内オルガネラ分画とマーカー検定 （３） 蛍光顕微鏡を用いた細胞内オルガネラの観察・同定													
薬学専門実習Ⅳ 【H30以降入学者用】(2)へ続く↓↓↓													

薬学専門実習Ⅳ【H30以降入学者用】(2)

○生物化学実習Ⅴ(神経機能制御学/生命科学研究所)

培養細胞を用いた生化学の応用実験

- (1) 培養細胞への遺伝子導入
- (2) 蛍光顕微鏡による細胞骨格の観察

○ゲノム創薬科学実習(ゲノム創薬科学・バイオ医薬品化学)

ゲノム解析に関する実験

- (1) ゲノムDNA遺伝子多型解析
- (2) バイオインフォマティクス入門

[履修要件]

特になし

[成績評価の方法・観点]

平常点およびレポート点を以下の割合で評価する。

生物化学実習Ⅰ、ゲノム創薬科学実習：平常点40%、レポート点60%

生物化学実習Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ：平常点50%、レポート点50%

詳細については、各実習ごとに担当教員より連絡する。

[本講義と関連する講義]

生物化学Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ、生理学Ⅲ・Ⅳ

[対応するコアカリキュラム一般目標(薬学科)]

C4(1)、C6(1)、(2)、(3)、(4)、(6)、(7)、C8(3)

[教科書]

『実習書』

[参考書等]

(参考書)

『新生化学実験講座』(東京化学同人)

『生物薬科学実験講座』(廣川書店)

『微生物学実習提要』(丸善)

[授業外学修(予習・復習)等]

各実習ごとに担当教員より連絡する

(その他(オフィスアワー等))

生物化学実習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴおよびゲノム創薬科学実習の各実習単位で評価し、その総合点を薬学専門実習Ⅳの成績とする。いずれかの分野が不可の場合、総合評価も不可になるので注意のこと。

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

科目ナンバリング				U-PHA12 4E901 PJ86									
授業科目名 <英訳>		病院実務実習【H30以降入学者用】 Clinical Clerkship in Hospital Pharmacy				担当者所属・ 職名・氏名		薬学研究科 薬学研究科 薬学研究科		教授 准教授 助教 非常勤講師		山下 富義 津田 真弘 宗 可奈子 医学部附属病院薬剤部教員および薬剤師	
配当 学年	5回生以上	単位数	10	開講年度・ 開講期	2023・ 通年	曜時限	その他	授業 形態	実習	使用 言語	日本語		
学科		薬学科				科目に対する区分		必修（薬学科）					
[授業の概要・目的]													
病院薬剤師の業務と責任を理解し、患者・生活者本位の視点に立ち、チーム医療に参画するために、調剤および医薬品管理、医薬品情報、製剤、病棟薬剤業務などの薬剤師業務に関する基本的知識、技能、態度を修得する。													
[到達目標]													
1. 病院薬剤師の業務と役割について説明できる。 2. 医療の担い手として求められる態度を習得する。 3. 処方せんに基づいた、基本的な調剤業務を習得する。 4. 個々の患者に適した薬物療法を提案・実施評価できる基本的な能力を習得する。 5. チーム医療の一員として、情報の共有とより良い医療の提案ができる。 6. 実習中に自ら設定した課題について、報告会での発表と討論を行うことができる。													
[授業計画と内容]													
1. 実習講義及びガイダンス 2. 調剤実習／薬品管理 3. がん化学療法実習 4. 製剤実習 5. 医薬品情報実習 6. 薬物血中濃度モニタリング実習 7. 治験実習 8. 病棟実習（内科及び外科） 9. アドバンスド実習 10. 実習報告会													
[履修要件]													
医療実務事前学習を修得し、薬学共用試験に合格していること。													
[成績評価の方法・観点]													
出席、実習態度、報告会での発表・討論等 実習の欠席、遅刻、早退は基本的には一切認められない。やむない理由で連絡の上、欠席等があった場合は、課題による補習を行う。実習態度は指導薬剤師による評価により行う。報告会での発表内容、態度、討論への参加状況について、総合的評価を行う。													
[本講義と関連する講義]													
薬物治療学、地域医療薬学、医療実務事前学習、薬局実務実習													
[対応するコアカリキュラム一般目標（薬学科）]													
F1(1)(2)(3)(4)													
[教科書]													
『京大病院 実務実習テキスト』													

病院実務実習【H30以降入学者用】(2)へ続く↓↓↓													

病院実務実習【H30以降入学者用】(2)

[参考書等]

(参考書)
授業中に紹介する

[授業外学修（予習・復習）等]

日々の実習終了後には、随時復習を行い、知識及び技能の修得に努める。

(その他（オフィスアワー等）)

実習は京都大学医学部附属病院において行う。

※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。

[実務経験のある教員による授業]

①分類
学外での実習等を授業として位置付けている授業科目

②当該授業科目に関連した実務経験の内容

③実務経験を活かした実践的な授業の内容

科目ナンバリング		U-PHA12 4E902 PJ86											
授業科目名 <英訳>		薬局実務実習【H30以降入学者用】 Clinical Clerkship in Community Pharmacy				担当者所属・ 職名・氏名		薬学研究科 薬学研究科 薬学研究科 薬学研究科		教授 講師 助教 非常勤講師		山下 富義 喜多 知子 宗 可奈子 薬学研究科教員 保険薬局担当薬剤師	
配当年	5回生以上	単位数	10	開講年度・ 開講期	2023・ 通年	曜時限	その他	授業形態	実習	使用言語	日本語		
学科		薬学科			科目に対する区分		必修（薬学科）						
[授業の概要・目的]													
薬局の社会的役割と責任を理解し、地域医療に参画するために、保険調剤、健康・保健衛生についての基本的な知識、技能、態度を修得する。													
[到達目標]													
1. 薬局で取り扱うアイテム（品目）の医療、保健・衛生における役割を理解し、それらの管理と保存に関する基本的知識と技能を修得する。 2. 医薬品の適正使用に必要な情報を提供できるようになるために、薬局における医薬品情報管理業務に関する基本的知識、技能、態度を習得する。 3. 薬局調剤を適切に行うために、調剤、医薬品の適正な使用、リスクマネジメントに関連する基本的知識、技能、態度を修得する。 4. 地域社会での健康管理における薬局と薬剤師の役割を理解するために、薬局カウンターでの患者、顧客の接遇に関する基本的知識、技能、態度を修得する。 5. 調剤、服薬指導、患者・顧客接遇などの薬局薬剤師の職務を総合的に学ぶ。													
[授業計画と内容]													
1. 薬局アイテムと管理（1）： 薬局アイテムの流れ、管理と保存 2. 薬局アイテムと管理（2）： 麻薬・向精神薬、劇薬・毒薬など 3. 情報のアクセスと活用（1）： 心構え、情報の入手と加工 4. 情報のアクセスと活用（2）： 情報の提供 5. 薬局調剤の実践（1）： 処方せんの受付、処方鑑査と疑義照会 6. 薬局調剤の実践（2）： 計数・計量調剤 7. 薬局調剤の実践（3）： 服薬指導 8. 薬局調剤の実践（4）： 調剤録と処方せんの保管・管理 9. 薬局調剤の実践（5）： 安全対策 10. カウンター業務（1）： 患者・来局者との接遇、顧客対応 11. カウンター業務（2）： 一般用医薬品・健康食品、健康管理 12. 地域医療（1）： 在宅医療、 13. 地域医療（2）： 地域医療・福祉 14. 地域医療（3）： 地域保健、学校薬剤師 15. 症例報告： 発表と討論													
[履修要件]													
特になし													
[成績評価の方法・観点]													
出席、レポート、発表をもとに、総合判定する。実習に対して積極的に参加し、臨床技能および態度の習熟と研鑽に努めること。													
薬局実務実習【H30以降入学者用】(2)へ続く↓↓↓													

薬局実務実習【H30以降入学用】(2)
[本講義と関連する講義]
医療社会学、地域医療薬学、医療実務事前学習、など
[対応するコアカリキュラム一般目標（薬学科）]
A(1) (2)(3)(4)、B(1)(2)(3)(4)、F(1)(2)(3)(4)(5)
[教科書]
『薬学実習生のための病院・薬局実習テキスト』（じほう）
[参考書等]
（参考書） 『スタンダード薬学シリーズ、病院・薬局実務実習I,II』（東京化学同人） 『調剤指針』（薬事日報社）
[授業外学修（予習・復習）等]
医療実務事前学習で学んだことを総復習して薬局実習に臨むとともに、実習中は毎日実習記録をつけること。また、実習中に発見した課題について時間外に調べて発表しレポートに纏めるなど、実習の基本課題以外への自主的な取り組みも評価の対象となるので注意すること。
（その他（オフィスアワー等））
※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。
[実務経験のある教員による授業]
①分類 学外での実習等を授業として位置付けている授業科目 ②当該授業科目に関連した実務経験の内容 ③実務経験を活かした実践的な授業の内容

科目ナンバリング											
授業科目名 <英訳>		特別実習（薬科学科） Research Training				担当者所属・ 職名・氏名		薬学研究科 薬学研究科教員			
配当 学年	4回生以上	単位数	6	開講年度・ 開講期	2023・ 通年	曜時限	その他	授業 形態	実習・演習	使用 言語	日本語
学科		薬科学科			科目に対する区分		必修（薬科学科）				
[授業の概要・目的]											
分野に配属して、下記の研究領域の特定の課題について研究を行う。 薬品合成化学、薬品分子化学、薬品機能解析学、構造生物薬学、生体分子計測学、精密有機合成化学、生体分子認識学、遺伝子薬学、生理活性制御学、生体情報制御学、神経機能制御学、生体機能化学、薬品動態制御学、薬品作用解析学、病態機能分析学、病態情報薬学、生体機能解析学、薬理ゲノミクス・ゲノム創薬科学、創薬有機化学、システムバイオロジー、システムケモセラピー（制御分子学）、統合ゲノミクス、分子設計情報											
[到達目標]											
薬学および薬科学に関連する研究等について、計画立案、実験実施、調査、議論、発表、レポート執筆などを通じて知識、技能、態度を習得する。また、習得した専門知識と技術を総合化し、主体的に考え、情報収集し、新たな問題の発見および問題の解決をはかる方法を構想できるようになる。											
[授業計画と内容]											
履修内容や履修計画は配属した分野によって示される。 各分野の研究テーマについては薬学研究科ホームページ参照。 http://www.pharm.kyoto-u.ac.jp/research/research-profile/											
[履修要件]											
特になし											
[成績評価の方法・観点]											
研究成果および習得した知識、技能、態度を総合的に評価して判定する。											
[本講義と関連する講義]											
薬学専門実習Ⅰ、薬学専門実習Ⅱ、薬学専門実習Ⅲ、薬学専門実習Ⅳ											
[教科書]											
配属した分野によって示される。											
[参考書等]											
（参考書） 配属した分野によって示される。											
[授業外学修（予習・復習）等]											
予習および復習すべきことは配属した分野によって示される。											
（その他（オフィスアワー等））											
※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。											

科目ナンバリング												
授業科目名 <英訳>		特別実習（薬学科） Advanced Laboratory in Medical and Pharmaceutical Sciences				担当者所属・ 職名・氏名		薬学研究科 薬学研究科教員				
配当 学年	4-6回生	単位数	10	開講年度・ 開講期	2021・ 通年	曜時限		授業 形態	実習・演習	使用 言語	日本語	
学科		薬学科			科目に対する区分		必修（薬学科）					
[授業の概要・目的]												
薬学研究科内で行われている最先端の医療薬学研究・創薬研究テーマに基づき、各配属分野において、各自の研究テーマを決定し実習を行う。実験立案、実際の実験スケジュールの実行、進捗報告会などを経験し、能動的学習態度、自己表現能力、コミュニケーション能力、問題解決能力、個人および集団の意見を整理して発表できる能力を身につける。6年次12月には薬学科全員が発表する特別実習発表会を実施する。												
[到達目標]												
1. 最先端の創薬研究・医療薬学研究を実施し、薬学における研究の位置づけを理解する。 2. 研究のプロセスを通じて、能動的学習態度、自己表現能力、コミュニケーション能力、問題解決能力を身につける。 3. 研究成果の効果的なプレゼンテーションを行い、討論できる能力を身につける。												
[授業計画と内容]												
履修内容や履修計画は配属した分野によって示される。 各分野の研究テーマについては薬学研究科ホームページ参照。 http://www.pharm.kyoto-u.ac.jp/research/research-profile/												
[履修要件]												
特になし												
[成績評価の方法・観点]												
平常点（出席および履修態度）70%、特別実習論文20%、発表会でのプレゼンテーション10%により評価する。普段の研究態度、特別実習論文、特別実習論文発表会でのプレゼンテーションと質疑を総合して判定する。特別実習論文の審査は、配属分野主任が主査、配属分野以外の複数教員が副査となり評価にあたる。この評価結果に基づき、指導教員が個別に判断して可否を判定する。												
[本講義と関連する講義]												
医療薬学ワークショップ、医療薬学実験技術、学術情報論												
[対応するコアカリキュラム一般目標（薬学科）]												
G（1）（2）（3）												
[教科書]												
配属した分野によって示される。												
[参考書等]												
（参考書） 配属した分野によって示される。												
[授業外学修（予習・復習）等]												
実習を実施する前に、医療薬学実験技術で学習した基本事項を確認すること。また、事前に学術情報論やインターネット検索等で収集した知識を整理してから実際の実習に臨むこと。実習終了後は、実験結果の整理や次の実験計画等に十分時間をかけ、効率的な実習を遂行するように心掛けること。論文や発表会だけでなく、これらの普段の実習態度も含めて成績評価がなされるので注意すること。												
（その他（オフィスアワー等））												
※オフィスアワーの詳細については、KULASISで確認してください。												

2018年度以降入学者用のモデル・コアカリキュラム/科目対応表

教育目標(一般目標)	科目名
A 基本事項	
(1) 薬剤師の使命 医療と薬学の歴史を認識するとともに、国民の健康管理、医療安全、薬害防止における役割を理解し、薬剤師としての使命感を身につける。	地域医療薬学 薬局方・薬事関連法規 薬学研究SGD演習 医薬品開発プロジェクト演習2 多職種連携医療体験実習 医療実務事前学習 薬局実務実習
(2) 薬剤師に求められる倫理観 倫理的問題に配慮して主体的に行動するために、生命・医療に係る倫理観を身につけ、医療の担い手としての感性を養う。	「薬の世界」入門 薬学研究SGD演習 多職種連携医療体験実習 医療実務事前学習 薬局実務実習
(3) 信頼関係の構築 患者・生活者、他の職種との対話を通じて相手の心理、立場、環境を理解し、信頼関係を構築するために役立つ能力を身につける。	薬学研究SGD演習 多職種連携医療体験実習 医療実務事前学習 薬局実務実習
(4) 多職種連携協働とチーム医療 医療・福祉・行政・教育機関及び関連職種の連携の必要性を理解し、チームの一員としての在り方を身につける。	多職種連携医療体験実習 医療実務事前学習 薬局実務実習
(5) 自己研鑽と次世代を担う人材の育成 生涯にわたって自ら学ぶことの必要性・重要性を理解し、修得した知識・技能・態度を確実に次世代へ継承する意欲と行動力を身につける。	情報基礎 情報基礎演習 薬学研究SGD演習 医薬品開発プロジェクト演習1
B 薬学と社会	
人と社会に関わる薬剤師として自覚を持って行動するために、保健・医療・福祉に係る法規・制度・経済、及び地域における薬局と薬剤師の役割を理解し、義務及び法令を遵守する態度を身につける。	
(1) 人と社会に関わる薬剤師 人の行動や考え方、社会の仕組みを理解し、人・社会と薬剤師の関わりを認識する。	医療社会学 医薬品開発プロジェクト演習1 薬局実務実習
(2) 薬剤師と医薬品等に係る法規 調剤、医薬品等(医薬品、医薬部外品、化粧品、医療機器、再生医療等製品)の供給、その他薬事衛生に係る任務を薬剤師として適正に遂行するために必要な法規とその意義を理解する。	医療社会学 薬局方・薬事関連法規 医薬品開発プロジェクト演習1 薬局実務実習
(3) 社会保障制度と医療経済 社会保障制度のもとで提供される医療と福祉について、現状と課題を認識するとともに、薬剤師が担う役割とその意義を理解する。	地域医療薬学 医療社会学 薬局方・薬事関連法規 医薬品開発プロジェクト演習1 薬局実務実習
(4) 地域における薬局と薬剤師 地域の保健、医療、福祉について、現状と課題を認識するとともに、その質を向上させるための薬局及び薬剤師の役割とその意義を理解する。	地域医療薬学 医療社会学 薬局実務実習
C 薬学基礎	
C1 物質の物理的性質 物質の物理的性質を理解するために、原子・分子の構造、熱力学、反応速度論などに関する基本的事項を身につける。	
(1) 物質の構造 物質を構成する原子・分子の構造、および化学結合に関する基本的事項を修得する。	基礎物理化学(熱力学) 基礎有機化学Ⅰ 有機化学Ⅰ 有機化学Ⅱ 有機化学Ⅲ 生命有機化学演習 物理化学Ⅰ(量子化学) 物理化学Ⅱ(電気化学・ナノ化学) 物理化学Ⅲ(構造化学) 物理化学Ⅳ(生物物理化学) 分析化学Ⅰ(化学分析) 分析化学Ⅱ(放射化学) 分析化学Ⅲ(機器分析化学) 基礎科学演習 薬剤学Ⅰ(製剤学) 基礎バイオインフォマティクス 臨床薬学総論 薬学専門実習Ⅰ 薬学専門実習Ⅲ

2018年度以降入学者用のモデル・コアカリキュラム/科目対応表

教育目標(一般目標)	科目名
(2)物質のエネルギーと平衡 物質の状態を理解するために、熱力学に関する基本的事項を修得する。	基礎物理化学(熱力学) 基礎有機化学Ⅱ 有機化学Ⅱ 物理化学Ⅱ(電気化学・ナノ化学) 物理化学Ⅳ(生物物理化学) 分析化学Ⅰ(化学分析学) 基礎科学演習 基礎バイオインフォマティクス 臨床薬学総論 薬学専門実習Ⅰ
(3)物質の変化 物質の変換過程を理解するために、反応速度論に関する基本的事項を修得する。	分析化学Ⅱ(放射化学) 基礎科学演習 薬剤学Ⅰ(製剤学) 臨床薬学総論 薬学専門実習Ⅰ 薬学専門実習Ⅲ
C2 化学物質の分析 化学物質(医薬品を含む)を適切に分析できるようになるために、物質の定性、定量に関する基本的事項を修得する。	
(1)分析の基礎 化学物質の分析に用いる器具の使用法と得られる測定値の取り扱いに関する基本的事項を修得する。	基礎化学実験 分析化学Ⅰ(化学分析学) 分析化学Ⅲ(機器分析化学) 基礎科学演習 臨床薬学総論 薬学専門実習Ⅰ
(2)溶液中の化学平衡 溶液中の化学平衡に関する基本的事項を修得する。	基礎物理化学(熱力学) 物理化学Ⅱ(電気化学・ナノ化学) 分析化学Ⅰ(化学分析学) 基礎科学演習 臨床薬学総論 薬学専門実習Ⅰ
(3)化学物質の定性分析・定量分析 化学物質の定性分析および定量分析に関する基本的事項を修得する。	基礎化学実験 分析化学Ⅰ(化学分析学) 基礎科学演習 薬局方・薬事関連法規 臨床薬学総論 薬学専門実習Ⅰ
(4)機器を用いる分析法 機器を用いる分析法の原理とその応用に関する基本的事項を修得する。	基礎化学実験 天然物薬学Ⅱ(ケミカルバイオロジー) 物理化学Ⅰ(量子化学) 物理化学Ⅲ(構造化学) 物理化学Ⅳ(生物物理化学) 分析化学Ⅲ(機器分析化学) 基礎科学演習 臨床薬学総論 薬学専門実習Ⅰ 薬学専門実習Ⅱ
(5)分離分析法 分離分析法に関する基本的事項を修得する。	基礎化学実験 天然物薬学Ⅱ(ケミカルバイオロジー) 物理化学Ⅳ(生物物理化学) 分析化学Ⅰ(化学分析学) 分析化学Ⅲ(機器分析化学) 臨床薬学総論 薬学専門実習Ⅰ 薬学専門実習Ⅱ
(6)臨床現場で用いる分析技術 臨床現場で用いる代表的な分析技術に関する基本的事項を修得する。	分析化学Ⅲ(機器分析化学) 分析化学Ⅳ(臨床分析学) 臨床薬学総論 薬学専門実習Ⅲ
C3 化学物質の性質と反応 化学物質を理解できるようになるために、代表的な有機化合物の構造、性質、反応、分離法、構造決定法、および無機化合物の構造と性質に関する基本的事項を修得する。	

2018年度以降入学者用のモデル・コアカリキュラム/科目対応表

教育目標(一般目標)	科目名
(1)化学物質の基本的性質 基本的な有機化合物の命名法、電子配置、反応、立体構造などに関する基本的事項を修得する。	基礎化学実験 基礎有機化学Ⅰ 基礎有機化学Ⅱ 有機化学Ⅰ 有機化学Ⅱ 有機化学Ⅲ 有機化学Ⅳ 生命有機化学演習 天然物薬学Ⅰ(天然物化学) 物理化学Ⅰ(量子化学) 分析化学Ⅲ(機器分析化学) 創薬有機化学演習 臨床薬学総論 薬学専門実習Ⅱ
(2)有機化合物の基本骨格の構造と反応 有機化合物の基本骨格となる脂肪族および芳香族化合物の構造、性質、反応性などに関する基本的事項を修得する。	基礎有機化学Ⅰ 基礎有機化学Ⅱ 有機化学Ⅰ 有機化学Ⅱ 有機化学Ⅲ 有機化学Ⅳ 生命有機化学演習 創薬有機化学演習 物理化学Ⅰ(量子化学) 臨床薬学総論 薬学専門実習Ⅱ
(3)官能基の性質と反応 官能基を有する有機化合物の性質、反応性に関する基本的事項を修得する。	基礎有機化学Ⅰ 基礎有機化学Ⅱ 有機化学Ⅰ 有機化学Ⅱ 有機化学Ⅲ 有機化学Ⅳ 生命有機化学演習 物理化学Ⅰ(量子化学) 臨床薬学総論 創薬有機化学演習 薬学専門実習Ⅱ
(4)化学物質の構造決定 代表的な機器分析としての核磁気共鳴(NMR)、赤外吸収(IR)、質量分析による構造決定法の基本的事項を修得する。	天然物薬学Ⅱ(ケミカルバイオロジー) 創薬有機化学演習 分析化学Ⅲ(機器分析化学) 臨床薬学総論 薬学専門実習Ⅱ
(5)無機化合物・錯体の構造と性質 代表的な無機化合物・錯体(医薬品を含む)の構造、性質に関する基本的事項を修得する。	基礎化学実験 創薬有機化学演習 分析化学Ⅰ(化学分析学) 臨床薬学総論
C4 生体分子・医薬品の化学による理解 医薬品の生体内での作用を化学的に理解できるようになるために、医薬品標的および医薬品の構造と性質、生体反応の化学に関する基本的事項を修得する。	
(1)医薬品の標的となる生体分子の構造と化学的な性質 医薬品の標的となる生体分子の基本構造と、その化学的な性質に関する基本的事項を修得する。	医薬品化学 天然物薬学Ⅰ(天然物化学) 天然物薬学Ⅱ(ケミカルバイオロジー) 生命有機化学演習 物理化学Ⅲ(構造化学) 物理化学Ⅳ(生物物理化学) 生物化学Ⅲ(分子生物学) 生理学Ⅰ(基礎生理学) 生理学Ⅱ(病態生理学) 生理学Ⅲ(臨床生理学) 基礎バイオインフォマティクス 臨床薬学総論 薬学専門実習Ⅱ 薬学専門実習Ⅳ

2018年度以降入学者用のモデル・コアカリキュラム/科目対応表

教育目標(一般目標)	科目名
(2)生体反応の化学による理解 医薬品の作用の基礎となる生体反応の化学的理解に関する基本的事項を修得する。	天然物薬学Ⅰ(天然物化学) 天然物薬学Ⅱ(ケミカルバイオロジー) 有機化学Ⅰ 有機化学Ⅱ 有機化学Ⅲ 医薬品化学 生命有機化学演習 物理化学Ⅲ(構造化学) 物理化学Ⅳ(生物物理化学) 生理学Ⅰ(基礎生理学) 生理学Ⅱ(病態生理学) 生理学Ⅲ(臨床生理学) 基礎バイオインフォマティクス 臨床薬学総論
(3)医薬品の化学構造と性質、作用 医薬品に含まれる代表的な構造およびその性質を医薬品の作用と関連づける基本的事項を修得する。	有機化学Ⅱ 医薬品化学 天然物薬学Ⅰ(天然物化学) 天然物薬学Ⅱ(ケミカルバイオロジー) 生命有機化学演習 物理化学Ⅲ(構造化学) 物理化学Ⅳ(生物物理化学) 分析化学Ⅲ(機器分析化学) 基礎バイオインフォマティクス 臨床薬学総論 薬学専門実習Ⅱ
C5 自然が生み出す薬物 自然界に存在する物質を医薬品として利用できるようになるために、代表的な生薬の基原、特色、臨床応用および天然生物活性物質の単離、構造、物性、作用などに関する基本的事項を修得する。	
(1)薬になる動植物 基原、性状、含有成分、品質評価などに関する基本的事項を修得する。	薬用植物学 天然物薬学Ⅱ(ケミカルバイオロジー) 天然物薬学Ⅲ(生薬学・漢方) 臨床薬学総論 薬学専門実習Ⅱ
(2)薬の宝庫としての天然物 医薬品資源としての天然生物活性物質を構造によって分類・整理するとともに、天然生物活性物質の利用に関する基本的事項を修得する。	薬用植物学 天然物薬学Ⅰ(天然物化学) 天然物薬学Ⅱ(ケミカルバイオロジー) 天然物薬学Ⅲ(生薬学・漢方) 臨床薬学総論 薬学専門実習Ⅱ
C6 生命現象の基礎 生命現象を細胞レベル、分子レベルで理解できるようになるために、生命体の最小単位である細胞の成り立ちや生命現象を担う分子に関する基本的事項を修得する。	
(1)細胞の構造と機能 細胞膜、細胞小器官、細胞骨格などの構造と機能に関する基本的事項を修得する。	健康・生命科学入門 天然物薬学Ⅰ(天然物化学) 天然物薬学Ⅱ(ケミカルバイオロジー) 生物化学Ⅱ(代謝生化学) 生物化学Ⅲ(分子生物学) 生物化学Ⅴ(細胞生物学) 生物化学Ⅵ(生理化学) 生理学Ⅰ(基礎生理学) 生理学Ⅱ(病態生理学) 生理学Ⅲ(臨床生理学) 臨床薬学総論 薬学専門実習Ⅰ 薬学専門実習Ⅲ 薬学専門実習Ⅳ

2018年度以降入学者用のモデル・コアカリキュラム/科目対応表

教育目標(一般目標)	科目名
(2)生命現象を担う分子 生命現象を担う分子の構造、性質、役割に関する基本的事項を修得する。	健康・生命科学入門 天然物薬学Ⅰ(天然物化学) 天然物薬学Ⅱ(ケミカルバイオロジー) 生命有機化学演習 物理化学Ⅱ(電気化学・ナノ化学) 物理化学Ⅲ(構造化学) 物理化学Ⅳ(生物物理化学) 生物化学Ⅰ(物質生化学) 生物化学Ⅱ(代謝生化学) 生物化学Ⅲ(分子生物学) 生物化学Ⅴ(細胞生物学) 生物化学Ⅵ(生理化学) 生理学Ⅰ(基礎生理学) 生理学Ⅱ(病態生理学) 生理学Ⅲ(臨床生理学) 臨床薬学総論 薬学専門実習Ⅰ 薬学専門実習Ⅱ 薬学専門実習Ⅳ
(3)生命活動を担うタンパク質 生命活動を担うタンパク質の構造、性質、機能、代謝に関する基本的事項を修得する。	健康・生命科学入門 有機化学Ⅲ 天然物薬学Ⅰ(天然物化学) 天然物薬学Ⅱ(ケミカルバイオロジー) 生命有機化学演習 物理化学Ⅲ(構造化学) 物理化学Ⅳ(生物物理化学) 生物化学Ⅰ(物質生化学) 生物化学Ⅱ(代謝生化学) 生物化学Ⅲ(分子生物学) 生物化学Ⅴ(細胞生物学) 生物化学Ⅵ(生理化学) 生理学Ⅰ(基礎生理学) 生理学Ⅱ(病態生理学) 生理学Ⅲ(臨床生理学) 臨床薬学総論 薬学専門実習Ⅰ 薬学専門実習Ⅳ
(4)生命情報を担う遺伝子 生命情報を担う遺伝子の複製、発現と、それらの制御に関する基本的事項を修得する。	健康・生命科学入門 天然物薬学Ⅰ(天然物化学) 天然物薬学Ⅱ(ケミカルバイオロジー) 生命有機化学演習 物理化学Ⅲ(構造化学) 生物化学Ⅲ(分子生物学) 生物化学Ⅳ(応用生物分子科学) 生物化学Ⅴ(細胞生物学) 生理学Ⅰ(基礎生理学) 生理学Ⅱ(病態生理学) 生理学Ⅲ(臨床生理学) 基礎バイオインフォマティクス 臨床薬学総論 薬学専門実習Ⅱ 薬学専門実習Ⅲ 薬学専門実習Ⅳ
(5)生体エネルギーと生命活動を支える代謝系 生体エネルギーの産生、貯蔵、利用、およびこれらを担う糖質、脂質、タンパク質、核酸の代謝に関する基本的事項を修得する。	健康・生命科学入門 生物化学Ⅰ(物質生化学) 生物化学Ⅱ(代謝生化学) 生物化学Ⅴ(細胞生物学) 生理学Ⅰ(基礎生理学) 生理学Ⅱ(病態生理学) 生理学Ⅲ(臨床生理学) 臨床薬学総論
(6)細胞間コミュニケーションと細胞内情報伝達 細胞間コミュニケーション及び細胞内情報伝達の方法と役割に関する基本的事項を修得する。	健康・生命科学入門 物理化学Ⅳ(生物物理化学) 生物化学Ⅴ(細胞生物学) 生物化学Ⅵ(生理化学) 生理学Ⅰ(基礎生理学) 生理学Ⅱ(病態生理学) 生理学Ⅲ(臨床生理学) 薬理学Ⅰ 臨床薬学総論 薬学専門実習Ⅳ

2018年度以降入学者用のモデル・コアカリキュラム/科目対応表

教育目標(一般目標)	科目名
(7)細胞の分裂と死 細胞周期と分裂、細胞死に関する基本的事項を修得する。	健康・生命科学入門 生物化学Ⅲ(分子生物学) 生物化学Ⅴ(細胞生物学) 生物化学Ⅵ(生理化学) 生理学Ⅰ(基礎生理学) 生理学Ⅱ(病態生理学) 生理学Ⅲ(臨床生理学) 臨床薬学総論 薬学専門実習Ⅳ
C7 人体の成り立ちと生体機能の調節 人体の成り立ちを個体、器官、細胞の各レベルで理解できるようになるために、 人体の構造、機能、調節に関する基本的事項を修得する。	
(1)人体の成り立ち 遺伝、発生、および各器官の構造と機能に関する基本的事項を修得する。	健康・生命科学入門 生物化学Ⅲ(分子生物学) 生物化学Ⅴ(細胞生物学) 生物化学Ⅵ(生理化学) 生理学Ⅰ(基礎生理学) 生理学Ⅱ(病態生理学) 生理学Ⅲ(臨床生理学) 薬理学Ⅰ 薬理学Ⅱ 臨床疾病論A 臨床疾病論B 臨床疾病論C 臨床疾病論D 臨床疾病論E 臨床疾病論F 臨床疾病論G 臨床薬学総論 薬学専門実習Ⅲ
(2)生体機能の調節 生体の維持に関わる情報ネットワークを担う代表的な情報伝達物質の種類、 作用発現機構に関する基本的事項を修得する。	健康・生命科学入門 臨床薬学総論 生物化学Ⅵ(生理化学) 生理学Ⅰ(基礎生理学) 生理学Ⅱ(病態生理学) 生理学Ⅲ(臨床生理学) 薬理学Ⅰ 臨床疾病論A 臨床疾病論B 臨床疾病論C 臨床疾病論D 臨床疾病論E 臨床疾病論F 臨床疾病論G 薬学専門実習Ⅲ
C8 生体防御と微生物 生体の恒常性が崩れたときに生ずる変化を理解できるようになるために、免疫 反応による生体防御機構とその破綻、および代表的な病原微生物に関する基 本的事項を修得する。	
(1)身体をまもる ヒトの主な生体防御反応としての免疫応答に関する基本的事項を修得する。	感染防御学Ⅰ 感染防御学Ⅱ 臨床薬学総論 臨床疾病論D 臨床疾病論F
(2)免疫系の制御とその破綻・免疫系の応用 免疫応答の制御とその破綻、および免疫反応の臨床応用に関する基本的事 項を修得する。	感染防御学Ⅰ 感染防御学Ⅱ 臨床薬学総論 臨床疾病論D 臨床疾病論F
(3)微生物の基本 微生物の分類、構造、生活環などに関する基本的事項を修得する。	天然物薬学Ⅰ(天然物化学) 天然物薬学Ⅱ(ケミカルバイオロジー) 生物化学Ⅲ(分子生物学) 感染防御学Ⅰ 感染防御学Ⅱ 臨床薬学総論 薬学専門実習Ⅱ 薬学専門実習Ⅳ
(4)病原体としての微生物 ヒトと微生物の関わりおよび病原微生物に関する基本的事項を修得する。	生物化学Ⅲ(分子生物学) 感染防御学Ⅰ 感染防御学Ⅱ 臨床薬学総論

2018年度以降入学用モデル・コアカリキュラム/科目対応表

教育目標(一般目標)	科目名
D 衛生薬学	
D1 健康	
人々の健康増進、公衆衛生の向上に貢献できるようになるために、現代社会における疾病とその予防、栄養と健康に関する基本的知識、技能、態度を修得する。	
(1)社会・集団と健康 人々(集団)の健康と疾病の現状およびその影響要因を把握するために、保健統計と疫学に関する基本的事項を修得する。	衛生薬学Ⅰ(健康化学) 臨床薬学総論
(2)疾病の予防 健康を理解し疾病の予防に貢献できるようになるために、感染症、生活習慣病、職業病などについての現状とその予防に関する基本的事項を修得する。	衛生薬学Ⅰ(健康化学) 地域医療薬学 臨床薬学総論
(3)栄養と健康 食生活が健康に与える影響を科学的に理解するために、栄養と食品機能、食品衛生に関する基本的事項を修得する。	衛生薬学Ⅰ(健康化学) 臨床薬学総論
D2 環境	
人々の健康にとってより良い環境の維持と公衆衛生の向上に貢献できるようになるために、化学物質などのヒトへの影響、適正な使用、および地球生態系や生活環境と健康との関わりにおける基本的知識、技能、態度を修得する。	
(1)化学物質・放射線の生体への影響 化学物質などの生体への有害作用を回避し、適正に使用できるようになるために、化学物質の毒性などに関する基本的事項を修得する。	分析化学Ⅱ(放射化学) 衛生薬学Ⅱ(環境衛生学) 地域医療薬学 臨床薬学総論 臨床疾病論B 薬学研究SGD演習 薬学専門実習Ⅲ
(2)生活環境と健康 地球生態系や生活環境を保全、維持できるようになるために、環境汚染物質などの成因、測定法、生体への影響、汚染防止、汚染除去などに関する基本的事項を修得する。	衛生薬学Ⅱ(環境衛生学) 薬学研究SGD演習 臨床薬学総論
E 医療薬学	
E1 薬の作用と体の変化	
疾病と薬物の作用に関する知識を修得し、医薬品の作用する過程を理解する。	
(1)薬の作用 医薬品を薬効に基づいて適正に使用できるようになるために、薬物の生体内における作用に関する基本的事項を修得する。	薬理学Ⅰ 薬物治療学 物理化学Ⅳ(生物物理化学) 生理学Ⅱ(病態生理学) 生理学Ⅲ(臨床生理学) 臨床疾病論A 臨床疾病論B 臨床疾病論C 臨床疾病論D 臨床疾病論E 臨床疾病論F 臨床疾病論G 臨床薬学総論 薬学専門実習Ⅲ
(2)身体の病的変化を知る 身体の病的変化から疾患を推測できるようになるために、代表的な症候、病態・臨床検査に関する基本的事項を修得する。	分析化学Ⅳ(臨床分析学) 生理学Ⅲ(臨床生理学) 薬物治療学 臨床疾病論A 臨床疾病論B 臨床疾病論C 臨床疾病論D 臨床疾病論E 臨床疾病論F 臨床疾病論G 臨床薬学総論
(3)薬物治療の位置づけ 医療チームの一員として薬物治療に参画できるようになるために、代表的な疾患における治療と薬物療法に関する基本的事項を修得する。	薬物治療学 医療社会学 臨床薬学総論
(4)医薬品の安全性 医療における医薬品のリスクを回避できるようになるために、有害事象(副作用、相互作用)、薬害、薬物乱用に関する基本的事項を修得する。	薬理学Ⅱ 医療社会学 臨床薬学総論
E2 薬理・病態・薬物治療	
患者情報に応じた薬の選択、用法・用量の設定および医薬品情報・安全性や治療ガイドラインを考慮した適正な薬物治療に参画できるようになるために、疾病に伴う症状などの患者情報を解析し、最適な治療を実施するための薬理、病態・薬物治療に関する基本的事項を修得する。	

2018年度以降入学用モデル・コアカリキュラム/科目対応表

教育目標(一般目標)	科目名
(1)神経系の疾患と薬 神経系・筋に作用する医薬品の薬理および疾患の病態・薬物治療に関する基本的知識を修得し、治療に必要な情報収集・解析および医薬品の適正使用に関する基本的事項を修得する。	生理学Ⅱ(病態生理学) 生理学Ⅲ(臨床生理学) 薬理学Ⅰ 薬理学Ⅱ 臨床疾病論C 臨床疾病論D 臨床疾病論F 臨床薬学総論 薬学専門実習Ⅲ
(2)免疫・炎症・アレルギーおよび骨・関節の疾患と薬 免疫・炎症・アレルギーおよび骨・関節に作用する医薬品の薬理および疾患の病態・薬物治療に関する基本的知識を修得し、治療に必要な情報収集・解析および医薬品の適正使用に関する基本的事項を修得する。	薬理学Ⅱ 臨床疾病論D 薬物治療学 臨床薬学総論
(3)循環器系・血液系・造血器系・泌尿器系・生殖器系の疾患と薬 循環器系・血液・造血器系・泌尿器系・生殖器系に作用する医薬品の薬理および疾患の病態・薬物治療に関する基本的知識を修得し、治療に必要な情報収集・解析および医薬品の適正使用に関する基本的事項を修得する。	生理学Ⅱ(病態生理学) 生理学Ⅲ(臨床生理学) 薬理学Ⅲ 臨床疾病論A 臨床疾病論D 臨床疾病論E 臨床疾病論G 薬物治療学 臨床薬学総論
(4)呼吸器系・消化器系の疾患と薬 呼吸器系・消化器系に作用する医薬品の薬理および疾患の病態・薬物治療に関する基本的知識を修得し、治療に必要な情報収集・解析および医薬品の適正使用に関する基本的事項を修得する。	生理学Ⅲ(臨床生理学) 薬理学Ⅲ 臨床疾病論A 臨床疾病論B 臨床疾病論G 薬物治療学 臨床薬学総論
(5)代謝系・内分泌系の疾患と薬 代謝系・内分泌系に作用する医薬品の薬理および疾患の病態・薬物治療に関する基本的知識を修得し、治療に必要な情報収集・解析および医薬品の適正使用に関する基本的事項を修得する。	生理学Ⅱ(病態生理学) 生理学Ⅲ(臨床生理学) 臨床疾病論C 臨床疾病論G 薬物治療学 臨床薬学総論
(6)感覚器・皮膚の疾患と薬 感覚器・皮膚の疾患と薬の薬理作用・機序および副作用に関する基本的知識を修得し、治療に必要な情報収集・解析および医薬品の適正使用に関する基本的事項を修得する。	生理学Ⅲ(臨床生理学) 臨床疾病論B 臨床疾病論E 臨床薬学総論
(7)病原微生物(感染症)・悪性新生物(がん)と薬 病原微生物(細菌、ウイルス、真菌、原虫)、および悪性新生物に作用する医薬品の薬理および疾患の病態・薬物治療に関する基本的知識を修得し、治療に必要な情報収集・解析および医薬品の適正使用に関する基本的事項を修得する。	天然物薬学Ⅰ(天然物化学) 天然物薬学Ⅱ(ケミカルバイオロジー) 感染防御学Ⅱ 臨床疾病論B 臨床疾病論F 薬物治療学 臨床薬学総論
(8)バイオ・細胞医薬品とゲノム情報 医薬品としてのタンパク質、遺伝子、細胞を適正に利用するために、それらを用いる治療に関する基本的知識を修得し、倫理的態度を身につける。併せて、ゲノム情報の利用に関する基本的事項を修得する。	生理学Ⅲ(臨床生理学) 薬物治療学 臨床薬学総論
(9)要指導医薬品・一般用医薬品とセルフメディケーション 適切な薬物治療および地域の保健・医療に貢献できるようになるために、要指導医薬品・一般用医薬品およびセルフメディケーションに関する基本的知識を修得する。併せて、薬物治療実施に必要な情報を自ら収集するための基本的事項を修得する。	医療社会学 地域医療薬学 臨床薬学総論
(10)医療の中の漢方薬 漢方の考え方、疾患概念、代表的な漢方薬の適応、副作用や注意事項などに関する基本的事項を修得する。	薬用植物学 天然物薬学Ⅱ(ケミカルバイオロジー) 天然物薬学Ⅲ(生薬学・漢方) 臨床薬学総論
(11)薬物治療の最適化 最適な薬物治療の実現に貢献できるようになるために、治療に必要な情報収集・解析および医薬品の適正使用に関する基本的事項を修得する。	薬物治療学 地域医療薬学 臨床薬学総論
E3 薬物治療に役立つ情報 薬物治療に必要な情報を医療チームおよび患者に提供したり、処方設計を提案したり、臨床上の問題解決ができるようになるために、医薬品情報ならびに患者情報の収集・評価・加工、臨床研究デザイン・解析などに関する基本的知識を修得し、それらを活用するための基本的事項を身につける。	

2018年度以降入学者用のモデル・コアカリキュラム/科目対応表

教育目標(一般目標)	科目名
(1)医薬品情報 医薬品情報の収集・評価・加工・提供・管理・評価、EBMの実践、生物統計ならびに臨床研究デザイン・解析に関する基本的事項を修得する。	薬物治療学 医療社会学 臨床薬学総論 薬学専門実習Ⅲ
(2)患者情報 患者からの情報の収集、評価に必要な基本的事項を修得する。	薬物治療学 臨床薬学総論
(3)個別化医療 薬物治療の個別化に関する基本的事項を修得する。	ファーマコメトリクス論 医療社会学 臨床薬学総論
E4 薬の生体内運命 薬物の生体内運命を理解し、個々の患者の投与設計ができるようになるために、薬物の体内動態およびその解析に関する基本的知識を修得し、それらを応用する基本的技能を身につける。	
(1)薬物の体内動態 吸収、分布、代謝、排泄の各過程および薬物動態学的相互作用に関する基本的事項を修得する。	薬剤学Ⅱ(薬物動態学) ファーマコメトリクス論 臨床薬学総論 薬学専門実習Ⅲ
(2)薬物動態の解析 薬物動態の理論的解析ならびに投与設計に関する基本的事項を修得する。	薬剤学Ⅱ(薬物動態学) ファーマコメトリクス論 臨床薬学総論 薬学専門実習Ⅲ
E5 製剤化のサイエンス 製剤化の意義と製剤の性質を理解するために、薬物と製剤材料の物性、製剤設計、および薬物送達システムに関する基本的事項を修得する。	
(1)製剤の性質	物理化学Ⅱ(電気化学・ナノ化学) 薬剤学Ⅰ(製剤学) バイオ医薬製剤論 臨床薬学総論 薬学専門実習Ⅲ
(2)製剤設計 製剤の種類、製造、品質などに関する基本的事項を修得する。	薬剤学Ⅰ(製剤学) バイオ医薬製剤論 臨床薬学総論 薬学専門実習Ⅲ
(3)DDS(Drug Delivery System:薬物送達システム) 薬物の投与形態や薬物体内動態の制御法などを工夫したDDSに関する基本的事項を修得する。	薬剤学Ⅰ(製剤学) 薬剤学Ⅱ(薬物動態学) バイオ医薬製剤論 臨床薬学総論
F 薬学臨床	
患者・生活者本位の視点に立ち、薬剤師として病院や薬局などの臨床現場で活躍するために、薬物療法の実践と、チーム医療・地域保健医療への参画に必要な基本的事項を修得する。	
(1)薬学臨床の基礎 医療の担い手として求められる活動を適切な態度で実践するために、薬剤師の活躍する臨床現場に必要な心構えと薬学的管理の基本的な流れを把握する。	多職種連携医療体験実習 医療実務事前学習 病院実務実習 薬局実務実習
(2)処方せんに基づく調剤 処方せんに基づいた調剤業務を安全で適正に遂行するために、医薬品の供給と管理を含む基本的調剤業務を修得する。	分析化学Ⅳ(臨床分析学) 薬物治療学 医療社会学 医療実務事前学習 薬局実務実習 病院実務実習
(3)薬物療法の実践 患者に安全・最適な薬物療法を提供するために、適切に患者情報を収集した上で、状態を正しく評価し、適切な医薬品情報を基に、個々の患者に適した薬物療法を提案・実施・評価できる能力を修得する。	薬物治療学 医療実務事前学習 薬局実務実習 病院実務実習
(4)チーム医療への参画【A(4)参照】 医療機関や地域で、多職種が連携・協力する患者中心のチーム医療に積極的に参画するために、チーム医療における多職種の役割と意義を理解するとともに、情報を共有し、より良い医療の検討、提案と実施ができる。	地域医療薬学 医療社会学 多職種連携医療体験実習 医療実務事前学習 薬局実務実習 病院実務実習

2018年度以降入学者用のモデル・コアカリキュラム/科目対応表

教育目標(一般目標)	科目名
(5)地域の保健・医療・福祉への参画【B(4)参照】 地域での保健・医療・福祉に積極的に貢献できるようになるために、在宅医療、地域保健、福祉、プライマリケア、セルフメディケーションの仕組みと意義を理解するとともに、これらの活動に参加することで、地域住民の健康の回復、維持、向上に関わることができる。	地域医療薬学 医療社会学 薬局実務実習
G 薬学研究	
薬学・医療の進歩と改善に資するために、研究を遂行する意欲と問題発見・解決能力を身につける。	
(1)薬学における研究の位置づけ 研究マインドをもって生涯にわたり医療に貢献するために、薬学における研究の位置づけを理解する。	基礎化学実験 「薬の世界」入門 情報基礎 情報基礎演習 薬学研究SGD演習 医薬品開発プロジェクト演習1 医療薬学ワークショップ 医療薬学実験技術 学術情報論 特別実習(薬学科)
(2)研究に必要な法規範と倫理 自らが実施する研究に係る法令、指針を理解し、それらを遵守して研究に取り組む。	基礎化学実験 「薬の世界」入門 情報基礎 情報基礎演習 医療薬学ワークショップ 医療薬学実験技術 学術情報論 特別実習(薬学科)
(3)研究の実践 研究のプロセスを通して、知識や技能を総合的に活用して問題を解決する能力を培う。	基礎化学実験 情報基礎 情報基礎演習 医薬品開発プロジェクト演習1 医療薬学ワークショップ 医療薬学実験技術 学術情報論 特別実習(薬学科)